正何者の一

小史澤述

訂なし

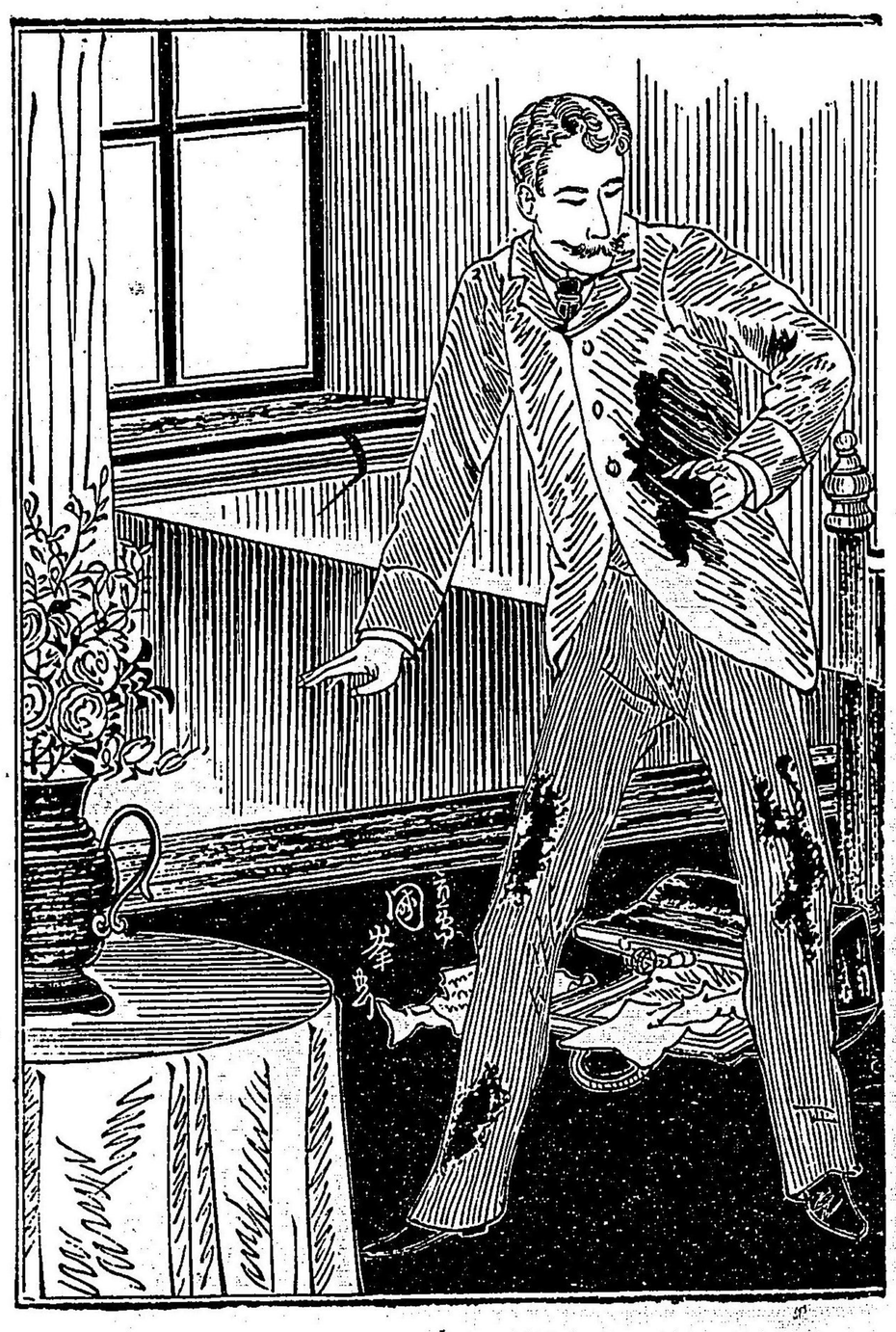
序

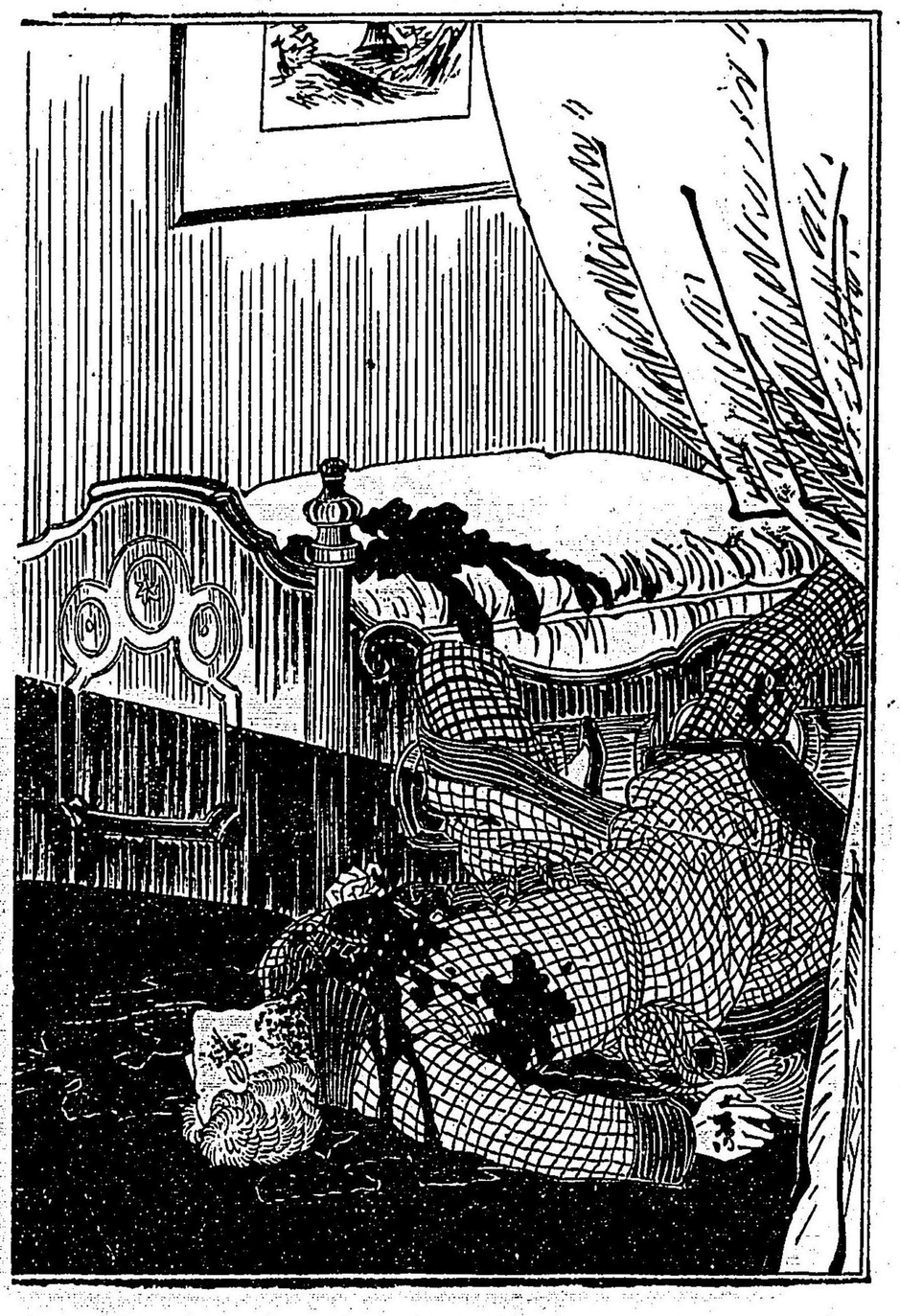
人生死の最も傷魂なるい冤を飲で断頭塲裡の露と化去るも在り左れバ古人も罪の疑はしきい刑する勿れと倩々古來老吏の断獄の法を見るよ其本を推し根に遡り鞫躬盡瘁して猶ほ所あれやも尚往々冤魂をして迷はしむるものなきよ非ず而して今日に至りていい探偵の術非常に進歩を成し一縷の頭髪半片紙尚採て以て刑餘の人を捕へ得べく恰も一面の照魔鏡を以て森羅萬象を映し來るが如く正邪曲直のある所明らかにして現れ是れ傷魂の極なり断腸の最なり讀み去り讀み來て絶々冤を叫ぶの聲なきよ方り何者の一篇を繙るの間身体悚然として粟の肌に生ずるを覺ゆ身を以て裁判の重事よ委ぬるもの坐右の箴となすよ足るべし眞に個れ凄助涙の鉅匠ボアスゴベ先生の大手筆たるに恥ぢず加ふるに

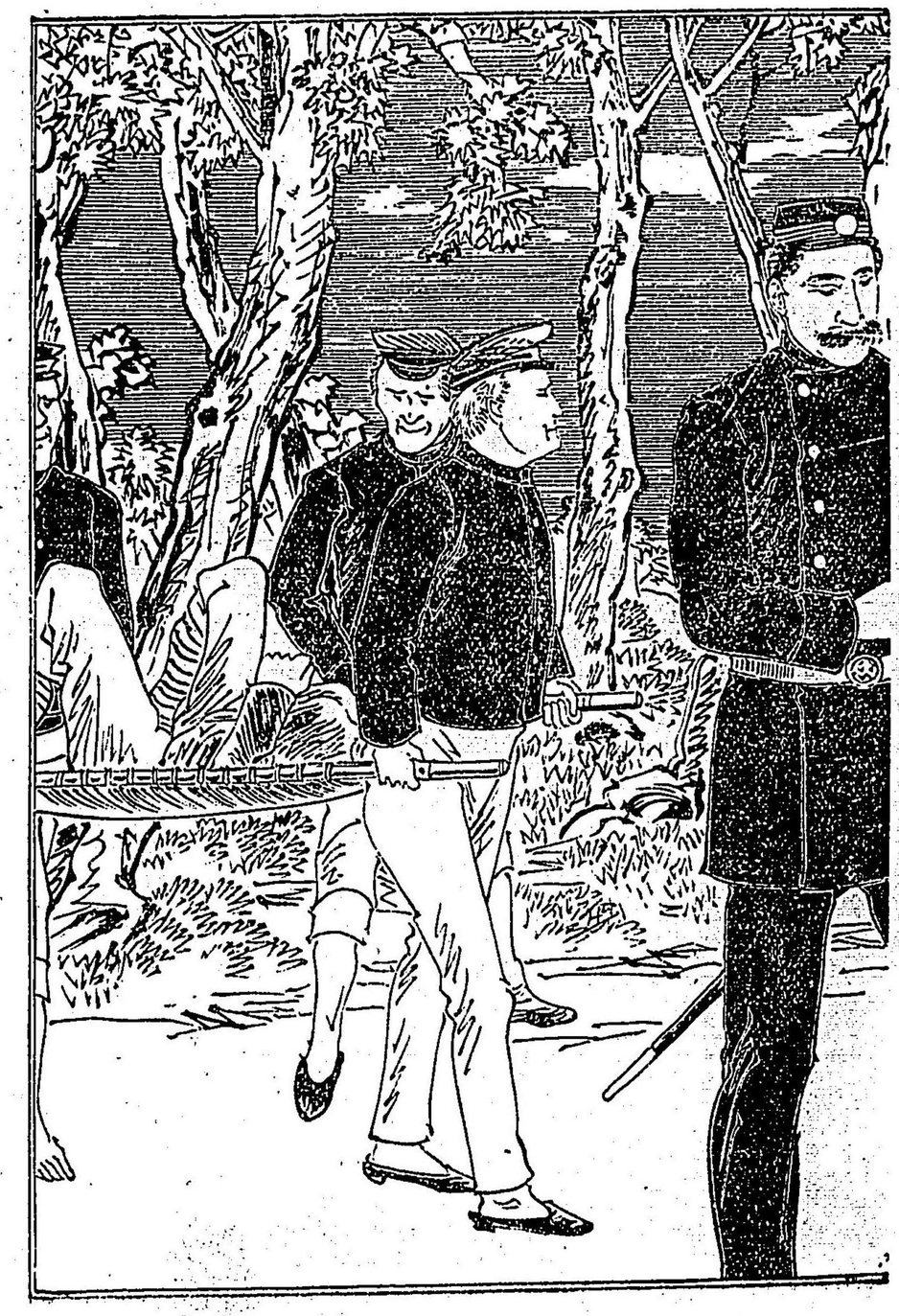
譯者涙香小史の筆質實を主として浮華を競はず艶陽四月爛漫の觀なきも三多沍寒松柏後凋の勢あり單刀直入直ちよ炎所を衝くの筆を以て悽絶愴絶の文字を寫し出す一々肯綮の所涙多き者泣くべし血氣多き者怒るべし都新聞紙上幾多の看客を叫ばしめ罵らしめ慨ましめ狂はしめ恍として夢現の間よ彷徨せしめたるい實に此何者の一篇にして譯者の力亦鉅なりと云ふべし書肆今一部の書と成すよ蒐み序を予よ求む塗鴉の筆金玉の文字を汚さん事を怖るれども而も亦辭すべからざるものあり筆を把て敢て序す盲蛇物よ恐れざるの類のみ

明治廿四年五月綠蔭正に深き時都新聞編輯局に

井上笠園詞







特13
799

正訂何者

第一回

黒岩涙香譯

噫是れ空前絶後の大裁判なり、罪人い何者ぞ何が爲めに其罪を犯したるや、判事も知らず檢察官も知らず、辨護人も亦知らず、傍聽人固より知らざるなり、知ずして宣告し知ずして死刑よ處せられし者幾人ぞ、思へバ痛ましき限ならずや、玆にい先づ

せんとす、古來罪おくして死刑に處せられし檢察官澤部忠氏の家內より說初む

此頃法學者の仲間よ澤部忠氏と云へバ誰知ぬ者もなし、數年前初て撿事に任せられてより年年に出世し、今い全佛國の代言辨護人を恐しめ罪人を恐れしむ、他日大審院撿事長に進むい必す此人なるべし、此人何故よ斯くも速に出世するぞ、唯其才智の銳くして辨舌の最逞しきが爲よ聞く、此人の論告ぢい如何ある代言人も遣込られ、如何なる罪人も罪に落さるアナ恐ろしき舌一枚と云ふべし

澤部忠氏の家い重罪裁判所より遠からぬペシユム街と云ふ靜なる町よ在り此人の妻近子と云へるい毛村商會とて手廣く鐵物を取扱ふ家の主人毛村何某の娘なり、此何某い其商賣にて許多の身代を拵へ今い齷齪と稼ぐに及ばずとて店を他人に讓渡し有丈の身代を黃金にして之を銀行よ

預け置き其利子を引出して我儘勝手よ此世を遊び暮せり、人之を毛村隠居と云ふ誠よ淡ましき身の上なり、斯る人が何故其娘近子を縁もなき撿察官に嫁らせしや、或人の説にて近子の綺麗と云ひ身代と云ひ王公貴族の令夫人たるよ足る故、父も一頃ハ充分の望みを起し是ゟ彼ゟに択びよ択びて、決せずよ日を送るうち、近子に虫が、而も素性の悪き虫が、附たりとの評ありしより、急ぎて婿夫を定めねばあらぬ事となり、取敢ず其頃近子の許へ出入したる澤部忠氏に與へ且餘程の身代さへ分送りしと云ふ、此噂ハ固より二三人の云ふ事にて虚ゟ誠ゟ當にならず、近子が婚禮後最正しく其所天よ仕へ一たびも家内よ波風の起らぬを見れば多分無根の説なるべし夫等ハ扨置き今朝ハ澤部忠氏近子と共に毎もより早く起き、今しも共々に食事を終り、卓子に向ひし儘、共に何事をゟ打語れり、忠氏ハ法廷に出んとて既に夫々の服を着け近子も孰にゟ出行んとする如く外出の服を身に纏へり、忠氏ハ近子の顔を眺めて「ジャアお前何うしても傍聴よ出掛るのゟ」近「ハイ何うぞ遣て下さい其積で此通り仕度しましたゟ」忠「でも今まで其様な事を云た事もないのよ今度よ限り—」近「今度の裁判ハ大層不思儀な事件だと云ひますもの、巴里中の女が出掛けるのに肝腎の撿察官の妻が行ぬとハ餘り殘念でハありませんゟ夫に貴方が手柄を現し人に褒られる所を見たいと思ひまして」忠「左様サ今度の罪人よ一旨く罪よ落せば必ず六ケ月の中よ一等進むテ」近「夫はよ大事の裁判ですもの家に居てハ心配でなりません最ゟ傍聴席を一人分、取てあるが、お前の顔が目よ附くと巳が其方へ氣を取下ッたと仰有ッたにやありませんゟ」忠「取ていわるが、お前の顔が目よ附くと巳が其方へ氣を取

れて旨く發言れぬゟも知れぬ」近「其様な事がありますものゟ、私しハ隅の方へ小くなッて居ますもの」忠「ジャ仕方がない連て行ふ、が お前の阿父さんよでも相談すれば行なと云ふに極ッて居るせ」近子ハ父と聞き少し驚きしも口早に「アレ後で阿父さんに知せていゝ了せまんよ後生ですゟら」と云ひ捨て早々に茲を出、我居間へと退けば居間にハお古とて年頃三十四五位の侍婢、近子の脱捨たる着物なぞ盤み居れり、抑此古子と云へるハ初毛村の家に仕へ近子を守育てし女にして近子が此家へ嫁く時、共に來りし者なれば毛村家及び此澤部家の内幕ハ殆ど近子よりも詳しく知れり、去れば用心深き女にして且ハ痛く近子を愛する故、他言なぞする事決してなく近子が爲よハ唯一人の相談對手なり「古「貴方、何の帽子を召しますゟ」近「何れでも好いよ」古「でハ黒いのに遊ばせ旨よござなくて好ハ座いませうし」と云ひ終りて心配氣に聲を潜め「ですが貴女、行しッて好ハ座いますゟ」近子も同じく心配氣に四邊を見廻し「險呑ハ險呑さ、だけれども、私しハ初めて夫と聞た時ゟら最ゟ丁度三月の間心配で〳〵でならないの、何ゟ言渡を受る事ゟと思ふと夜の目も碌に寐られないよ」古「貴女の代りよ私しが傍聽に行てハ何でせう、貴女若し氣絶でもなさつてハ大變ですよ」近「爾さ私も夫が心配なの、若し彼人と分ッたら本統に氣絶しや仕ないゟと思ふよ、けれども充分心を落着けて愚悟して居るゟら」古「でも私しの方が大丈夫ですよ」近「爾だ一層お前に行て貰はうゟ、お前彼人の顔を知て居る子」古「知て居なくて何うしませうと云ふ折しも戸の外より澤部忠氏の聲として「サア〳〵最ゟ仕度が出來たのゟ〳〵」二人ハビクリとして顔見合

せしが、近子い「エ、最う仕方がない、思ひ切て自分で行ふ」とて匆々に出行けり、澤部夫人近子い何を斯く心配せるや

第二回

近子い所天に手を引れ裁判所を指して家を出たり、素より派出よ着飾れるにい非ざるも生れ得ての美人あれば道行く人も振返るばうりなり、去れど其美くしき容貌の中に物思はしき風情見ゆ、所天澤部忠氏い今日の論告こそ我出世の階段なれば如何にして辨護人に遣込めんと云ひて罪人を挫き呉んと唯夫のみを心よ掛け近子が顔色の尋常ならぬにい氣も附ず、歩みながらも言葉を發し「實よ奇妙だ、此様な面白い事件い又となない、犯罪の證據が悉く揃ッて、其罪人まで分りながら罪人の身の上が分らぬと云ふのだうら恐らく空前絶後だらう」近子い玆ぞ氣に掛る節なれば恐々ながら問掛けて「誰も其被告とうの身の上を知らぬと云ふが本統ですう」本統だうら不思儀じやないう、裁判官も何うして見破らうと思ふうら各國の裁判所や監獄へも問合せ警察探偵ともに及ぶ丈の力を盡すけれど何うしても分らぬ、唯分ッたのい其者がチケトン街の宿屋で米國人を殺し大金を奪ッたと云ふ點ばうりで、今まで何所に住ひ、何を職業よして居たう、何所の者で誰に育て上られた人間う更よ分らぬ、或探偵い尋ね飽倦て是い必ず月世界うら落て來た人間だらうと云ッた程だ」近子「新聞紙で見ますと名前も自分の名前でないと云ひますが」忠「固より自分の名前であいのサ、丁切れ眞ッ二と云ふ可笑い名前が何所にある者う、幾度聞ても私しの名前い丁切れ眞二と云ふのですと返事するばうりで、夫いナニ其方の綽名だらう、戸籍上の名い別におらうと推問ふてもイヤ綽名う何うで呼れた事いありませんと答へるのだ、強情い強情さね。丁切眞ッ二ッと云ふ其可笑い名前で裁判を受る積で居るのだうら夫に其様子を見ると腹の中で裁判官を輕蔑して竊に笑て居るでいないと思はれる様な風があるので豫審判事が猶は悔がり様々に手を盡したけれど何うしても仕方がない、併しナニ己の辨舌に叶ふ者う、今日い見事に遣込めて首切臺へ上して遣る」と忠氏が一言〳〵熱心を加ふる度に、忠氏よ引うるゝ近子の手先い震々と振ひ出せど忠氏い熱心の餘り心も附ず「強情奴を死刑に落すほど愉快な事いない、唯心配なのい辨護人が有名な春木博士だうら必ず巧に辨護するだらうと思ふが、此春木を負して仕舞へば最う恐る者いない」近「其被告い年が未若いとう云ますが」忠「爾サ三十一うと二よ好で何うとも云へぬが大抵の人が此様な美男子を見た事がないと噂して居る」近「夫に上等社會よ育ッた人間だと聞ましたが」忠「爾サ何うしても爾思はれる、何しろ手足の柔うな所を見れば決して荒仕事を仕た者でいなく、殊に言葉が極上等の貴族調だ、夫うと思へば盜坊などの符牒を充分に知て居て、探偵などに向ッてい總て判事にも分らぬ符牒を以て返事をする、何でも好い家に生れながら零落れて極々下等社會に交ッたのでせうう、此様な奴い隨分世間にないでもないて近ですが廣い世界ですうら一人位い其男の顔を知て居る者があり相な者ですのに」忠「あり相な

者だのにないうら、不思儀だ、尤も人込の場所へ出して十日も洒して置けバ、己が知て居ると云ふ人が出て來るうも知れぬけれど其様な事い出來ず、今まで各所の監獄を引廻し顔の廣い罪人や親方株にも見せたけれど誰一人知た者がないと、辯護人春木の説でい傍聽人の中に必ず知た者があるだらうと云ふ事だ、けれども夫い當にならぬサ、近「でも誰とも知れぬ人を裁判するい隨分可哀相な者ですヱ、身分の分る迄待つ事い出來ませんう、忠「夫を待たぬのが此方の仕合せさ愈々何の何某で今まで斯々の事をして居たと詳しく分れバ平々凡々の人殺しで夫を死刑に落したとて何の手柄にもならぬ、今上下一般に何者だらうと怪んで居る其際に裁判して仕舞へバ此澤部忠が急に名高い人になり今年の中よ期と昇進すると云ふ者、何でも罪人さへあれバ必ず罪に落すと云ふのが此方の職務だうら」と我を忘れて勇み上れバ近子い益々青くなるのみ、此上い堀て問ふべき氣力もなく又忠氏も辨論の腹案に急がしき故推して話さんともせず、無言の儘に歩み〳〵て早くも裁判所の門よ達せバ、三ケ月以來世の大問題となりたる裁判が愈々公判に附せらるゝ當日なれバ、後れて傍聽席よ入得ぬ人、推も返されぬ程あれど檢察官の入口い又別に設けある故、忠氏い是より入りて堂廷の役人を呼び之に近子を托すれバ近子い其案内に從ひて容易に傍聽席へと入込みぬ、抑も此度の裁判いチケトン街の人殺しとて世に知れ、其罪人の外の罪人と異なるが爲めに上下の大評判となりたる事件なり、罪人い何者ぞ何人も知ると能はず、樣々の臆説ありて或い貴族の落胤なりと云ひ或い必ず貴夫人の情夫にして名譽を厭ふが爲よ身の上を隱せるならんと云ひ、人樣々に言囃せど素より取留たる所あし、今日の裁判こそ愈愈其收留を附くるならんと人々の待構へたるも無理ならじ

第三回

溢るゝばうりに詰掛けたる傍聽人を如何なる人人うと見れバ外國の公使貴顯もあり爵附の夫人方もあり、唯一人の「丁切れ眞ッ二ッ」てふ怪き名の被告人い能く巴里の上等社會を殘らず茲に引集めたる者と云ふべし、ア、彼れ如何にして斯までも評判高くなりたるや、澤部近子の就たるい傍聽席の一番前よ當る所にして、被告及び辯護人席の横手なり、辯護人席にい代言人の服を着けたる幾人の若き紳士あり、是等い悉く眞の代言人にい非るべく多くバ傍聽券を貰後れしより辯護人よ賴みて代言人の服を借り其弟子の如く見せ掛けて入込たる殿原あらん、近子い目よ立つはを美しき女なれバ其席よ就くが否や是等の殿原を初め其邊に居並べる婦人方、直に眼を注げり去れを近子い日頃餘りよ外出せざれバ撿察官の妻なりとい知る者絶えてなきよ似たりと云へ近子い見らるゝ度に消も入度き思ひあり空く測き覆面を引卸せを我面を覆すよ足らず果い唯首を垂れて目を閉づるのみ、目を閉づるとい共よ歷々と耳に入るい邊に坐せる人々の語聲なり「甲「今日い何しろ雄辯の兩大關と云はれたる澤部撿察官と春木辯護人の顏合せだうら夫だけでも充分の値打がある」乙「辯い春木の方が一層上だせ」甲「併し事件が事件で撿察官の方よい充分の證據が揃ツて居るうら幾等春木の辯舌でも仕方があるまひ」乙「僕い受合て置く、春木い佶と罪人

の眞實の身の上を知て居るのだせ、夫で愈々結局と云ふ所に至れバ罪人が貴族の息子でありながら我家の名を汚さぬ爲め故と名前を隱して居る其心根實に憐れむべきに非ずやとう何とう云て旨く陪審員の感情に訴へ丸で芝居の様な事ゟなる也、併し家名を汚さぬ爲めと云ふより我愛する女の名譽を保護する爲めと言ふ方が受る子ヱ、斯見渡した所で此傍聽席ハ殆ど婦人方が六分を占て居るうら」と口々に評すれど誰一人近子が心中を察する者なし、此時忽ち一聲高く叫びて「靜に〳〵」と傍聽人を制するハ掌廷の役人なり、是より愈々裁判を開うんとす、此制止を聞きて傍聽席ハ頓ゟ物の聲を絶ちしが其間に裁判長及び陪席判事を初め十二人の陪審員、檢察官辯護人等執れも式の如く席に就けり、是等の人々ハ職務柄とて既に斯る事に慣れたれバ傍聽人とハ違ひ左まで心を動さず最落着て眞面目なり唯一人檢察官澤部忠氏ハ年猶若く血氣餘りありて此事件を晴の戰場と思へるだけに心自ゟら靜なる能はず、身を高くして絶えず傍聽人を見渡せり、見渡す眼、計らずも近子の眼と見交して笑みたれど近子ハ笑を返す氣力もなし、平服の時に見る我が所天とハ殆ど別人の如く最嚴めしく見ゆるにぞ竊に恐れを懷くめり、忠氏より少し離れ相對ひて席を構ふる辯護人春木氏ハ年四十を少し過ぎ、最も圓滑なる人にして忠氏の嚴めしきに打て代り何人をも唯一目にて懷る如き風采あり、傍聽人ハ二人の樣子を見較べて最負も最負に噂せり、此時近子の右手よ二人の貴夫人ありて一人ハ三十足らず一人ハ四十恰好にて共に交際社會に立交る身分なりとハ其身姿にて察せらる、年上の夫人年下に向ひて「裁判官の着る服

も惡くハありませんヂヱ、檢察官などハ隨分立派じやありますよ私しの矢張春木辯護人が最負ですワ、「最負も最負でないもありません私しハ唯だ辯護人が何うして罪人を無罪よすれバ好と思ひます「ナニ貴方、人を殺して金を盜む樣な奴ですものの碌な者でハありますまい死刑にするが後々の爲うと思ひますワ「だッて金を盜だと言ふ證據ハない相です、捕縛した時直に身体を檢めたけれど金ハ持て居なうッたと云ふ事です「夫ハ捕縛される前、何所へうか隱したのでせう「隱したう隱さぬう爾まで詳しい所ハ分りませんが、私しハ金でなく必ず情婦の爲だらうと思ますよ「夫にしても其情婦とハ何者でせう人殺しをする樣な汚はしい男を愛するとハ私しハ其顏が見度と思ひます」と一方ハ被告を憐み一方ハ之を憎む譯もあり話なれど近子ハ之を聞きて宛も針の莚よ座らされし想ひあり、斯る時しも正面に在る裁判長、被告を之に連出せと命ずれバ傍聽人ハ今ぞ「丁切れ眞ッ二ツ」の玉顏を拜む時來ぬと思ふ如く一樣に話を罷め、橫手の潛戶に眼を注ぐ此潛戶即ち罪人の入口なり、頓て潛戶を推開きて入來る役人、其後より眞ッ二ツも引き續き來るうと思へバ何事か起りたるならんと思ふうち役人ハ裁判官の前よ行き低き聲にて何事をう相談し又辯護人の許に行き同じ樣に打語る、愈々被告が身の上に故障の起りし證據ならんと人々一齊に辯護人の擧動に氣を附くれバ、辯護人春木博士ハ立て裁判長ハ向ひ二言三言細語し末、自ら役人の後に從ひ潛戶を出去りしハ何故にや、素より傍聽人の知得る所に非ず、辯護人の傍に在りし彼の

殿原い役人の言葉を洩れ聞きたると見えロ々に打語る「被告が公判廷へ引出されるゞ否だと言出たとよ「公判廷へ出れゞ自分の顔を知た人が居ると恐れるのだらう「ナニ爾でいない評議室まで來て撿察官の姿を見て急に故障を言立、若し無理よ引出せゞ何を問はれても決して返事をせぬと言出し何うしても動かぬとよ「氣儘千万な被告じやあいう、何でも撿察官の嚴しき姿を見て恐しくなつたに違ひない、何しろ春木博士が連に行たら今に來るだらう」近子い此問答を洩聞て扨い罪人、我所天の顔を見て急に出廷を拒むに至りしと思へゞ、心も更に心ならず今更傍聽に來りたるを後悔すれど、去れゞとて氣に掛る所い益々氣に掛り宛も其身を針附にせられし如く、立つにも立れず動きも得せず此時又も殿原の聲として「ソレ春木博士が唯一人で歸ッて來た愈々被告が強情を張ると見える」と言ふ聲に驚きて首を擧れゞ如何にも辯護人單身よて歸り來り、立上りて判事に向ひ何事をう言はんとす、斯と見て滿廷い水打ちし如くに鎭まれり、春木博士い裁判長と陪審員を半々に見渡して「私くしの辯護する被告人い唯今急に神經の發病にて出廷と拒みます、今となりて故障を言ふい各位に對し、不敬よ當り當人の身にも不利益で有ますうら充分其旨を說諭い致しましたゞ何分にも一身一家の名譽を厭ひ、身を捨ても家名を白狀せぬとまで決心したる憐むべき境遇よ迫ッて居る身の上でそうら幾重よも賢察ありて惡しうらず思し召れん事を願ひます、彼の本名家名を知らぬ者い充分に彼れの憐むべき境遇を察する事が出來ませんが、數多き傍聽者の中にい必ず彼れの顏に見覺えあり彼れの心中を

察する方がありませうと樣子ありげに述終れり、個い傍聽人中彼れの身分を知る者あらゞ、知らせ呉れとの意なるべし、傍聽人い銘々其心の中よて、若し何れゝにて逢見し事ある人にいあらぬゝ、若し何程なれゞ我が顏色を隱すに由なく空く首を垂れて控ゆるのみ、暫くにして被告い愈々入來りしと見え、隣席の婦人たち口々に「先ア、可哀想ぢやあいう「アノ樣な人が何うして恐ろしい罪を犯したゞらう「アレ髮の毛の恰好能く伸て居る事「傍覽なさい好い眉ぢやないう「眉より眼許がアレ何うも」と一人々々皆「丁切れ眞ッ一」の容貌に醉されたる者の如し、近子い最早堪へ兼、疎く胸を推鎭め、垂れし首を擧げ來りて其眼を初めて罪人の顏に注ぎぬ

第四回

近子い初て眼を開き、罪人の顏を眺めたり、此時罪人い二人の憲兵に連られて彼の潛戶より入來り設けの席よ身を置きしが此席い宛も一方の窓に面ひたる所よ在る故、窓明にて罪人の顏い明うに認らる、如何にも婦人方の細語く如く類稀なる美男子なり、去れゞ婦人一般に持囃す京人形の如く美しき無精神の美男子よ非ず又女よしても見なはしき柔形の美男子に非ず唯其顏一面の上に何所となく凜乎たる所ありて冒し難き風采を備へ、男子も之を慕ひ小兒も之に懷くの概あり、溫たるい玉なるを知る、俊たるい花なるを知る、俊として月の中天に懸るゞ如く限りなき

奥床しさを包める者ゝ夫此罪人なるゥ、丁切眞二てふ其名前ゝ最可笑けれど孰れの深窓よ人と
ありたる貴公子ぞ、身に纏へるゝ稍や着古したる旅行服よして殆ど見る影もなき程なれど行儀
能く着こなして身体よ副へるゝ何人の前に出るも恥ぢしらず、近子ゝ此姿を見て忽ち顔色を
青くせしも猶は其氣力を失はず、意中人ゥ、意中人に非ざるうと充分に眺め廻せど何しろ涙の中
に分れてより既に數年を經し事と云ひ顔の表に雨よ惱み風に撲れたる艱難辛苦の痕さへ見え、
昔日の阿蒙にあらぬ所あれど自ら疑ひに迷ひ夫ぞとも見定め得ず、今にも其聲を聞ゥど我が疑
ひ全く晴れんと愈々取調べを待つ中に判事ゝ聲を上て「被告起立せよ」と呼ぶ、眞二ゝヱゝ蒼蠅
と云ふ如き樣子にて厭々ながら立上るゝ、初め出廷を拒みしも春木辯護人に說諭され止こ得ず
引出されし爲なるべし、去れど尋常の罪人の如く更よ惡怯し所なきゝ此被告の見所と云ふべし
判「其方の名前ゝ」被「丁切眞二ッ」と殆ど聞取難き程の聲にて答ふ、判「丁切眞二とゝ綽名であらう何
うして其綽名を附けられた」被告ゝ答ふるの要なしと云ふ如く無言にて其肩を動すのみ、判「返事
!!出來ぬと云ふのじやな、其方の年齡ゝ」被「知ま せん」判「知ません 判「何所よ住で居る」被「牢屋の中に住
被「ありません 判「何所よ住で居ます」何等の大膽ぶ何等の奇言ぞ、判事ゝ
叱る如き調子を交へて「夫ゝ三月前に捕縛されてうらの事、其以前ゝ何所よ住居した」被「何所に
も住居致しません 判「其方ゝ初うら其通り強情を張通す氣うゝ被「ハイ
張通します」實に手剛き相手なり、一筋繩にゝ掛らずと見て取りて判事ゝ更に言葉を柔げ深く
嘆息する調子よて「其方の不利益だぞ、飽までも身分を隱せゞ當方でゝ今までよ重き罪を犯した
者と見認るぞ」 被告ゝ唯肩を聳うものみ「勝手に見認められよ」との意を示せり、判事ゝ是
より稍暫し無言よて被告ぶ心の醜へるを待つ樣子ありしも其功更に見えざれゞ「是うら其方の
罪狀を讀上るうら座よ就て靜に聞け、讀上た上で又問ふうら其時ゝ充分に返事せぬと後悔して
も取返しの就ぬ事よなるぞ」と嚴うに言渡せゞ被告ゝ最靜に座よ復り最靜に腰を卸しぬ、其有
樣ゝ最早や裁判も受倦たりと云ふに似たり、傍聽人ゝ口々に「ヱ、何うだ、落着た者じやないう、
自分で罪を犯した者ゝ決してアノ眞似ゝ出來ぬ眞の罪人ゝ必ず外に在るせ」と云ひ「ナニ、何度
も罪を犯したうら面の皮ぶ固ッて平氣の洒アになつたのだ」と細語くもあり、近子ゝ今までも
被告の言ふ所を聞居たれど其言葉短くして且ゝ最低けれゞ充分其聲を聞分得ず、幸ひよ被告も
猶は妾ぶ茲に來り居る事を知ざれど若し何うの拍子にて目と目を見交す事ともならゞ如何にす
べき、妾ぶ顔の色動きて他人に怪まるゝ事とならゞ如何にせん、近子ゝ唯心配の重るのみなれ
ゞ此上被告の顔を眺むる能はず、愈々罪狀を讀上る事とあらゞ其中に幾分う思ひ當る所もあら
ん、如何にして人を殺し如何にして捕はれしや其等の詳しき所をも知るを得んと、再び首を打
垂れて罪狀の讀上を待つのみなり、判事ゝ此時書記に命じ罪狀を讀上げしめたり、被告「丁切眞
二」ぶ如何なる罪にて、如何よして捕はれしやゝ此罪狀にて分明あり

「丁切眞二」氏の罪狀

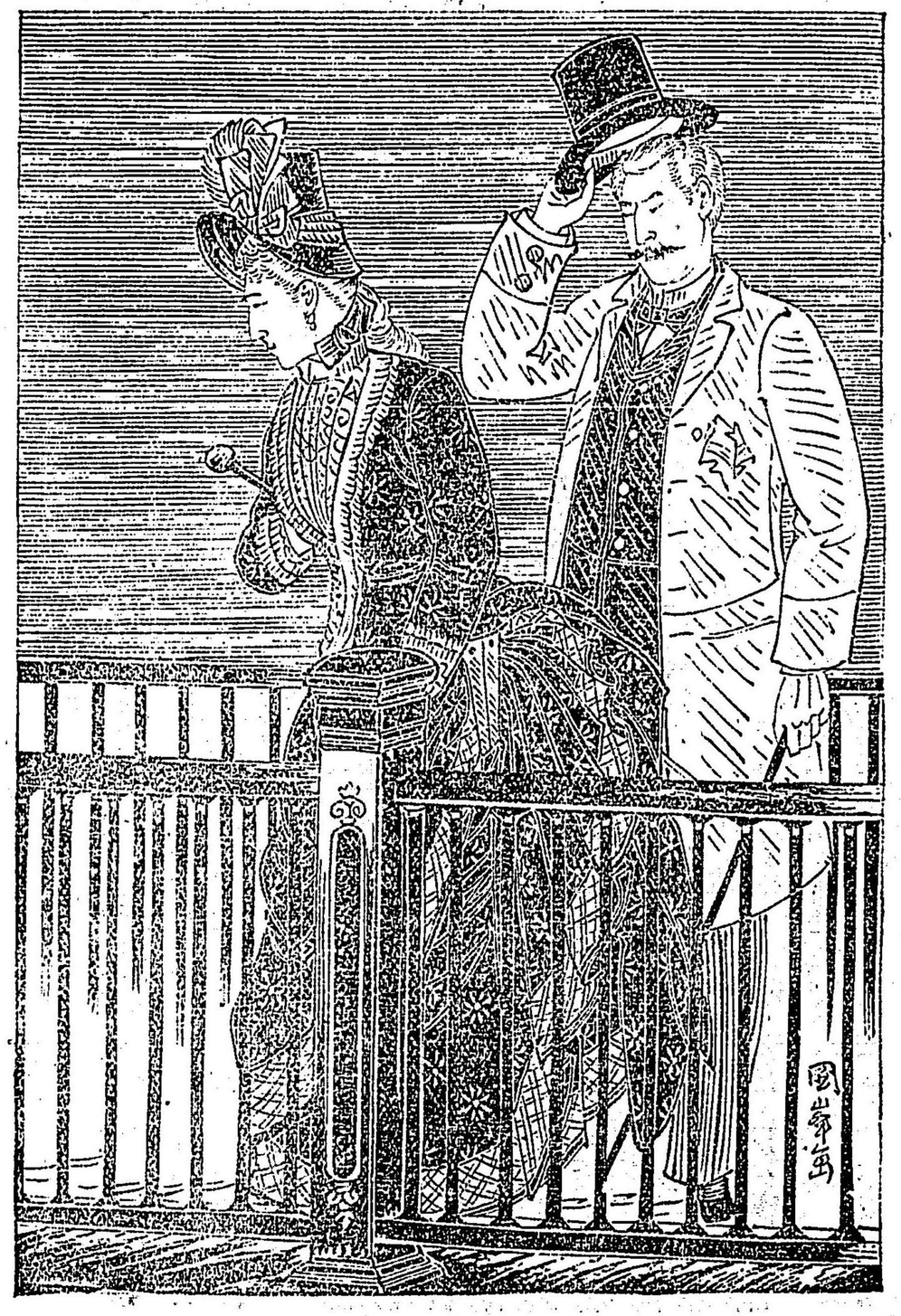
書記ハ判事の命に應じ被告の罪狀を讀上げたり玆にハ其大意を摘みて記す

去二月二十八日の朝六時頃チケトン街四十八番館「商人定宿」と知れたる家の前に馬車を駐め降來りし一人の旅人あり二日三日泊て呉れとて此宿屋に入來りしが馬車ハサン、ラザルの停車場より雇ひたる者なりと云へり、此旅人別に荷物とてもなく、唯一個の小形なる提革包を肩より筋違ふ小脇に掛く、其中ハ大金を入あるらんと見受られたり、年齢ハ五十に近らるべく身長高くして筋骨も先逞しく、去れ共惡人らしき人相ハなく稍や外國の訛あれ共差支へなくスラスラと佛國語を使ひ己れハ名を大戸長兵衞と云ひ北米合衆國シカゴ府の住人にして商業を營む者なりと云へり、宿屋の主人ハ斯る事を帳面に記し終り其客（大戸長兵衞）を案内して三階の一室ヘ連れ行き此室にてお氣ヘ叶ふやと問ひしに叶へりと答へしかば此室に泊むる事として主人ハ退らんとせしに客ハ呼留「汽船や汽車で艸臥れたら是より暫し眠るに由り正午十二時頃まで起さぬ樣ヘして呉れ」と云ひ更に又「十二時過にハ尋ねて來る紳士ハあるらん直に是へ通して呉れ」と云ひたり、主人ハ心得て退きしヘ十二時廿五分頃果して一人の來客ありしかば直に長兵衞の室へと通せしヘ凡そ半時間ほどを經て長兵衞と共に出去りたり、此來客の何者なりしやヘ宿屋の主人も充分ヘ覺えねど今の被告「丁切眞二」なりしかと思はるとの言立なり、長兵衞此

來客と共に孰れに出行たるや知らねど夜の九時頃に至り酒氣を帶びて唯一人歸り來り千鳥足にて其室に上り行きぬ、頓て十時となり主人ハ例の如く番頭に店を預け已ハ寢室へと退きしハ十二時頃ヘ及ぶ迄別に變りたる事もなし、尤も店の戸ハ寢際まで硝子障子にて何人も自由ヘ開き自由に出入し得るハ故に其間ヘ如何なる人ハ入來りしかヘ一々ハ覺えねど殊に泊客も數多ありて出入の繁き家なれハ番頭も氣に留めず店に坐りしとなり店口に本戸を閉ぢ刻限ヘ至りしかハ番頭ハ瓦斯を消し、宿り客の惡く外より歸り來たるや否やを見定めん爲にとて手燭を照して二階より三階へと順々に客室を見廻りしに三階に上りし時彼の長兵衞の室の中にて器物でも倒せしやうと戸を叩きしに何の返事もなし、開らんとすれど内より錠を卸ありて開くに由なし、扨ハ客人怪我でもして返事さへなし得ざるに相違なしと番頭ハ驚きて呼立るに邊の室々よりハ客も出來り、又先刻寐床に退きたる此家の主人も遽を聞附け起來れり共々に聲を合せて長兵衞を呼立れど返事なきヘ初の如くなれハ主人氣を燥ちて終に其戸を蹴開きつゝ跳り入て樣子を見るに無慘や長兵衞ハ切殺されて床に仆れ、被告「丁切眞二」が其傍らに立ちたり「ヤ、ヤお前ハ此人を殺したのヽ」と迫込て問ふヘ被告ハ「否」とも「然り」とも云はず、現場を認められしらハ云ふも其甲斐なしと思定めたるヘ似たり、猶能く見るヘ被告の胸の邊りより手の先まで血ヘ染しハ短刀を以て散々に長兵衞を刺したる者と察せらる、其ヘ又著るしき證據の品ハ死骸より少し離なれた

る卓子の下に投込たる短刀わり其柄の邊り、手に握りたる丈鮮血を留め今長兵衛を殺すよ用ゐたるに相違なし「是れお前の品」うと問へバ被告い「ウム已の品だ」と答ふ、則ち是れ殺せし後よて戸の外に人の足音を聞き周章て短刀を投げたる者なり、是より主人の訴へよて警察官直ちに出張し捕縛の上様々に詮議すれど被告い何事をも返事せず、去れど事殆ど現行犯とも云ふべく其罪狀分明なれバ警察署よてい直に之を裁判所に廻し裁判所にて嚴く責問ひたるよ彼れ僅に丁切眞二と云ふ怪き名前を答へしのみ其他の事い總て言はず、無言い白狀よ同じとの格言もあり疑ふべき所なし、去れど唯一つ何の爲に長兵衛を殺せしやと云ふ犯罪の目的更に分らざれバ其筋よても手數を惜まず充分探索を遂げたるに長兵衛ガ素性よ就ていい必要の事だけ分りしも丁切眞二の事い更に分らず

丁切眞二に殺されたる米國シカゴ府の商人大戸長兵衛い十餘年前桑港に行き鑛山の株を買ひ大金を儲しバ此程シカゴ府に歸り、歐洲漫遊を思附きて出發せし者なり、出發の眞際に二十万弗(百万法)の大金を爲替に組み佛國巴里なるロスチャイルド銀行よて受取る事とし佛國船に乘りて新育を發したり其の船ガ佛國ハブル港に着きしい二月二十七日にて長兵衛い其日直よ上陸し巴里行の夜行汽車に乘り翌朝チケトン街の宿屋に着きたる者なりロスチャイルド銀行を取糺すよ其日の午後大戸長兵衛の爲替よ對し銀行札にて百万法を渡したりと云ふ又同銀行の會計者を取糺せしに長兵衛い唯獨にて入來り其金を受取りて革包に入れ戸



る卓子の下に投込たる短刀あり其柄の邊り、手に握りたる丈鮮血を留め今長兵衛を殺すよ用ゐたるに相違なし「是れお前の品」うと問へバ被告れ「ウム已の品だ」と答ふ、則ち是れ殺せし後よて戸の外に人の足音を聞き周章て短刀を投げたる者なり、是より主人の訴へよて警察官直ちに出張し捕縛の上樣々に詮議すれど被告れ何事をも返事せず、去れど事殆ど現行犯とも云ふべく其罪狀分明なれバ警察署よてれ直に之を裁判所に廻し裁判所にて嚴く責問ひたるよ彼れ僅に丁切眞二と云ふ怪き名前を答へしのみ其他の事れ總て言はず、無言れ白狀よ同じとの格言もあり疑ふべき所なし、去れど唯一つ何の爲に長兵衛を殺せしやと云ふ犯罪の目的更に分らざれバ其筋よても手數を惜まず充分探索を遂げたるに長兵衛ゲ素性よ就てれ必要の事だけ分りしも丁切眞二の事れ更に分らず

丁切眞二に殺されたる米國シカゴ府の商人大戸長兵衛の身の上を糺すに長兵衛れ十餘年前桑港に行き鑛山の株を買ひ大金を儲しらバ此程シカゴ府に歸り、歐洲漫遊を思附きて出發せし者なり、出發の眞際に二十万弗(百万法)の大金を爲替に組み佛國巴里なるロスチャイルド銀行よて受取る事とし佛國船に乘りて新育を發したり其の船ゲ佛國ハブル港に着きしれ二月二十七日にて長兵衛れ其日直よ上陸し巴里行の夜行汽車に乘り翌朝チケトン街の宿屋に着きたる者なりロスチャイルド銀行を取糺すよ其日の午後大戸長兵衛の爲替よ對し銀行札にて百万法を渡したりと云ふ又同銀行の會計者を取糺せしに長兵衛れ唯獨にて入來り其金を受取りて革包に入れ肩

より小脇に掛けて立去れりと云ふ

銀行を出てより午後九時頃に宿屋へ歸りたる其間長兵衛ハ孰れよ行き孰の所にて飲食したるや又其間始終一人なりしや友達ありたるや夫等の邊ハ更に分らず、又其宿屋に歸りたる時小脇に革包を携げ居たるや否や、番頭ハ氣ガ附ゥざりしとの事なり、去れど長兵衛ガ殺されたる後に て詮索せしも其大金ハ跡方もなし、察するよ被告丁切眞二ガ長兵衛より革包の儘委托せられて孰れゥよ隱し置ける者ならん、被告ハ多分米國よて長兵衛の知音となりし者にて其夜の十二時を期し長兵衛の許に尋ね行くとの約束をなせしなるべし、又長兵衛ガ酔ひて宿屋よ歸り來りしハ被告と共に夕飯を喫し其際被告ガ酔しめたる者あらんゥ、酔して宿屋の入口まで共に來り後刻又來る旨を約して立分れ十二時前に及び番頭ガ居眠れる時を伺ひ入來れる者ならん、被告何の爲に夜更けて長兵衛の宿に行きたるや、又彼れガ長兵衛を殺したるハ先に委托されたる革包を返せと催促せられたるガ爲なるゥ、是等の事ハ被告自ら返答せざる故、裁判所の手よて充分詮索を遂げたれど更に分らず、又被告の身の上に就てハ長兵衛の故郷まで問合したれど知る者更になし、唯一つ確なるハ長兵衛の殺されたる事實なり、被告自ら否みもせず白狀もせず又其事譯を說明しもせず、去れど被告ガ長兵衛の大金を盜み長兵衛を殺したるハ疑ふ所なし被告自ら其姓名身分を包むと雖も其罪を逃るゝ事ハ到底出來べき所に非ざ書記の讀上げたる罪狀の大意ハ以上の如し其末よ猶ほ佛國刑法の第三百二條よ照すべき者なる旨を記したり、第三百二條ハ罪人の最も恐るゝ所にして、何人も能く知れり、人を死刑に處するの條なり謀殺者を罰するの條なり、去れバ裁判所あるべしとハ乘て思ひ居たるも近子ハ聞き終りて身震せり、去れど以上の罪狀にハ確なる證據と云ふべき者更になけれバ裁判官よ於てハ其情を察し命だけハ助くるならん「何うしても死刑に處せねバ」と熟心に望み居る檢察官澤部忠氏の心に引替へ命だけも助れゥしと近子ハ竊に願ひて止まず、被告自身ハ如何よ思ふゥ泰然自若として己ガ罪狀を聞終り泰然自若として判事の問を待つに似たり、此裁判所中に於て最も平氣に排へたるハ即ち被告自身なるべし

第五回

既に罪狀の讀上も濟みたれバ判事ハ是より再び被告よ尋問せんとて先づ證人を退け置き丁切眞二を呼上て「其方ハ何うしても自分の本名を明さ事ガ出來ぬと云ふので實に其方自身の不利益だけれど仕方ガない、是より其方ガ返事せねバ成らぬ廉だけを尋ねるガ此ハ素より此犯罪に直接の關係ある件だゥら有体よ答へるガ好い、第一に其方ガ長兵衛の室で、宿屋の番頭等に見現された時、其方の手先ゥら胸の當りへ掛け鮮血ガ澤山に附き顏までも染ッて居たと云ふガ此血ハ誰の血だ、無論長兵衛の血であらうな」被告ハ冷笑ひて「左樣サ長兵衛の血でないと云ッた所で誰も信じまもまひ」判「愈々長兵衛の血だと云ふのゥ」被「ハイ」判「其方ガ長兵衛を殺したのだな」被「決して〳〵」判「其方ハ斯までも明白な證據を打消んとするのだなお、其方ガ長兵衛を殺さねバ

誰ゞ殺した、殺さぬのよ何うして長兵衛の血ゞ其方に附て居た「被」何うして附たう夫を探るのゝ貴方の役目でせう、私しゝ自分に殺さぬうら說明ゝ致しません」と殆ど横着を極むる此返事よ判事ゝ勿論滿廷の人々まで悪く呆れ果て中にゝ口の中よて「馬鹿な奴だ」と罵るもあり判「其様な返事をして陪審官よ悪き感情を起させるうら、篤と考へて返事を仕直せゞ好らう」被「外よ返事ゝありません」判事ゝ「好し」と唯一言決然言切て「でゝ證據品の中、死骸の傍に落て居た匕首ゞある是ゝ其方の持て居た品う」被「ハイ私しの所有です」判「夫でも其方ゝ猶は長兵衛を殺さぬと云ふのう」被「勿論ヤます、殺さぬうら殺さぬと云ふので事のみ答ふるよぞ傍聽人ゝ孰れも手よ汗を握り中にも近子の傍よ在る年嵩なる貴夫人ゝ堪へ兼て「ソレでゝ我身を滅すばうりを」と呟きたり判「此匕首ゝ佛國製の品でゝないゞ何所で其方買求めた」被「何所だッたう唯今思ひ出しません」判「鑑定家の說でゝ米國製の物だと云ふが爾う」被「左様サ爾うも知れません」と更に臆せず答ふるのみう、被告ゝ初より今よ至るまで巍然と立て判事よ向ひたる儘、更に尊敬の体をも示さず、次第次第に身を引延べ、云ふ言葉も一言〳〵益々輝ゝと口を發し歷々と傍聽人の耳に入る、今までゝ猶は幾分の疑ひを存し、夫うわらぬうと迷ひ居たる近子も、此言葉を聞き此態度を見てゝ最早や疑ふ所なし、此人なり〳〵、數年の間逢ざりしと云へ此人ならで誰れう又斯る容貌を備へ斯る決心を起さんや、近子ゝ思ふよ從ひ胸迫り眼吐み、心の臟さへ動ずなりぬ、ア、近子ゝ殆ど氣絶せり、氣絶して其身を支ふる事能はず、徐々と

倒れ行きて傍らある貴夫人の膝に落れゞ、貴夫人ゝ驚きて「貴方病氣ですう、何うしたのですう」と急しく打問へど更に通せず「オヤ〳〵夫ゝ氣絶したのだ」と云ひつゝ辯護人の溜りより法服を着けたる一人の若紳士走り來りて抱起せゞ今まで傍聽に餘念なうりし滿廷の人々一時に眼を此方よ轉せり、裁判長も是にゝ驚き掌廷の役人を呼び差圖すれゞ役人も直に近子の傍に馳附けたり、近子の所天ある檢察官澤部忠氏も斯と見て驚きたれど役目柄とて如何ともせん術なく唯だ心弱き我妻を傍聽に連れ來りしを悔るのみ、馳附たる掌廷の役人將に近子を扶け上んとする折しも近子ゝ初て我に返れり「ナニ是ゝ一寸と眩暈がした丈です」と事もなげに言繕ひたれゞ、引出して滿場を騷すにも及ばずと認しう其儘よ退きたり、判事も唯是だけの事と思へゞ深く氣に留るに足らずとし再び調を初んとす、ア、近子ゞ一寸とした眩暈、誰も其譯を知る者なし、人の氣よや咽びしならん、裁判の有樣にや驚きしならん「ナンだ詰らぬ」と吐きて孰れも舊の通り裁判の方に氣を返す事となりしゞ此際唯一人近子の心中を察したるゝ被告丁切眞二なり彼れ今までゝ氣附ざりしも人々の驚き騷ぐに、何事うと眼を其方へ轉じたるに、幾年の間夢寐の暇よも忘れ得ざる我ゞ命、我ゞ生涯、我ゞ方向の集點とも云ふべき近子ゞ我ゞ爲に氣絶せりとゝ、夢う夢ならぬう、今度ゝ近子よりも此方ゞ痛く顏の色を失ひたり、何事ぞ何ゞ爲ぞ、判事も知ず撿事も覺らず、知る者ゝ唯近子あるのみ、アゝ命を掛けたる此恐しき裁判の庭に於ても二人ゝ心を通はして止まず、眞よ是れ戀の曲者、恐ろしの愛情や

第六回

今まで平然として屈せざりし被告あれど一たび近子の顔を見てより痛く其心を動せし如く殆ど其身を支へ兼て、跪跟と背後の椅子に仆れ掛らんとす、判事ハ其心を知ねバ全く我言葉に感動しての爲と思ひ、忽ち調子を柔げ來りて「其方卿臥れたなら椅子に寄た儘で好い、其方何の言開きもせず唯裁判官や陪審官の認定よばかり任せて置くハ決して自分の爲でないので、少し耐と氣が附たと見えるな、好し〳〵氣が附たら何より結構だ、言ふだけの事を言開けバ裁判所ハ公平に聞て遣る、今其方の身に掛る疑ひハ最も重い罪とハ云へ言開き一に依り無罪とならぬ者でもない、殊よ其方の犯罪ハ現行犯も同様でハあるけれど裁判官も未知らぬ疑はしい廉も段々あり、有罪とも無罪とも見込の極らぬ中だらう、其方自分の身よ覺えがないなら、無い丈の次第を言開くが好し、若し又覺えがあるならバ斯々云ふ譯で殺しましたと明よ筋道を述べ、假へバ殺したけれど金を盜む目的でハなく全く長兵衛と言爭ひ一時の怒を制し兼て殺したとか何でも有の儘の事を云へバ裁判官に於て其心中を察し罪を輕くする事もある、サア何う」

しや其方全く金を盜む爲に殺したるう、一時の立腹で殺したのう」　裁判官ハ如何よもして白狀させんと言葉の限りを盡せども被告ハ更に感ぜざるよう返事せんする樣子も見えず、裁判官ハ更に又一歩深く切り込みて「何でも裁判所でハ無言て居るのが一番險呑だ有体よ事情を言立れバ夫々又酌量の仕方もある、其方の態度を見るよ決して下等社會に育ッた者でなく由緒ある家よ生れた者と見ゆるが、身分相應に廉耻の心もあるであらう、其廉耻の心からして我が家名を汚すまひ我が本名を辱しめまひと身分を包むも無理ハない、けれども今となつてハ包むにも包まれぬ場合、一層何も彼も打明て裁判官の手數を省き且ハ假令ひ罪ハ犯すとも金錢を盜む樣な卑劣の目的でないと云ふ事を示すが遠に男らしいと云ふ者だ、其方の身分として夫くらゐの心掛ハなくてならぬ、サア何うじや、打明る氣ハないか」と判事ハ多年の老練に依り揚つ卸しつ切に白狀せしめんとせ、去れど判事の言葉ハ充分被告の耳に入ず、被告ハ唯だ一心よ近子の方を眺め、眼もて近子よ相談するのみ、近子ハ流石に女の情として、氣強く何も彼も隱すをのみ善しと思はず、渉身眞よ罪なくバ何故よ言開かざる言開きてらざるを示さいるや」と只管よ願ふ心を其眼よ浮めたり、被告ハ近子の心を讀得てう何事をう言出さん景色見ゆ、判事ハ此圖を外さず「其方に於てハ其罪の輕くなる樣に骨折て遣る、其方ハ兼て大戸長兵衛と知音であつたのだらうな」　被告初て有体なる返事を初めんとす、是れ裁判官に返事せん爲に非ず、唯近子に我身の罪なきを知さんが爲なるべし「ハイ知音でありました」「何所で知音になッたのう」「外國で」「成るほど、米國でう、夫で長兵衛と一緒よ此巴里へ着たのう」「同じ日に着きましたけれど一緒でハありません」「成るほど一緒でハないだらう、長兵衛の船の船長を初め、船中の人誰一人其方を見受た者がないと云ふうら、左すれバ其方巴里へ着て長兵衛に逢たのう」「先づ其樣な事で

判「其方ハ長兵衛に對し何の樣な用向ゞあつたのゥ」被「大切な用向です」判「大切なとハ金錢取引の事ゥ」被「先づ其樣な事で」判「すると長兵衛ゞロスチャイルド家ゥら引出た大金も幾分ゥ其方の權利よ屬する者であつたと云ふゥ」被「先づ其樣な事でせう」判「唯其樣な事でと云ふ曖昧な返事でハ分らぬ其方長兵衛の組合人となツて商法でも仕た事ゞあるのゥ」被「其樣な事ハ此事件に關係ゞありません」判「イヤ關係ハあるゞ返事をせねゞせぬでも好い、次にチクトン街の宿屋ハ金滿家なぞの宿泊する所でないゞ、夫へ長兵衛を泊らせたハ其方の差圖であるゥ」被「私しでありません一年ほど前に此巴里へ來て居る米國人で長兵衛の懇意ゟ何某ゞ其宿を世話したと云ふ事です」判「二月廿八日の晝過に長兵衛の許へ尋ねて行たのハ其方ゥ」被「イエ私しで有ません」判「然らゞ誰だ」被「存ません宿屋の主人ハ確ゟ其方とハ言切れぬゞ其方であつたゥも知れぬと陳述してある、夫より長兵衛ゞ宿屋を出た時も、金受取ゟ銀行へ行た時も再び宿屋へ歸ツた時も總て一人であつたと云ふゞ其方ハ戸外で待て居たと見えるな」被「イエ爾ではありません」判「其方ハ夜の十二時と云ふ時刻に何の事を濟せ、唯一人で飮食して同じく一人で宿へ歸ツたのゥ」被「夫ハ何うですゥ私しの知た事でありません」判「其方ハ夜の十二時と云ふ時刻に何の爲め長兵衛の室へ入込だ」被「長兵衛ゟ用事ゞありまして、何時行ふと問ひましたら夜の十二時よ宿屋へ來いと云ひました」判「左すれバ、其日の晝間に長兵衛に逢た事ハ逢たのだな」被「イエ初て巴里へ着た時逢たのです」判「夜の十二時に尋ねて來いと云ふハ不思議じやないゥ」被「不思議でも夫ゞ事實ですゥら致し方ゞありません、夫で私しハ十二時より十分ゥ二十分ほど前よ尋ねて行きました」判「宿屋へ這入る時、誰も其方を見なんだと見えるな」被「爾ゥも知れません番頭ハ確ゥ居眠ツて居たと思ひます」判「居眠て居たのを起しもせず よ三階へ登ツたのじやあ、眞に能く長兵衛の室ゞ分ツた者じや」被「室の番號を聞て居ましたゥら直に分りました」判「十二時頃と云へバ死斯も消した後だのに」被「ハイ私しハ燐寸を持て居ましたゥら」判「フム何ゥら何まで能く用意して居たな、夫で室へ這入バ定めて長兵衛ゞ其方を待て居た事であらうゞ夫ゥら長兵衛と何の樣な事をした」判事の問ハ今や大事の所まで屆きたり、被告ゞ如何に返事するやらんと滿廷の傍聽人ハ堅唾を呑みて控ゆるのみ、被告も爾なくバ答へず、先づ眼もて近子に計るに近子の眼ハ相變らず、ハ身若し罪なくバ何の猶豫する事ゥある、言開きて安に罪なきを知らしめよ」と促すに似たり、後にも先よも唯一人の女ぞと思へる最愛の近子より盜賊人殺しと思はるゝハ素より堪ゆべき所よあらねバ、被告ハ最早や言開ゥざる事能はず、茲よ充分決心し「でハ有体に言ませう」と頷首きたりア、被告ゞ長兵衛を殺さずバ何人ゞ殺せしぞ、被告ハ長兵衛と何事をおしたるや、是より丁切眞二の逃る所を見て知るべし

第七回

今まで三月の間豫審判事の調を受けて一言の答へをもなさゝりし稀代の嫌疑者丁切眞二ハ今や其口を開きて有の儘を有体に述んとす、去れど彼れ判事の言葉に服しての爲に非ず、近子ゞ此法廷に在るを知りたるゞ爲なり、後よも先にも唯一人と心に誓へる最愛の女より盜坊よ人殺よ

と思はるゝの辛さに我が盜坊に非ず人殺よあらぬを言開うんとするなり、去れバ被告が判事に向ひて述る言葉も心ゐ近子に向へるあり、近子の所天なる檢察官澤部忠氏ゐ斯とも知ず被告が有体に言開うんと云ふを聞きてより更よ一層の注意を加へ若し被告の述る所に少しでも僞りらしき廉あらバ直に遣込て言伏ん、何事ありとも被告を首切臺に登さずバ我が昇進の道ゐ絶ん、己れ如何はゞ言開くも能く我れに敵せんやと天糸根引きて待搆へり、近子ゐ所天と被告との間よ介り今ゐ首を擧げも得せず、若し眼と眼見交す樣子を見知れ、怪まれてゐ一大事なりと手を膝に置き眼を垂れ成べく他人の氣よ附かぬ樣小くなりて控へたり、去れゞ被告の眼より此姿を見れバ「妾斯く謹みて聞き居る放其心にて陳べ給へ」との意ゐ充分察せらるゝならん、被告ゐ近子に向ひて述べ、近子ゐ被告に向ひて首を垂る、二人の心ゐ二人の外よ知る人なけん、此時判事ゐ迫立る如き調子にて「サア陪審員各位が其方の言開きを待て居るぞ」と言ふ、被告ゐ急がず騒がず「有た丈の事を言ますから別に長くゐありません、唯今もヤす通り私しが宿屋へ這入たとき番頭ゐ眠ッて居る樣子でしたが私しゐ其儘三階へ登り燐寸を照して探しますと直に第廿一號の室が分りました、兼て約束のある事ゆゑ定めし長兵衛が待て居る事と思ひ其戸を輕く叩きましたが內より何の返事もありません、扨ゐ眠ッていも居る事ゝ今度ゐ少し强く叩きましたが相變らず返事がないので愈々眠ッて居るのだと思ひました、幸ひ錠の穴よ鍵を差込だ儘に置てありますので其鍵を取り戸を開くと、開く機みに燐寸ゐ消え、中へ這入れバ硝燈一つ燈火ツて居ず、室の中真ッ暗です、硝燈まで消してあるのゐ不思儀と思ひコレ大戸君長兵衛君と二度三度呼びましても何の返事がありませんから耳を澄して打聞くと何だゝ死際の人が洩す嘯きの樣な聲が聞えます、唯事でゐあるまひと再び燐寸を照す暇さへなく突々と二歩三歩進みますと卓子よ突當り上の置物が凄まじい音して落ました、したが此時私しゐフト心に浮び扨ゐ曲者が長兵衛を殺したに違ひない今の嘯く聲と云ひ、事に寄ると未曲者が室の中よ居るうも知れぬと我れ知らず我が衣嚢を探り、兼て身よ着けたる匕首の小刀を取出し鞘ら切んと云ふ身拵で、用心して蹈出しました「判「曲者が居ると思へバ直よ聲を立てゝ人を呼び相な者だが「被「外の人あら呼立るうも知りませんが私しゐ呼立ません「判「何う言ふ譯で「被「譯ゐ唯今ヤさすとも疑しけれバ後でお聞下さる事にして一應言ふ丈の事を言せて戴きませう」と澁みなく辨じ去る是等の言葉を聞く時ゐ誰う又此丁切眞二を尋常一樣の汚はしき殺人犯と思はんや、言立の眞僞ゐ兎に角、是まで上等社會に身を置きて貴顯紳士と同等に交はり言語應對の法をも心得ざる者に相違なし、眞二ゐ落着きて言葉を續ぎ「又も二足三足踏出すと今度ゐ足許に物あッて私しゐ之に躓き、留度もなく倒れました、是が長兵衛の死骸です私しゐ死骸の上よ重ッて倒れたのです、其時ゐ眞逆に死骸とも思ひませんうら探ッて見ると血が流れて居て身体に少しの暖りさも殘ッて居ます、倒れる機みに手よ持た小刀ゐ投棄てゝ後に誰だう見出して證據品の一に加へましたが、何しろ私しゐ氣も轉倒する程に驚きました、兎角の考

へもなく其儘立て傍の壁に掛りますと此時廊下で人の足音がする様よ思はれましたから直と戸の傍に行き内から錠を卸しました「判」自分で殺しもせぬのに錠を卸すとい不思儀じやないか、戸を開けて是々の始末だと番頭に語り相な者だ「被」爾い思ひません、今此所へ人が來てい誰でも私しを罪人と認め飛だ迷惑を受くる事よなるだらうと思ひましたから、足音の消るを待ち人知れず逃去る積でした、其時逃去る事が出來なんだばかりよ今い此通り捕縛され恐ろしい嫌疑を受る事になりました私しが戸の中から錠を卸し逃去らうと思ッたのい當然の事でせう「判」夫から何うした「被」何うも致しません、番頭が物音を聞附て外から戸を叩き果い主人まで呼起し戸を破ッて這入て來たのでも其後の事い言ずとも分ッて居ます「判」左すれば其時其方の身体よ血の附て居たのい死骸の上に倒れ且い死骸を探ッた爲だと云ふのだな「被」左樣でも「判」でい捕縛された時、何故直に夫丈の事を言立なんだ「被」言立たとて何の役に立ませう、私しが殺さぬと云ふ證據が一つもありません、殊に匕首まで拾ひ上られたから何う見ても私しが殺した樣に見えて居ます、私しい是が世に云ふ運の盡で、何と辨解しても到底逃れぬ場合に陷たのだと自ら斷念めて仕舞ひました、達て之を言開うとすれば人よ知せ度ない我身の素性までも知さねばなりません、我命い助からずとも切ていい我本名我が家名だけも助け度と思ひます、本名を明して由緒ある罪人となつて罰せられるより名もない罪人となつて死ぬのが我名譽を助ける唯一つの血路です「判」でい一旦自ら斷念めたけれど今又思ひ直して以上の事を言立たのう「被」別に思ひ直しも致しません

が自分の犯さぬ罪を犯したと認られ强盜よ人殺しよと云れるとい好い心持でありませんから是だけ事實を言遁して置くのです、私しを信ずる人い信じませう信せぬ人い信じますまい、此上の事い幾等問はれても申し上ません、是で貴方が私しを罰するなら貴方の裁判が間違です、間違た裁判で丁切眞二い殺されても私しの本名い助ります、私しの本心い裁判官の不行屆を笑ッて死ます、本名が出ぬうちい私しの知人達も罪人と交ッたと云ふ恥を受ずよ濟ますから「判」でい其方、知合の人があると云ふのじやな「被」ありますとも昨日生れた者でいなし、今でも幾人うもありませう、と、れる迄、月の世界に住で居た譯でもなし、友達などもありました、云て貴方が探しても分る事でいありません、此上餘計の事を問はずに速よ判決を願ます、私しの素性や本名等い知ぬ人よ知らせるに及びません、知た人い言ずとも知て居ます」判事い此上彼れが隱さんとする所を問ふも其甲斐なしと思ひしう、尋問の向を變へて「でい其方、長兵衛に何か用事が有たと云ふのじやな「被」夫い最う初て詮議を受た時直にすましたと「長兵衛が巴里へ着て直に百万法を銀行から引出た事も知て居たら「被」ハイ知て居ました「判」其大金い何うなッた「被」何うなりましたと知ません「判」革包の盡で見えなくなッたと云ふが「被」見えなくなつても私しの仕業でありません、捕縛された時嚴重に私しの身体を檢めたけれど持て居なッたのが何よりの證據です「判」若し其方に手下が有て、其方より先、其金を持て逃たのうも知れぬと云ふ者「被」手下が逃る暇があれば私しも一緒に逃る道理でせう、金を盜んだのい必ず長兵衛を殺したのと同人で

せう私しい長兵衛を殺しもせず金を盗みも致しませんの」判「其方若し誰が殺したと云ふ心當でもあるのか」被「ありません、けれども事に由ると誰か長兵衛が銀行から金を引出す所を見て居た奴かも知れません、長兵衛い、米國人の癖として知ぬ人とでも直よ話を初ますから其者が事に由ると、道で長兵衛よ話を仕掛け、忽ち怨意になつて泊ッて居る宿屋まで聞出し其夜直よ尋ねて行たのでもありませうう、長兵衛い丁度私しの來るのを待て居た所ですから私しと思ッて其者を通し、私しの行く少し前に殺された者でせう、實に五分間遲かッたのが私しの不幸です、今五分間私しが早く行たら決して此樣な疑ひを受ぬのみゥ曲者を捕へて裁判官から禮を言れたりも知れません」と述來る被告の言葉い艶もなく飾もなけれども一々本心より發する如く僞りありとい思はれず、去れども檢察官を初とし被告を信せぬ人々い「ナニ彼れ、辨護人より敎られた儘を暗誦で多舌て居る」と評せり、判事い又問を發し「犯罪の當日其方い何所で暮した」　不意に問はれて被告い少し驚き樣子なりしが「夫い申されません、夫を言立れバ遂よ私しの素性まで分ッて來ます」判「でも是が最も必要の點である、其方い夜の十二時少し前に長兵衛の許へ行たと云ふけれど、直其前まで何所よ居たゥ夫を言ねバ反對の證據が立ぬ、假令バ夫まで珈琲店に居たとゥ又い誰某の家に居たと云ふ反證を擧れバ如何よも其方が十二時前まで彼宿へ行なんだ事が分り、其方の行く前よ長兵衛が既よ殺されたと云ふ事も分るのだ、何も何時から何時まで何をしたと詳しく話さずとも唯夕方から十二時前まで何所に居たと夫だけの事を言へバ好のだ」被「ナニ

私しの言葉だけでい證據になりますまい」判「其言葉の僞か眞かを調るい手易い事、假令バ珈琲店に居たとならバ其給仕を呼出し問ふて見れバ分るのだ」被「既よ二月も經た後で誰も覺てい居ますまい殊よ私しい珈琲店や俱樂部に居たでいありませんし、夫が爲め其夫人の名譽を厭ひ堅く包まんとするなる乎とい婦人傍聽者一般の心の中に起りたる推量あり」判「珈琲店や俱樂部でなければ其方何所に居た」被「唯市街をブラ〳〵と歩いて居ました」判「ナニ市街を、夜の十一時十二時と云ふ時刻に、而も當夜い隨分痛く雨が降て居たのにハイ、夫だゥら私しが捕はれた時、上着から下着まで迄ビッショリ濡て居ましたねれバ分ります、けれども愈々私しが市街をブラ附て居た事い其時通り合せた通行人の外よ知る者いありませんゥら是い言ふ丈無益です、此上い問ふのいお止なさるが好でせう返事するのも無益ですゥら」と殆ど裁判官を冷笑ふ如くに述れバ裁判官も氣色を損じ、少し憤然たる言葉にて「でい其方、外に言開きの仕方いないゥ」被「外にあれバ夫い僞りの言開きです、今少したのが全くの事實ですゥら、此外よ僞の言開を案じ出して貴方の機嫌を取る事い至て私しの不得手です」判「事實にもせよ今少し述樣のあつた者だ、反對の證據を擧よと云ふに其方い擧んとせず且い自分の本名より素性を包み一とし滿足なる返事をせぬからい當方にても此上施す手段がない、依て是より證人を呼出し其陳述を聞く事よするから、若し違て居る所があれバ其旨を言立るが好い」と嚴かに言聞るに被告い更に驚かず、證人い豫審の節皆眞實を言立たゥら、當法廷で

も勿論眞實を言立ませう」と平氣にて言切たり

第八回

是にて被告の言立だけい濟みたり、其言葉若し實あらば眞の罪人い外よ在り丁切眞二い無罪の人なり、若し僞りならんにい彼れこそ最太々しき惡人なり、實う實ならざるう、傍聽人の評判も一樣あらず、或者い被告を無罪と信じ、彼の罪狀い不充分なり疑はしき廉のみ多くして確なる證據一もあるなしと云ひ或者い否々彼れが死骸の傍に居たるい殆ど現行犯に同じ外に證據を要せずして其罪既に明白なりと云へり、殊に被告が當夜十二時まで執の所に在たるやとの問に滿足なる答をなし得ざりしに就てい人々の疑ひ又一入深くなれり、彼れ貴夫人と逢引せし爲め其夫人の名譽を厭ひ殊更に包めるならんと益々奥ゆかしげよ褒るもあり否々彼れが捕はれし時、雨にビッショリ濡居たり、乞食う何ぞじやあるまひし雨に濡れて忍び逢ふ筈あらんやとて嘲ける附る人も多し、孰れが孰れ、區々なる間に、判事い早や證人の尋問に取掛りぬ、第一よ呼入られしい此事件を托されたる探偵吏なり其言立に由れば今まで丁切眞二の身の上を探らんが爲めに米國各地の領事廳へやすに及ばず心當の向々へ悉と問合せたれど一も滿足の答へを得ず次に被告の肖像を畫うせ之を人込の塲所及び出入多き店先等に掲げ此顔に見覺ある者い褒美を遣るべしと多額の賞譽を掛けたれど一人の言出る者なし此上い最早や尋ねべき工夫なければ斯くいまで盡したる手續を申上るなりと述べたり次にい佛國米國の間を航海する各汽船の船長及び水夫等を呼出し一人〳〵よ被告の顔を見せ米國より此人を載せ來りたる覺えあるやと問ふに孰れもなしと答ふ、彼れ一頃米國にありて此程佛國に歸り來りし者なる事い疑ひを容れぬ所なるに孰れの船員も見覺えなしとい彼れ將た鳥の翅を借り中を飛で來りしあるう、此次にい長兵衛の死骸を檢査せし外科醫者を呼び出し傷の摸樣を問ふに其傷い匕首の小刀よて刺したる者にて當夜死骸の傍に在りたる品ならんと察せらる彼の小刀にい唯柄の所に血の附きしのみ刃に至りてい何の痕をも留めざりしとい云へ精練の刀にいや血の溜らぬ事あれば开い此小刀よて長兵衛を殺さずとの證據にならずと云ふ、斯と聞たる檢察官澤部忠氏が直に立て「然らば長兵衛の傷い何時間ほど生存へる事の出來る者なりしや」と問ひたるに去れば被告が長兵衛の嘈き聲を聞たりと云ふけてより十分間以上生延ること覺束なしと答ふ、左すれば被告が長兵衛を殺したる者なき筈ならずやと問ふに爾う思はると答へたり、此答へい今迄言立たる各證人の陳述中にて最も被告に不利益なる者と云ふべきう、此次よ呼出れしい宿屋の主人と番頭なり判事い二人に向ひ一樣に「二月廿八日の正午十二時少し過よ長兵衛の許へ尋ね來たりと云ふ客仁い此人ありしや」と問ひしに二人とも「其時とい身姿が違ふ故分らず」と答ふ「然らば其人いか何の樣な服であつた」二人「長い外套を着け其襟上よ揚げ半ば顔を隱して居ました」判「然らば」判事い參考品の一として押へある被告が當夜着け居たる外套を取り被告よ之を纏はせて其襟を

上しめ両人に示せよ番頭い一目見て「決して此人に非ず」と答へ主人い右見左見打眺めたる末確に此人でも私しい見覚えがあります此人よ相違ありません」と答へたり、此一言い殆ど被告の運命を決するにも足るほどなれど番頭が反對よ言立てしい被告の爲に来しもの幸ひなり、是にて證人の取調を終り愈々撿察官の論告に掛んとす、近子い心も心ならず我が所天日頃誇れる雄辨を振ひ被告を罪に落さんとするなるう所天の雄辨よい如何なる陪審官も心を動さゞるいなしと聞く、ア、恐ろし嘆はしと魂更に身よ添はず、顔を隠して待つ中に、撿察官い立上りて滔々と述べ初めぬ、最初にい先づ長兵衛の持たる大金の事より被告の慾心を惹起したる事を述べ、醫師の陳述などを證據として此罪人被告の外に在るべうらずと論じ次よい丁切眞二が自ら有の儘なりとて言立たる所を一々に打返し、最後に「被告い普通一般の盗坊です人殺です、金錢よ眼が暗み押入て長兵衛を殺したのです、憐むべき廉もありません、察すべき情もありません、唯彼れ小才の利く所うら様子ありげに我が本名を隠して居て夫が爲に人々の疑ひを招きますけれど、彼れ名譽を厭ふ爲でもなく家名を保護する了見でもなく唯だ裁判官を瞞着する丈の謀です、其證據い彼れ自分の家が有りません、家名を厭ふほどの家柄ならば此まで手を盡して廣い巴里中に誰一人彼れを知らぬと云ふ筈がないのです、彼れ名もなき家に生れ身分もあく名譽もなく今日まで生來つた事何よりも明白でせう、彼れい唯だ本名が分らぬうちい裁判の下し樣がないと思つて居ます、夫が大なる間違です本名い分らずとも其罪が分り其本人が分れば裁判い下されます、若し本名の分らぬ爲裁判を輕くする事でもあれば之から後の罪人い孰れも及ぶだけ我が姓名を隠します爾なれば裁判の手數い非常です畢竟此被告い後の罪人に悪い手本を殘す者です充分重く彼れを罪し後々斯る餘計の手數を掛る者の根を絶つい裁判官の務です、且彼れ其名前を隠せのい彼大金を盗み孰れにう隠してある何よりの證據でせう、彼れい首尾能く此裁判を潜り抜け其金を取て旨々と世を渡る積です、今本名を明していい其時よ差支へるうら先づ本名を隠して裁判を抜け終り、後で已が古巣に歸りて、公然我本名を名乘り何食ぬ顔をして大手を振て不義の榮華を極める爲です、斯る深き謀みある彼れの憎むべき心を知ず萬一にも彼れが罪を輕くする事もあれば夫こそ千歳の後までも裁判の記錄に大汚點を留めます裁判官の恥になります、今日の裁判官い名もない被告に瞞着されたとて今までの裁判官よ笑はれます、善を愛し悪を憎む今日の陪審員諸君い決して此の名もない悪人の計畧にい乘りますまい」と陪審官を煽て判事を勵す實にや稀世の雄辨に滿場い宛ながら水打し如く鎭り返りぬ

第九回

澤部撿察官の論告い今まで例なき大出來にて充分に陪審官を動したるよ似たり、斯てい如何樣に辯護するも被告の無罪放免い覺束あしと何人も思ひたり、引續きて起立したる春木辯護人い澤部撿察官に立勝る噂ある人なれど此人眞よ正直一方の性質にして苟くも我が心に確と認る所あらば盤根を切り錯節を開き、舌頭に火花を散して滿廷を叱咤すれど、其代り我心に此公事い

我に理なしと認る時ハ理を非に曲て辯を飾る能はず、唯心の誠一方にて推通し誠心と誠意を以て人を動す得意なれバ此度の事件の如き被告の身の上も分らず、本名を隠す理由も分らず、無理に道理を附るに非ずバ辯護もるに道もなき曖昧模糊たる爭ひにハ寧ろ不得手の方なるべし、去れバにや彼れ充分に辯じハ辯じたれど、日頃の手際に比べてハ上出來なり、外の辯護人に取てハ上出來の中に非ず、個ハ人々が初よりい上出來の辯護とも云ふべきなれど此人の辯護としてハ上出來の辯護ハ定し驚くべきほど巧ならんと餘り買過たる爲にも由るべきが一つハ春木の心の中に深く被告の眞情を知らぬにも由るなるべし、彼れ一々に檢察官の議論を破り終りに至りて被告が高貴の家に生れし事、家名を汚さじとて其本名を隱せる事等最憐れげに述終り、且ハ被告が當夜孰れの所ゟ居たるやを白狀せぬ迄く己が愛をる某貴夫人の名を厭ふてなりと說き斯まで斷然たる決心を現すハ豈ゟ尋常一樣の人ならんや被告が決心の強きを見ても其人柄の凡俗にあらぬと秀たるを知るべしとて猶も眞の罪人の必ず外ゟ在るべき事、罪狀に一も證據なき事、被告の全く無罪なる事等を落もなく辯じたり。去れど法廷一般の感覺ハ檢察官の辯說に及ばず、獨り澤部夫人近子のみハ辯護人が罪人ハ某貴夫人の名譽を保護せん爲め當夜孰れに在りしやを說うずと言たる時、痛く其心を動し、春木ハ眞實斯る事を知りて云ふや、將知ざれど作りて云ふや、其心中を聞たしと氣遣ひたり、此辯護に對して檢察官再、び起立するならんと思ひしに檢察官ハ初めの辯論にて言ふべき丈を言盡したれバ再び立ず、判事ハ茲に於て被告に向ひ「猶ハ辯護人の言

洩した所が あれバ自分で充分に述るが好い」と云ひしりぞ被告ハ未練らしき一般の罪人と事異り「言ふ事ハありません」と言切たり、ア、調も終り辯護も終りて愈々被告丁切眞二ハの運命ハ茲に全く定らんとす、檢察官の望む如く彼れ死刑ゟ處せらるべきや將た辯護人の說きし如く無罪放免となるべきや、滿廷の人々今ハ充分被告に向ひ最負の心を强めたれバ徒らゟ他人の裁判を聞く如き浮きたる心に非ず我身自ら裁判を受るが如く熱心ゟ陪審員の顏色を窺へり、此時陪審員一同ハ判事の差圖に從ひて次の室へと立退き被告丁切眞二ハ憲兵に連れられて初め來りし潛戶より出去れり、再び陪審員の出來る迄ハ如何になるや計り得ず、有罪とも無罪とも落着せぬ空間なれバ人々胸の中に凝し居たる堅き息を發と吐き、思ひ〳〵に噂を初ぬ、近子ハ其中ゟ在ながらも噂の群ゟ入る心なく只管に眼を垂れて被告の無罪を祈るのみ、數年前に分れてより死せりと思ひし意中の人が猶ハ存ふるのみならず恐しき人殺しの罪を受け我が所天の手ゟ掛り命を捧げて裁判さる、近子が後々の爲を思へバ此罪人の殺さるゝこそ結句其身の幸なるやも知れぬ女子が初て男ゟ與たる愛情ハ月日の爲難難の爲に偸るとある者ならず、我身を捨ても此人のみハ助けたしと縋に祈るも殊勝とや云はん、斯る折しも辯護人の溜りに在りたる若殿原の一人突と立ちて近子が傍に來りしゝバ近子ハ我身に用事でもあるにやと其顏を擧みるに此人ハ是先程近子が氣絶せしとき第一に馳附て抱揚たる紳士なり去れど彼れ近子に用事ある爲ゟハあらぬと見え傍らに在る年嵩ある貴夫人に向ひ「伯母さん能く今日ハ入しッた、何うです、裁判

傍聽ハ芝居より面白いでせう」扨ハ此夫人の甥と見えたり「面白いよりアノ罪人ガ可愛相でならないよ」と云つゝ傍の年下なる夫人に向ひ「貴女ハ私しの甥を殺存ですゥ」と彼の若紳士を引合す、近子ハ聞くともなく其言葉を聞くに若紳士ハ侯爵輕路家の後取にて輕路祐秀と云ひ交際社會ヨ名の上れる人と知らる、祐秀ハ浮立て「何うも此被告ハ唯者でない、我身ハ殺されても愛する夫人の名を包ふとするのだゥら、傍聽席の貴夫人達ガ夢中になるも尤だ」と何やら近子ヨ聞ガしに語るに似たり、近子ハ思はず顔を擧るに祐秀の眼今や一直線ヨ我顔ヨ注げり、アヽ彼れ先ほどよりの我ガ樣子を見て何ウ被告と譯あるを疑ひ我ガ氣を引きに來りしならん、斯く思へバ近子ハ直に又顔を下げ知ぬ振にて控へしガ此時彼の陪審員の面々ハ列を正して評議室より出來れり、今や評議全く定まり、被告の運命を手に握りて判事ヨ傳ふる者と知る、永々氣遣たる裁判の此一刻に落着する事あれバ細語き居たる人々ハ一齊に口を噤み滿塲苑も火を消したる如く靜なり、列の眞先ヨ立る陪審員長ハ恭々しく判事に向ひ評議の結果を報告し「以上の次第に依り被告を有罪と決します」斷然たる一言最早や取消すに由もなし、傍聽人ハ苑も我頭上に冷き劍の落來りし如く絶望の嘆き聲を洩したり被告に若し酌量すべき情狀あらバ陪審官ハ其旨を言足すべきに、唯有罪と言切しのみ後ハ何事をも言ずして其席ヨ復したり、是ヨて見れバ被告ハ死刑なり、首切臺に載らるゝに極りし者なり、アヽ陪審員の面々ハ何故ヨ斯も慘酷なる判決を下せしや、被告眞に罪ありとするも猶ハ疑はしき所あり切てハ死一等を減ずるこそ穩當ならめと吐く人多けれど事總て後の祭なり、陪審員ハ痛く檢察官の雄辯に感じたる爲なるゥ、否否彼等の妻女ハ多く此傍聽席に在り、所天の晴の姿を眺めんとて朝早くより此席ヨ入込り、妻女ハ孰れも所天の方を眺めゝせで唯被告丁切眞二の秀麗なる容貌に醉たる如く所天の前をも打忘れて只管被告の一言一行ヨ應じ一顰一笑するガ爲め此被告を許してハ、平和なる我ガ家内の爲ならじと思へるより判決自ゥら無慈悲となりしならん爾ハ兎も角も既に判決も濟みたれバ判事ハ更ヨ被告を呼出せに此被告ハ我ガ殺さるゝを本望と思へるゥ、相も變らぬ泰然たる容貌にて靜に判事の前ヨ立ちたり、判事ハ刑法第三百二條を引き、地獄の奥より洩來る如き最も陰氣なる聲を發し「被告汝を死刑に處せ」と言渡せり衆ハ心に待居たりとも斯まで平氣なる能はじ、辯護人すらも、判事すらも、幾分ゥ其顔色を變ずる程なるに被告ハ恨まず悲まず自若として宣告を聞終れり、判事ハ更に被告ヨ向ひ「猶ほ上告の爲め三日の猶豫を與へるゥら、其間に篤と考へるガ好い」と言聞たり、被告ハ少しも動せぬ聲ヨて「イエ上告ハ致しません」と言切て、一般の罪人の如く跪跟きもせず強て非足を蹈ゞもせず、辯護人より先に立ち法廷を退ゥんとし、其間際に近子と眼を見交せたるガ是ぞ此世の名殘と思へバ近子ハ殆ど咽び來る我ガ淚を抑兼しも被告の眼にハ淚なし、彼れガ決心ハ實ヨ石よりも堅しと云ふべし、アヽ彼れ實ヨ何者ぞ、名もなき罪人となり終り、上告もせず首切臺ヨ上されんとするゥ、然り彼れハ此上上告して又も汚はし き裁判ヨ受け我ガ本名を明さんよりも丁切眞二てふ異樣ある名の儘に、裁判官の不當を笑ひな

ゞら死んとする者あり、世の裁判官たる者自ら省みて可なり

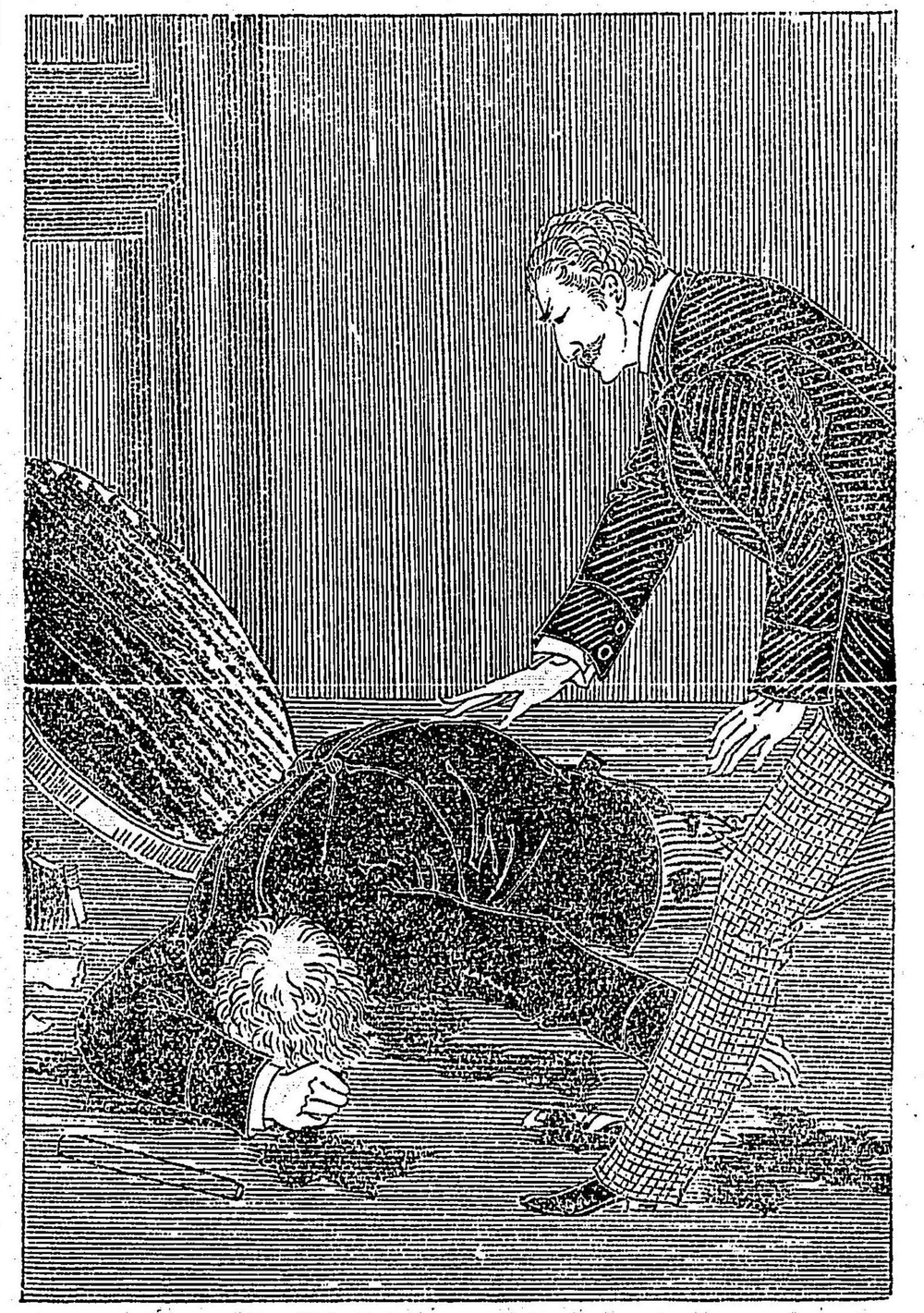
第十回

丁切眞二の憐なる運命よ一同鼻詰らせて立去るゞ中にも近子い殆んど氣を失ひしに似たり、堪へ〳〵し泣聲を早く我家よ歸りて發せんと思ふ如く歸い一緒にと約束せし我夫を待つ事をすら打忘れ足よ任せて裁判所を立出つ只走に走りて「ノートル、ダム」の塔下を過ぎ早や瀬音川の橋近く來りし頃い呼吸迫りて足も進まず、玆に一休と橋の柱に覗り發と苦き息を吐つゝ、若し見る人もやあると斜に背後を眺むれゞ十間ばかり隔りし所まで來りて頻に我姿を窺ふ人あり、是なん裁判所にて我心を引んとする如く隣席の貴夫人に向ひて罪人の噂話をなしたる彼の侯爵輕路祐秀なり、彼れ愈々我れと罪人との間に何ぅ譯あるべしと察し玆まで附來りしに違ひなし、ヱヽ蒼蠅しと思へども、此儘逃去る事もならず、逃去らゞ彼れ何所までも纏ひ來りて終に我ゞ撿察官の妻なる事を見認得ん、何とうして斷然掃ひ退るに如ずと獨り心に含きたり、輕路祐秀い近子の想ふに違はず全く玆まで附來りし者なり今しも近子ゞ歩を留めたるを見たれゞ、之を幸ひ其傍に寄行きて話を仕掛け其身の上を確めんと片頬に笑を浮めつゝ物言たげに近子ゞ傍よ歩を進めぬ、凡て巴里の若き殿原の中にい散歩の度び、女の後を尾行きて話を仕掛くるを以て我ゞ職務の如く思へるも多き程なれゞ祐秀も斯る事にい功者なり、鳥指ゞ鳥を狙ひて進み行く如く、其鳥を威さぬ樣、其鳥を逃さぬ樣にと苦心しながら歩を運ぶ、アヽ彼れ何ゞ爲に斯も近子の身の上を探らんとするや、彼れ其筋の探偵にあらず、又所夫ある女に接せんとする戯れ男にもあらず、彼れい唯だ此度の事件、餘りよ不思儀なるより、何とかして判事の知ざる所を迄り探り窮めん者と思ひ、且い近子に對し一種の憐みを生じたれゞ我力の及ぶ丈け助け遣らんと思へるあり進みゝ〳〵て既よ近子ゞ傍三歩ばかりの所まで到りし頃、意外にも近子の方より突々と此方へ歩み來れり、祐秀い指す鳥ゞ返て我を目掛けて飛來る思ひをなし驚く事大方ならず、思はず共所に蹈留れゞ近子い臆せる色もなく「貴方い何故あッて私しの後を尾けます、貴方の名前い裁判所で聞きましたゞ貴方い私しの身分を知ますまい、殿方に弄ばるゝ汚はしい女と思ひますう」と叱る如き調子にて言たれゞ祐秀い殆ど顏色を變るばかりなりしも漸くに氣を取直し「何う致して、左樣な失禮お心でいありません、如何よも私しゞ心を留れゞ夫ゞ貴方の身よ何うなりなりともすべき一方ならず アノ不幸なる罪人に心をお留なさる樣に思はれましたら近ゞアノ罪人に拜見するよ一方ならず」と眞い私しもアノ罪人を憐みますら、及ばずながら彼れゞ爲に力を盡さうと思ひまして」實にや同病い相憐むとやら、祐秀ゞ他人ながらも彼の人を憐むとおりていい近子い惱しとい思はず「ヱ、貴方ゞ、アノ罪人の爲よ、何う力をお盡しなさる」と申して未其筋道までい考へませんゞ、私しい今日罪人を辯護した春木博士と無二の友で殊に同じ倶樂部の仲間でも、春木も彼罪人の無實と云ふ事を堅く信じて居ますゆゑ罪人ゞ何と拒まうゞ、何うしても上告させると申して居まも、上告すれゞ玆に一ケ月の猶豫

が ら死んとする者あり、世の裁判官たる者自ら省みて可なり

第十回

丁切眞二の憐なる運命よ一同鼻詰らせて立去るが中にも近子い殆んど氣を失ひしに似たり、堪へ〳〵し泣聲を早く我家よ歸りて發せんと思ふ如く歸い一緒にと約束せし我夫を待つ事をすら打忘れ足よ任せて裁判所を立出つ只走に走りて「ノートル、ダム」の塔下を過ぎ早や瀬音川の橋近く來りし頃い呼吸迫りて足も進まず、玆に一休と橋の柱に寄り發と苦き息を吐つゝ、若し見る人もやあると斜に背後を眺むれバ十間ばかり隔りし所まで來りて頻に我姿を窺ふ人あり、是なん裁判所にて我心を引んとする如く隣席の貴夫人に向ひて罪人の噂話をなしたる彼の侯爵輕路祐秀なり、彼れ愈々我れと罪人との間に何ぞ譯あるべしと察し玆まで附來りしに違ひなし、エヽ蒼蠅しと思へども、此儘逃去る事もならず、逃去らバ彼れ何所までも纏ひ來りて終に我ガ撿察官の妻なる事を見認得ん、何とうして斷然掃ひ退るに如ずと獨り心に含きたり、輕路祐秀い近子の想ふに違はず全く玆まで附來りし者なり今しも近子ガ歩を留めたるを見たれバ、之を幸ひ其傍に寄行きて話を仕掛け其身の上を確めんと片頬に笑を浮めつゝ物言たげに近子ガ傍よ歩を進めぬ、凡て巴里の若き殿原の中にい散歩の度び、女の後を尾行きて話を仕掛くるを以て我ガ職務の如く思へるも多き程なれバ祐秀も斯る事にい功者なり、鳥指ガ鳥を狙ひて進み行く如く、其鳥を威さぬ樣、其鳥を逃さぬ樣にと苦心しながら歩を運ぶ、アヽ彼れ何ガ爲に斯も近子の身の上を探らんとするや、彼れ其筋の探偵にあらず、又所夫ある女に接せんとする戯れ男にもあらず、彼れい唯だ此度の事件、餘りよ不思儀なるより、何とかして判事の知ざる所を迄も探り窮めん者と思ひ、且い近子に對し一種の憐みを生じたれバ我力の及ぶ丈け助け遣らんと思へるあり進み〳〵て既よ近子ガ傍三歩ばかりの所まで到りし頃、意外にも近子の方より突々と此方へ歩み來れり、祐秀い指す鳥が返て我を目掛けて飛來る思ひをなし驚く事大方ならず、思はず其所に蹈留れバ近子い愿せる色もなく「貴方い何故あッて私しの後を尾けます、貴方の名前い裁判所で聞きましたが貴方い私しの身分を知ますまい、殿方に弄ばるゝ汚はしい女と思ひますう」と叱る如き調子にて言たれバ祐秀い殆ど顏色を變るばかりなりしも漸くに氣を取直し「何う致して、左樣な失禮な心でいありません、如何よも私しい裁判所に居ましたが、貴女の樣子を拜見するよ一方ならずアノ不幸なる罪人に心をお留なさる樣に思はれましたから近アノ罪人に私しが心を留れバ夫が貴方の身よ何うなりますう」祐「實い私しもアノ罪人を憐みますから、及ばずながら彼れが爲に力を盡さうと思ひまして」實にや同病い相憐むとうや、祐秀が他人なが らも彼の人を憐むとおりていい近子い惱しとい思はず「エ、貴方が、アノ罪人の爲よ、何う力をお盡しなさる」祐「何うとやして未其筋道までい考へませんが、私しい今日罪人を辯護した春木博士と無二の友で殊に同じ倶樂部の仲間でも、春木も彼罪人の無實と云ふ事を堅く信じて居ますゆゑ罪人が何と拒まうが、何うしても上告させると守して居まも、上告すれバ玆に一ケ月の猶豫



が出來ますから其の間よ私しも春木と力を併せ實の罪人を探さうと思ひます」近子い聞終りて身震せり罪人若し上告せずバ彼れが命い唯三日なりぜ、夫に就ても今此人の言ふ如くせバ、我身の爲め彼人の爲め、一人の助けを得るに均し」其樣なお積で私しの後をお尾なさッたのなら決してお咎めやしません、反ッて其ほ信切に感じます、私しい實にアノ不幸な罪人を憐みますから何うう春木辯護人よ逢ひ貴方の仰有ッた通り兎も角も上告する樣に罪人を說諭して貰ひ度と思ひますが」と初て逢ひし人に向ひ我が百年の秘密を明さんとするい最輕佻よ似たれども、外に便るべき者もなく、如何よもして彼れを助けんと思ひ詰る其心自ら制し難きが爲なるべく殊に侯爵輕路祐秀が身分と云ひ人体と云ひ他人の秘密を利用する爾る賤き男ならぬい充分明白なる所なれバ近子い寧ろ賴母しく思ひ初めしならん

「春木に逢ふのい何よりも易い事です春木いペロルト街よ住で居ます、貴女がお尋なされバ最も喜びませう」　近子い辯護人に逢ひ度き事山々なれど又能く考へ見れバ逢ふよい必ず我が本名を知さねバならず、當惑して頭を垂れバ祐秀早くも其心を察して「貴女が彼自分でお逢なさるも穩りでありませんから私しが充分春木に說き必ず上告させる事よ致しませう、併し私しい貴女の內情よまで立入り根堀り葉堀り貴女が罪人を憐れむ其根元の秘密まで聞出さうとい致しません」と紳士たるに雅ざる此一言、近子い益々安心し「此上のお願ひにい私しの本名身分なども探らぬ樣に願ひ度と思ひます」「勿論です、堅くお約束やします、夫に此後、誰の家で

貴女にお目よ掛る事があつても必ず初對面の様よして居ませう」近「イエ私しい交際社會へ出ませぬから決して他人の家でお目に掛る事いありません」祐秀い思ひしより容易く此婦人に信じられしを心の底より喜びて「夫でい充分に私しを信じ、私しの言ふ事、私しのする事に安心なさるが好ひ座います、決して貴女の身分を探るなど左様な卑劣な事い致しません、其證據にい是ら私しい後をも振向ずよ立去ります、何時でも私しに御用があれば名刺を差上て置きますうら無名の端書を御遣しなされば私しい何所へでも直に參ります假令ば何所の公園とう何所の町とう貴女が茲で逢へば大丈夫だと思ふ場所と時間だけお記し下さらば、外の事い何も書くにい及びません」と云ひつゝ名刺を取出し之を橋杭の上よ置き、丁寧に默禮して其儘今の言葉の如く後をも見ずよ立去れり、近子い姿の見えずなる迄祐秀を見送りしが、如何にも彼れが言葉の如く一度も振向ずして去たる事と云ひ、殊にい名刺を手より手に渡さずして橋杭の上に置き去たる事と云ひ眞に紳士の振舞なれば、初て其名札を取り撿むるよ表に侯爵輕路祐秀と名前を書し裏よべリー街十四番地と住所を書したり、近子い之を我が衣嚢よ推入れ幾分う心強き思をしつゝ我家を指して歸り行けり

第十一回

輕路祐秀に分れてより近子い我家に走歸れり、門口より先づ二階の方を見上れば、侍婢お古が今日の裁判を窃道ひて近子の歸りを待乘し如く二階の窓より此方を望めり、廣き世界にお古の外、我が心を打明る者なければ、近子い其儘二階へと走上り「古や先ア何うしたら好らうヂヤ、意中人だよ、意中人だよ」と打叫ぶ、お古も驚きて色を變へ「エ、芳男樣でありましたり」近「夫でお前死刑の言渡を」と半分言ひて泣聲を發したり「古「エ、エ、何と仰有います、芳男樣が死刑の言渡しを、誠ですう、本統ですう、先ア何うしたら好うぬ座いませう、アノ芳男樣が人殺しの罪人ですう、夫い必ず裁判が間違です、其樣な事いありません」近「でも死刑の言渡を受けたのだもの」古「夫で芳男さんい貴方の顏を見ましたり」近「初めの中い氣の附らぬ樣子だつたが、仕舞になつて私を見て、物言ひ度げに目配を」と言ふさへも涙なり「古「夫でも本名をお明しなさらず明す者ろヂヤ、明さずに宣言を受けたのサ」古「でも貴女罪もない方を殺す事い出來ませまい、何の樣な惡人でも許されると云ふ事があります、芳男樣に限ツて人殺の罪なぞい犯しません」近「犯さぬ事い分ツて居るが自分で言開きをせぬ者だうら到頭罪よ落されたよ、二月廿八日の夜に何所ぇ居たう夫さへ言へぬから」古「エ、何と仰有る二月廿八日ですう」と云ひつゝお古い壁に掛たる暦を取り「二月二十八日い土曜日でしたヂ」近「土曜日が何としたエ」古「芳男さんが貴女に手紙を寄越た日です」近「お前い能く其日を覺えて居るヂ」古「覺えて居ますとも二月い二十八日が終の日で旦那樣うら其月の給金を戴きました」近「爾々、私しい又アノ手紙を讀でうら氣が轉倒したのう日取なぞい忘れて居た、新聞紙にチケトン街の人殺が出、罪人が捕ツたとあつた時も眞逆よ其罪人が芳男さんだらうとい思はず、其後旦那が罪人の樣子を話し實名を白狀

せぬと仰有ッた時初て若しやと氣が附た、今日裁判所へ入込だ時までも、疑ひながらも豈やア
ノ人でいあるまいと思ッて居た古「私しも爾ですよ、貴女に逢ふ事が出來なうッたので芳男さん
い直に此巴里を立去た事だと思ッて居ました、先にも爾でしたもの貴女に逢ふ事が出來ぬ爲め
失望して其儘外國へ行きまして、チエ貴女、夫でも誰の裁判所で芳男さんの顏を見知て居さうな
者ですが近「私しの外にい見知た者がなうッたよ古「爾でしたり、成るほど爾うも知ません、芳男さ
んい別よ友達もなし、夫に米國へ行く前い長い事下等社會へ入込で世の交際を絶て居しッたり
らですが若し大旦那が裁判所へ入しッたら必ず顏をお覺えでせう近「夫いお前、阿父さんなら忘
れる者り、だけれど阿父さんい裁判事なども嫌ひで傍聽にい行うぬうら古「若し入しッたら大變
ですチ近「大變ともお前何の樣な事があつても阿父さんに此事をお言でないよ古「ナニ私しが申ま
せう、夫い最う安心ですが、何より先づ芳男さんを助ける工夫が肝腎でいありませんう、隨分
芳男さんい惡い事をなされ貴女にさへ迷惑を掛た事もありましたが何ぼ何でも人を殺したり盜
みをしたり其樣お汚はしい事い身体が腐ッてもなさいますまい近「爾とも子、其樣な人とい魂性
が違ふもの古「夫に今度の事なども芳男さんでない事い私しが證據を持て居ます近「ナニ、お前が
證據を古「ハイ、只今も貴女が爾仰有ッたでいありませんう、二十八日の夜よチケトン街より外
に居た事が分れが無罪になると近「爾とも夫さへ分れが好いと判事も幾度う問返したのサ古「夫な
ら最う分ッて居ますよ只今も申す通り二十八日に手紙が來て今日必ず巴里へ行くうら今夜の九

時にシユリーの橋で密に逢て呉れ是非とも逢ねがならぬうらと貴女の許へ言て來たでせう近「夫
い私しだッて覺えて居るワ、其後アノ手紙い繰返し〳〵讀だのもの、夫を忘れてなる者うチ
古「所が其夜い生憎よ旦那が宵うら家に入しッて貴女が何うしても忍び出る事が出來ませんでし
たらう近「爾サ私しい最う自列たくて〳〵なりや仕なうッたのサ古「ソレが二十八日の夜ですよ、
其夜、芳男樣い橋の上で貴女を待て居ましたよ近「夫い、けれど九時頃だらう、判事の問ふのい十
二時少し前まで何所よ居たと云ふのだものの古「イエ芳男樣い橋の上よ貴女を待て十二時前まで居
ましたの、私しも氣よ掛ッてなりませんうら時々窓うら橋の方を眺めました、丁度十時頃うら
雨が降て次第に劇しくなりましたのに、芳男さんい夫にも拘はず、敎會の時計が十一時を打て
ズッと後まで橋の欄干に在るランプの下に蹲れ此家の二階の窓を振向ていい見て居しッた、私し
いお可哀相で一人で氣を揉で居たのです」是よて見れが丁切眞二てふ罪人が執れの所に居た
るやを明し得ずして徒よ市街を步み居たりと言立しも全く近子を保護するが爲と知る、近子い
思ひ合せて今更の如く又深く心を動し「夫だけの事い分ッて居ても一古「ハイ證據と云ふ程の證
據いなし、裁判官に聞せた所が何の益よも立たず、肝腎の芳男樣い助らずに貴女のお身分に障
ります近「古や何うしたら好らうチエ古「奧樣何うすれが好う洋座いませう」前額を集めて思案
に呉るゝのみなりしが、お古い漸く顏を上げて「貴女、村井孃の許を尋ね相談なさッていい如何で
す近「芳男さんの妹の所をうエ古「ハイ彼の方い貴女と違ひ自分の兄さんの事ですうら名を出した

とて身分に掛る事ゝおし誰憚うらず骨を折る事が出來ませう」　云へゞ近子ゝ不安心の面持にて「村井嬢ゝ私しゞ芳男さんを捨て此澤部家へ婚禮すると極ッた時うら私しを人でなしの樣に言て此上もなく憎で居るうら「古」夫ゝ貴女、初の事ですよ、貴女ゞ父上に迫られて餘儀なく婚禮する譯を話してうらゝ其心も解けましたし「近」でも私しゝ久しく音連をせぬ末に、偶々尋ねて行さ、貴女の兄さんゞ人殺の罪で死刑になりましたとゝ何は何でも言へないもの」と打萎れて語る折しも忽ち玄關よ當りて戸を推開く鈴の音頻なり二人ゝ驚きて立上り「アレ旦那ゞお歸りだ

第十一回

所天の歸りと知りて近子ゝ玄關に出迎へぬ、所天澤部忠氏ゝ見事に被告を死刑よ處したる我ゞ手柄よ勇み立ち「今日ゝ實に大勝利だ」と云ひつゝ近子の手を取りて直ちに居間へと進み入り其服を脫ぐ暇さへなく「アゝ今日はゞ愉快な事ゝない、裁判の濟だ後で、判事長ゞ己の背中を叩き何うも近來の大出來ですと賞めて呉れた、是で出世の道ゞ開けた、此次上役に空地の出來次第直に一等ゝ進められるうら近子お前も歡ぶゞ好い」と己ゞ出世の外にゝ名譽も目的もなき當世流の才子なれゞ獨り嬉びて雀躍せり、近子ゝ夫の勞めに止を得ず妻とありたる者にして素より眞實に所天を愛する心なきも、夫婦と思へゞ今までゝ相應に慕ひ居たれゞ此有樣を見てよりゝ所天の顏ゞ俄に恐しくなれり、無罪の人を罪に落し夫で自ら「是はゞの嬉い事ゝない」とゝ何事ぞ、思へゞ身震のせらるゝのみ、漸く我ゞ妻の不機嫌なるよ氣附てや「オヤ、お前ゝ何ううしたのう」と問ふ「ハイ裁判所で氣分ゞ惡くなりましたのに、爾々先程ゝ氣絕しうけた樣で私も一方ならず氣遣ふたよ、歸りよゝ控所に待て居るうと思ッたのに「近」ハイ最うお待申す氣力もなくありましたうら直よ歸りました「己」も爾だらうと思ッたうら大急で歸ッたのサ、併し大した事もないと見え斯して起て居られるのゝ結構だ、何うだ今夜ゝ身祝ひに何所ゝ料理屋へ晩餐よ行ふでゝないゝう」　近子ゝ心も鬱々し「否ですよ、私しゝアノ不幸な罪人ゞ目よ附て、今頃ゝ牢の中で縛られて居るうと思へゞ可哀相でなりません「己」其樣な事ゞある者う、今夜ゝ未縛られも何うもせぬ、併しお前ゝ詰らぬ者を憐むじやあいうアノ樣な大惡人を「近」だッて餘り無刻たらしいじやありませんう「己」ナニ人、女と云ふ者ゝ兎角詰らぬ事を氣に留めて仕方がない、罪人ゞ少しノッペリして小說の主人公とでも云ふべき面附をして居ると直に哀れだの何だのと「近」でも私しゝ眞實アノ男ゞ罪人う、未疑はしいと思ひます「己」ナニ其樣な事ゞある者う、辯護人の春木さへも實ゝ彼れを惡人と信じて居るのだうら每はゞ旨く辯護ゞ出來ぬじやあいう、何でもアレはゞの罪人だうら能く調れゞ猶是までに幾等も人を殺したに違ひない」　恐しいと思ひたる我所天今ゝ恐ろしき度を過ぎて返ッて馬鹿馬鹿しき人に見ゆ「貴方ゞ罪人〳〵」と仰有るこそ本統の人殺と云ふ者です」と近子ゝ口まで出たれゞイヤ〳〵今ゝ斯る事を言ふべき時よ非ずと漸くよ思ひ止り、今ゝ彼の罪人執れの牢に繫がれ居るやと問ひ掛けしに忠氏ゝ近子ゞ心の

と て身分に掛る事ゝ あし誰憚らず骨を折る事が出來ませう」云へど近子ゝ不安心の面持にて「村井嬢ゝ私しが芳男さんを捨て此澤部家へ婚禮すると極ッた時うら私しを人でなしの樣に言て此上もなく憎で居るうら古夫ゝ貴女、初の事ですよ、貴女が父上に迫られて餘儀なく婚禮する譯を話してうらゝ其心も解けましたとゝ何ば何でも言へないもの」と打萎れて語る折貴女の兄さんが人殺の罪で死刑になりましたとゝ忽ち玄關よ當りて戸を推開く鈴の音頻なり二人ゝ驚きて立上り「アレ旦那がお歸りだ

第十一回

所天の歸りと知りて近子ゝ玄關に出迎へぬ、所天澤部忠氏ゝ見事に被告を死刑よ處したる我が手柄よ勇み立ち「今日ゝ實に大勝利だ」と云ひつゝ近子の手を取りて直ちに居間へと進み入り其服を脫ぐ暇さへなく「アゝ今日ほど愉快な事ゝない、裁判の濟だ後で、判事長が己の背中を叩き何うも近來の大出來ですと賞めて呉れた、是で出世の道が開けた、此次上役に空地の出來次第直に一等ゝ進められるうら近子お前も歡ぶが好い」と己が出世の外にゝ名譽も目的もなき當世流の才子なれゞ獨り嬉びて雀躍せり、近子ゝ夫の勵めに止を得ず妻とありたる者にして素より眞實に所天を愛する心なきも、夫婦と思へゞ今までゝ相應に恭ひ居たれど此有樣を見てより所天の顏が俄に恐しくなれり、無罪の人を罠に落し夫で自ら「是ほどの嬉い事ゝない」とゝ何事ぞ、思へゞ身震のせらるゝのみ、漸く我が妻の不機嫌なるよ氣附てや「オヤ、お前ゝ何うかしたの

う」と問ふ「ハイ裁判所で氣分が惡くなりましたのに、爾々先程ゝ氣絕しうけた樣で私も一方ならず氣遣ふたよ、歸りよゝ控所に待て居るうと思ッたのに近「ハイ最うお待ヤす氣力もなくありましたうら直よ歸りました」忠「己も爾だらうと思ッたうら大急で歸ッたのサ、併し大した事もないと見え斯して起て居られるのゝ結構だ、何うだ今夜ゝ身祝ひに何所う料理屋へ晩餐よ行ふでないう」近子ゝ心も鬱々し「否ですよ、私しゝアノ不幸な罪人が目よ附て、今頃ゝ牢の中で縛られて、ナニ其樣な事だらうと思ッた、其樣な事が有る者う、今夜ゝ未縛られも何うもせぬ、併しお前ゝ詰らぬ者を憐むじやあいうアノ樣な大惡人を」忠「だッて餘り無刻たらしいじやありませんう」ナニ人、女と云ふ者ゝ兎角詰らぬ事を氣に留めて仕方がないふべき面附をして居ると直に哀れだの何だのと」近「でも私しゝ眞實アノ男が罪人う、未疑はしいと思ひます」忠「ナニ其樣な事がある者う、辯護人の森木さへも實ゝ彼れを惡人と信じて居るのだうら每ほど旨く辯護が出來ぬじやあいう、何でもアレほどの罪人だうら能く調れゞ猶是までに幾等も人を殺したに違ひない」恐しいと思ひたる我所天今ゝ恐ろしき度を過ぎて返ッて馬鹿馬鹿しき人に見ゆ「貴方が罪人〳〵」と仰有る其罪人ゝ全く無罪で、無罪の人を罪に落した貴方こそ本統の人殺と云ふ者です」と近子ゝ口まで出たれど〳〵今ゝ斯る事を言ふべき時よ非ずと漸くよ思ひ止り、今ゝ彼の罪人敎れの牢に繫がれ居るやと問ひ掛けしに忠氏ゝ近子が心の

底を知ねバ「若し罪人ガ上告せぬと極れバ直よ死刑場の傍よあるラ、ロケーの牢屋へ送られるのサ」とて是より猶ほ辯に任せ死刑に處せらるゝ恐ろしき有様なぞ喋々と述べ初む、近子ハ聞兼て「最う澤山ですよ、其様な恐しい話しい止して下さい」と云ふに忠氏ハ我ガ辯説の斯までも人を感せしむるやと歡ぶ如く滿足して口を閉ぢたり近一度死刑よ言渡された者ハ何うしても助りませんう「忠先づ助ううぬ、今日の罪人ハ今までの強情を張通す爲に上告せぬと立派よ言切たけれど、爾ハ行うぬ、必ず上告するだらう、上告した所ろで裁判の仕方に少しも間違ッた所ガないうら棄却されるハ必然だ、棄却されたら今度ハ哀訴と出掛るけれど、此様な名前も叨さぬ罪人を許してハ後々の見せしめにならぬうら決して許さぬ様よ己ガ上申する積だ」近子ハ殆ど悲さに堪へず「夫でハ罪人の無罪ガ分ッても夫でも矢張り死刑にされるのですう、夫じやア幾等法律でも餘り邪慳じやありませんう「忠法律でハ唯其罪人ガ未死刑に處せられぬ中、別に又其罪の嫌疑者ガ捕まり、其者ガ裁判を受けて眞の罪人だと分ッた時ばうり前の裁判ガ無効になるのだ、外よ罪人ガ出て同じ裁判を受けぬ限ハ前の罪人を許す事ハ出來ぬ、決して出來ぬ近「其代り本統の罪人ガ別に出て來れバ必ず助うりますう」忠「別に出て來て裁判を受け愈々夫と確定すればサ」左れバ全く助け出す工夫の盡たる者に非ず、誠の罪人を尋ね出し之を裁判所よ出すに於てハ彼の丁切眞二を救ひ得べし、先刻輕路祐秀ガ無理にも罪人よ上告させ其間に眞の罪人を探さんと云ひたるも之ガ爲なるべし、斯る手傳人ある上ハ如何よずるも罪人を救はんと茲に近子ハ其心を決したれバ、之より所天ガ是非とも共に晩餐に出掛んと云ふを拒み、氣分惡けれバとて獨り退き此夜ハ早く臥床に就きたり、之に由り澤部忠氏ハ己ガ勝利の祝盃を擧んとて只單身カンプ、エリシーの方を指し立出たり

第十三回

茲に又輕路祐秀ハ近子よ分れてより直に辯護人春木の許を尋ねんと思ひしガ春木ハ毎も骨の折る辯護を濟せし後ハ氣晴らしにとて直よ倶樂部よ來り氣の合ひたる友達を引連れて晩餐に出掛るガ癖なれバ倶樂部にて待つよ如ずと茲よて直様倶樂部へ入行きしよ茲に集へる人々ハ祐秀の傍らに寄來り今日の裁判の様子を問ふ、祐秀ハ好き程に話し終り「未春木ハ來ぬう」と問ふに未見えぬと答ふ、彼れガ來るまで歌牌でもして時を消さんうと歌牌室の内を覗くよ此頃米國の金滿家ありとて此倶樂部よ入込たる鷲根鷹三と云へる商人頻に大勝負を試み居る様なれバ、斯る激戰に手を出してハ折角春木の來るとも知ずと過を事ともならん、如うず歌牌嫌ひの人々と雜話しながら話んにハと、去りて此方へと立來るに此時恰も入來るハ春木辯護人なり「オヽ春木君ハ好い所へ來た實ハ君を待て居た」舉「僕も餘り氣色ガ惡いので例の通り氣晴よ來た、君の様な氣の合た人に逢たハ幸ひだ」とて是より二人ハ共々よ傍なる空室へと入込たり春木ハ兎角罪人の事氣に掛ると見え「何うも今日の様な不完全な裁判ハない筈」でハ君、アノ被告を無罪と思ふ」舉「思ふとも、初ハ爾でなうッたガ裁判ガ濟だ後で篤と彼の様子を見るに決して惡人でない

罪人ハ必ゼ外に在る」袖「でハ其本統の罪人を探し彼れを救ひ出して遣うじやないか」拳「僕も其積で兎も角も上告せよと勧めたが最う全く断念めて居ると見え幾等上告しても證據もないから無益だ何うせ殺される者なら本名だけも助けて早く死るが近道だと云ッて承知せぬ、併し明日最一度説て必ず上告させる積りだ、少々費用が掛ッても僕が自腹を切る」袖秀ハウカ〳〵と「君が自腹を切ずとも、丁切眞二を救ひさへすれバ歓んで其費用を出す者が婦人仲間ゟ幾らもわらう」拳「有るとも有るのが返ッて彼れの身の破滅になつたのだ、陪審官の細君達が孰れも夢中になつてうら陪審官が幾分う忌々しいと云ふ氣を起したのだ、澤部撿察官の細君さへアノ通だもの」袖「エ何だとエ、撿察官の細君が、矢張傍聽に來て居たのう」拳「來て居たドコロ氣絶して君に抱起されたじやないう」袖「エ、彼れが澤部撿察官の細君う」と袖秀ハ初て聞きて打驚けり拳「爾サ、僕ハアノ父の毛村隠居の許へ出入したうら能く顔を覺えて居る、正當の細君だよ」今までハ名前も知ぜ身分も知ず、唯不審の心に引され彼の婦人を助んと思ひ居たるに、撿察官の家内と聞きて、事中々容易ならず、撿察官自身ハ知ざるよ其妻私に罪人を愛せるとハ奇聞中の奇聞なり、今まで決心したる如く助けて好きう、助けて悪きう、袖秀ハ宛ら夢路に迷ふが如し、春木ハ其様子を見て取りて「君ハ何だう匆々に裁判所を立去たらうと思ッたが」袖秀ハ當惑し「ナニ其様な事ハないが併し君と僕との間で隠し立にも及ぶまい、エ君、爾だらう、尾て行て人通のない所で話を仕掛け、罪人を助て遣れとう救ふて遣るとう何ゟ其様な約束をしたゞらう、左もなけれバ君が夫ほど驚く筈ハない」と鋭き眼に見破られて袖秀ハ返事ゟ困り「ナニ其様な事でハない」拳「イヤ偖と爾だよ君ハ何ゟ事があれバ直に椽の下の力持を初るが蕩樂だらう、爾だう爾なら爾だと云ひたまへ僕も亦其積で話があるが」今ハ隠すにも隠し兼「君がアノ細君を知ぬなら僕ハ飽までも隠す積だが、爾まで知て居るあらバ仕方がない、實ハお察しの通りサ、名前や身分ハ決して探りもせねバ他言もせぬと云ふ約束で、及ぶだけ丁切眞二を助ける工夫を仕て遣うと受合た、けれどもアレが撿察官の細君と分れバ少し遠慮もせねばあらず實ハ考へ物だて」拳「ナニ考へる事ハない、無罪の人を救ひ裁判の誤りを糺すのハ此上もない善根だらう、澤部忠氏の細君に約束をしたとせぬとに拘はらず僕に力を合せて此事件ゟ骨を折たまへ、僕も必死ゟ盡すうら」袖「君が爾まで云ふなら出來るだけ骨を折ふけれども僕が探偵吏と云ふでハなし何うして善う更に分らぬ」拳「サ探偵吏でないうら幸なんだ、探偵吏なら幾等探しても丁切眞二が罪人だと云ふ證據より外ハ探ッて來ぬ、今まで探偵の洩した所を探るのだうら」袖「併し先づ何う云ふ手續にするのう」拳「僕も君も充分交際が廣いうら、夫となく心當の廉々を聞合するのサ撿察官の夫人が彼に心を寄て居ると云ふのハ何よりの手掛りで事に由れバ昔の情夫ゟも知れぬと云ふ者、依て僕ハ先づ夫人の里の今云ふ毛村隠居ゟ逢ひ夫となく探ッて見る、夫で罪人の身の上が分れバ夫うら夫へと何の様な證據が出て來るも知れぬ、夫に差當り探るべきハ、長兵衛の殺された宿屋

だテ、彼の宿屋の主人を初め番頭まで今日證人として裁判所へ呼出され僕の顔を見知たら僕が行てい直に夫と悟られる、是い最う君ゑ限る君がアノ宿へ入込み、長く泊ッて居る客を初め主人番頭給仕等に聞合せバ何の様な手掛を得るうも知れぬ、夫に又僕の鑑定でいアノ主人も怪いテ、番頭が丁切眞一を見て、二十八日の昼過に長兵衛を尋ねて來たのい此人でないう分らぬと言立たのに主人が獨り此人に違ひないと言切るが不審の點サ、總て證據人と云ふ者い確に知て居る事でもなるべく非乎と言立る者で、夫を故々明うゑ言切るのい何う目的がある、是い僕が最う多年の經驗で知て居る所だうら間違ない、事に由るとアノ主人が滯々と實の罪人を拵附て居るけれど其人を罪ゑ落していい都合が悪いとう何とう云ふ情實で、其人を庇ふ爲めアノ樣に言たうも知れぬ、成るほど爾だ、夫とも主人が其人うら賄賂でも貰ッたうと云ふのだ 拳「爾サ、何しろ一方い毛村家、一方い宿屋と之だけの筋道を定めれバ是で先づ手初めにい充分だ、僕い此外ゑも探る所が澤山あるうら、手を分て捜も中にい又偶然の事うらして偶然に手掛を得る者だ今まで辿も到底叶うらぬと思ッた罪人を偶然の事うら助けた例しが幾等もある、何しろ我が骨折と偶然との二個が便りだ」 二人の話し漸く熟したる折うら突然此室の戸を開き無作法ゑ入來る男あり、祐秀い驚きて其顔を見上れバ先程歌牌室にて熱心ゑ勝負し居たる彼の米國の金滿家鷲根鷹三なり 鷹三何が爲ゑ此所へ入來りしぞ

突然入來りし鷲根鷹三い無作法ゑも春水に向ひ今日の裁判い何うなりました」と問ふ、春水い「不興氣ゑ「貴方い全体何方です」と咎む、鷲根い最平氣にて「オヤ貴方い未私しを知ませんう、三只前に此倶樂部に入り既ゑ輕路祐秀さんとい幾度も歌牌の勝負をした米國の商人鷲根鷹三と云ふ者ですが」 聞きて春水い異樣の想をなし祐秀の顔を眺むれバ祐秀も同じ想ひと見え、同じく春水の顔を眺む 拳「貴方い併し何故に爾う裁判の事を聞度いとお思ひなさる 鷲「聞度のい當然の事でせう、殺された長兵衛とい同國人の上ゑ多少の知合でもあり殊に去二月に同じ船で此國へ來ましたもの」 春水い驚きたる樣子にて「爾ですう長兵衛の知合ですう 鷲「ハイ長兵衛も私しも同じシカゴの商人です 彼れい早くうら桑港へ行き鑛山事業に從事して私しとい左まで懇意でもなけれど同船した爲め互ひに近しくなりました 拳「夫ほど知合なら貴方い何故證人として裁判所に出ませんう、切てい傍聽にでも行き相あ者ですが 鷲「今朝傍聽に行ましたれど、時間が後れて這入る事が出來ませんだ、夫だうら聞くのでも、裁判い何うなりました 拳「被告が死刑ゑ處せられて落着しました、貴方い被告の身の上に心當いありませんう、彼れも確に米國に居た者ですが 鷲「顔見ねバ分りません、何の樣な男です 拳「背が高くて丁度貴方の樣でも」巴里の紳士い夫となく人を嘲るに巧なりどう、春水い眞面目の紳士おれど交際に長たる丈、斯る言葉勞せずして口を出づ、夫とも深き心ありて故と發せし者なるう、鷲根い我嘲らるゝとい知ぬと見え相も

變らぬ平氣にて「爾ですゥ私しに似て居ますかで
る樣な事ゲあつてい私しも迷惑ですゥら」袖秀い横合より鎗を入れ「大丈夫、罪人い美男子です
ゥら貴方ゲ見遊へられる氣遣ひいありません 驚「でい罪人い美男子で私しい不男だと云のでも
ヂ、不男でも罪人と見遊へられぬ方ゲ仕合です」と言終りて自ら呵々と打笑へり 拳「貴方い何所に
宿ツて居ます 驚「大旅館でも、長兵衛も私くしゲ大旅館へ泊れと勸ましたけれど、宿賃ゲ高いゥ
らとて怪智な了見を起し、名も知れぬ下等の宿へ泊ッたゥら終に殺される事になりました、云
はゞ自業自得です 拳「貴方の御用い夫だけですゥ 驚「ハイ是だけです、唯裁判の落着を聞に來たの
です、誠にお邪魔でした」と云ひ捨て驚根い又も歌牌室を差し立去れり、後ょ袖秀い春木ょ向ひ
「何うだらう、若し彼奴ゲ本統の罪人でいあるまいゥ 拳「僕も爾でいないゥと思ッたゥら、氣を附
て見たゲ爾でないよ、本統の罪人なら成るべく長兵衛と知合でわつた事を隱さうとする筈だ、
必要もないのにペラ〳〵と同船した事など多舌りいせぬ 袖「併し夫ゲ君の云ふ偶然と云ふ者だ、
自分ゲ本統の罪人だゥら裁判の樣子を氣遣ふのゥも知れぬ 拳「僕も爾思ッたゥら罪人の姿ゲ足下
に似て居ると云たけれど彼れ平氣でわつた、身に覺えのある奴なら必ず顏色を替る筈だ、とい
云へ彼れも長兵衛の知人でわつて見れゞ矢張吾々の手掛の一だゥら眼を離す事い出來ぬ 袖「爾と
も、彼れ實際何の樣な事を知て居るゥも知れぬ 拳「夫い爾として既に吾々の運動の方針だけい極
ッたゥら手初い明日の事とし是ゥら晩餐に行ふでいあいゥ 袖「好らう、就ていい僕ゲ案內する所ゲ
ある、今夜外國館ょ音樂の合奏ゲあるゥら行ふでい
成だゲ、合奏ゲあつてい雜踏するだらう 袖「イヤ雜踏しても僕ゲ席を取てある、實い栗田孃と今
夜合奏へ行く約束で乘てゥら席を取て置けと言込でわつた所、考へて見ると丁度裁判の日だゥ
ら今朝急に栗田孃へ斷手紙を出した、夫だゥら僕の席だけ猶空て居る筈だ 拳「でも若し栗田孃ゲ
一人で行て居やア仕舞ゥ 袖「爾サ、アノ樣な女だゥら事に由ると田舍の大盡でも捌にして連て行
て居るゥも知れぬゲ、居たとても不都合いない 拳「でい行ふ 袖「サア」と二人い莚を立出しゲ、抑も
外國館と云へるい月ょ幾度ゥ滑稽音樂の合奏ありとゥ、頓て二人
い北館に達し設の卓子に向ひて食事を初しに同じ室なる片方の隅に當りて二人ゲ方に背を向け
最親しげに語合へる一男一女の客こそあれ、春木い早くゥ眼を附け「エ、輕路君、アノ二人の客
を見給へ、二人とも隅の方向て居るのい顏を見せまいと思ッてだせ、女い栗田孃ょ背姿ゲ似て
居るじやないゥ 袖「成るほど似て居る、イヤ彼の着物を見れゞ全く栗田孃らしい僕の推量した通
り田舍大盡を生擒て連て來たのだ「イヤ待たまへ田舍大盡でおいよアノ肩の張具合い確に見覺
えゲある 袖「イヤ弗箱へ首をすげた樣ゥアノ後ろ姿い何うしても田舍大盡だ」春木い一層聲を潛
め「イヤ爾でない、實いアレゲ我々の手掛だせ 袖「手掛とい 拳「イヤ先刻話した毛村隱居よ 袖「何だと
エ、彼の弗箱の樣な男ゲ撿察官の細君の父君ゥ 拳「爾サ 袖「馬鹿を言たまへ、其樣な人ゲ栗田孃な
ぞょ手を引れて此人込の場所へ來る者ゥ 拳「所ゲ來るゥら可笑ゥらう、君い未毛村隱居の人柄を

知らぬうら爾思ふが、實ゝ子、彼の隱居ゝ此上もない蕩樂者サ、昔の通人ゝ己一人と云ふ自惚で今でも若い女にうらうふのを第一の樂にして居るよ、六十になつて顏へパスタマックを塗る爺さんだうら大概ゝ察したまへ、其癖家よ居る時ゝ此上もない眞面目な顏をして隣近所でゝ方正の君子と思はれて居る、夫だうら此樣な所へ來ても成るべく人の方へ向ぬ樣にして居るのだ祐「其樣な秘密を又君が何して知て居るゝ」隱居も初の內ゝ僕に痛く隱して居て僕も固より知なんだが或時素性の惡い女に掛合て其亭主とう情夫とう云ふ者に座り込れた事があるので殆ど裁判沙汰にまでならうとして、止を得ず僕に其實を明し仲裁を賴だのサ、其時の話だッたが娘を餘所へ片附る迄ゝ充分辛抱して居たが娘が檢察官の許へ嫁てうら誰に氣兼もなく蕩樂三昧に世を送ると云た、だうら娘でも隱居の蕩樂ゝ知ずに居る祐「面白い爺さんだ子」春「兎に角も吾々が丁切眞二の身の上を聞ふと云ふのゝアノ爺さんだうら今夜何うらうして話を仕掛たい者だ子」祐「待たまへ僕に工夫がある」とて輕路ゝ手を延べて水差を取落せば水差ゝ微塵に碎け滿堂を驚ろすほどの響をなせり、此響に驚きて彼の二人ゝ春水と輕路の方に振向たり

第十五回

落て碎ける水差の音よ驚き振向きたる二人の顏を見るよ果せるうな毛村隱居と栗田孃なり、隱居ゝ春水の顏を見て少し極り惡げになしたれや春水ゝ如才なく聲を掛け「ヤア毛村さんですうか盛です子」隱居も今ゝ知ぬ顏よ過し難く殊よゝ何も角も能く知れる春水に向ひ隱し立するゝ無益あれば反て打解たる体を示し「何うも惡い所を目附りましたよ、最う仕方がない何うです此卓子へお移りなさッてゝ」願ふても幸ひと春水ゝ祐秀に目配するに祐秀も至極贊成の樣子なれば舉お言葉の通り其方へ移ッて一緒よありませう」と云ひつゝ席を移し春水ゝ隱居の前、祐秀ゝ栗田孃の前よ坐したり、栗田孃も事よ慣れたる女なれば更に常惑する色もなく「春水さん貴方のお連を私しにも此旦那よもお引合なさいな」と云ひつゝ樣子ありげに祐秀の顏を眺む、春水ゝ心得て「毛村さん、是なる若者ゝ路田秀次郎と云ふ私しの書記ですうら以後お心置なくお附合を願ひます」隱居ゝ祐秀の顏を見て「若者どころ立派な紳士だ、栗田孃見初てゝ了ないせ」と云ひ聲を放ッて打笑ふゝ早や酒の氣の大分廻り口までも輕くなりたる者と察せらる「見初るうも知ませんよ、秀次郎さんと云ふのですう、アゝ秀ちやん、呼好いお名ですヲ」と云ひて再び祐秀の顏を眺むるゝ隱居の前を程好く繕ひ呉れとの謎ならん祐秀ゝ素より夫等の掛引よ慣たる者なれば極めて初心の振を見せ萬事控へ目に捌へたり、是よて先づ一通の挨拶濟みたれば春水ゝ是より何うして彼の丁切眞二の事を探り試みん者と先づ話を其方へ向「今日裁判所で奇妙な事件を辯護して貴方の婿君に逢ましたが忠氏ゝ中々の雄辯家になりました子」澤部忠の名前を聞き隱居ゝ忽ち苦々しき顏をなし「ヤア私ゝ最うアノ婿ゝ大嫌ひだ少し譯あッて娘を遣たけれど今でゝ最う後悔して居る、矢張商人ゝ商人を婿にするに限るよ

私ハ近々君に頼み離縁の訴訟を起して貰ふ積りで居る」弁「譯もなく離縁などが出來ますものう、夫に忠氏ハ遠うらずして撿事長に進みます中々の人物だうら」毛「ナニ彼れが出世するハ全く金の爲だ、私が娘に附て遣た持參金のお影で幅が利くのだと根が商賈一方の人だけよ兎角金の事のみ言出るハ最下士ひて聞ゆ」弁「却々爾でありません今日も私しの辯護したのハ人殺の嫌疑者でありましたが、澤部氏の辯舌で遂に死刑になりました」毛「人を殺せ樣な奴が死刑にされハ一人でも惡人が減る譯だうら夫ハ結搆だが、其罪人ハ何者だ」栗田嬢傍より口を容れ「オヤ貴方ハ夫を聞ませんう丁切眞二とて此頃非常の噂ですのに」毛「ア、夫う聞た事ハ聞たが、既よ死刑と極ッたなら當人が其名前の通り眞二に丁切られて仕舞ふだらうと言終りて自ら我洒落の巧なるに感心する如く又呵々と打笑へり、春木ハ玆ぞと思ひ「併し奇妙でハありませんう實名も分らねバ身分も分らず、唯米國うら來たと云ふ丈で此廣い巴里に其顔を見知た者が獨りもないとハ」毛「別に不思儀でもないて、富家の息子でも何うして貧乏になれバ再び身代を起す積で米國へ行き一稼して歸て來ると巴里ハ薄情者の住家だうら前に怨意にした者まで最う疾くに忘れて居るのサ私も丁度夫に能く似た例を知て居る」能く似た例と自身ハ猶ハ夫と悟らぬならん、春木ハ竊よ輕路祐秀と目を見合せ、更に隱居に打向ひ「ヱ、能く似た例とハ何の樣な事捌です」毛「ナニ浮とした事で米國へ渡り其後死だのう消て仕舞たのう更に跡形もなくなつた者があると云ふのサ」弁「でハ若し今云ふ丁切眞二が其者でハありませんう」毛「ナニ其樣な事ハない、若し其者なら決して名前を隱しハせぬ、自分の身分が賤しくないと云ふ事を知せる爲に大な聲で本名を多吾り散すよ」弁「其者ハ貴方の親類でハもありますう」毛「ナニ親類でハないが種々私に對ッて惡い事をして、私を困らせる積であつたが終に私の力よ叶はず自分が敗けて米國へ行たのサ」弁「兎に角も貴方ハ丁切眞二に逢て見るが好でせう、事よ由ると其者うも知れませんせ、澤部氏に頼めバ直に面會の出來る樣よ計ッて呉れませう」毛「イヤ〳〵婿ゐ頼むハ大嫌ひだ、此方うら何う頼めバ後で又彼方うら頼まれる、若し其頼みが金の無心でハもあれバ損が行く、私ハ愈々死刑と云ふ日を待て所刑場へ行て見る、爾すれバ誰よも頼まずに罪人の顔が見られるうら」弁「併し夫でハ事が遲過ませう愈々死刑の當日となッて貴方の知人と分ッても何の益に立ません」毛「ナニ私ハ役よ立る積でハないのじや、假令其者と分ッても助けて遣る氣がある斯ハ鬼々しき人の子よ何うして近子の如き多恨なる女の生れしやと怪むめり、此時折惡く滑稽音樂の合奏始る旨を報じたれバ隱居ハ栗田嬢と共に其方に氣を取られ「サア〳〵話ハ別にて合奏を聞くとしやう春木君サア此方へ廻ッて庭の方を見たまへ早や合奏の美人が出て來た」春木も輕路も止を得ず身を置き直して庭の面なる合奏場を眺むるに幾人の美人異樣の扮裝にて席よ立ち調子を揃へて謠ひ初めぬ、場の周圍にハ夫々設の棧敷あり數多の聞人犇々と詰掛たる有樣、一小劇場とも云ふべき程なり、謠ひ出す其歌と云ひ囃と云ひ殆ど腹を抱ゆるばうりにて一

節の終る迄に聞手の人々喝采をる暇もなく推合て笑ひ動揺めき顔を上げ得ぬ人さへあり、毛「村隠居も切と興に入し様子なりしが良ありて何う物よ驚きたる如く「オヤ、是ハ怪うらん、是ハ何うも、實に是ハ、先ア春木君見て呉れ給へ」と憤喝て春木の手を引き一方なる聞人の群に指さよぞ「何ですう」と怪みて其の方を眺むるよ、個ハ抑も如何に撿察官たる澤部忠氏が其中よ交りて殊に浮れ女と思しき一美人の傍よ在り、澤部氏が眞逆に仇し女の手を引きて來しよハあるまじけれど其女笑て俯向く時ハ殆ど澤部氏の膝に倚るうと疑はる毛「撿察官とも言はれる者がオヘラ、ハウスなら兎も角も此様な滑稽音樂なぞ聞に來る、殊に我が女房を連れず素性も知れぬ女と共よ」春木ハ之を宥めんとて「ナニ貴方、女を連て來た譯でハありますまい、アレハ唯偶然女の隣に坐ッた丈でせう毛「夫にしても身分を重せぬと言ふ者だ、アノ様な者にハ愈々娘を遣て置れぬ、私ハ彼所へ行て充分に叱ッて來る」春木の留むるをも聞ず、突立て早や下の方よ降り行きたり、此振舞を見て我儘極まる老人と春木も輕路ハ驚きたれど其留守よ話せんと輕路ハ栗田嬢に打向ひ「お前ハ何も私に氣兼よハ及ばぬが其代り問ふ事がある今もアノ隠居が數年前米國へ行て跡形の知なくなつたと話しをした其人の事を今までお前ハ隠居うら聞た事ハないか嬢「爾ですヂ來る度よ色々な話を仕ますうら聞たうも知ませんが氣に留ぬうら覺えてハ居ませんよ、ですが爾々、其様な事を言ました、身代のない若者が四年前とうに娘の許へ出入して終にハ娘を呉れと言出したけれど遣る事が出來ぬと斷ッたら失望して外國へ行て仕舞たとう、若し其事で

ハありますまいう毛「夫だく、夫で其若者の名ハ何と言た嬢「夫まで覺えません毛「忘れたなら頼だうら最一度聞て呉れまいう嬢「夫ハ隨分六ケしい事ですよ、何時でも自分の思ふ事ばうり多く舌ッて私しの話ハ碌々に聞ませんもの、矢張金の無心が恐いと思ひますう、本統に變な人ですよ毛「でもわらうが夫が大事の事だうら是非聞出して貰はねバ嬢「宜うう座います、何時うアノ人の氣の向た時を見て夫とあく聞いて見ませう夫で分ッたら直に貴方へ知せますうら」と言ふ所へ隠居ハ吃きながら歸り來り、散々に叱ッて遣た、人込の中で頭ごなしよ遣附て好い心地だ、彼奴も中々剛情で色々の事を言ふけれど、最と女房を大事にして外へ出る時ハ必ず連て出る程にせねバ離縁しろと言ッて到頭追返して遣た、猶ハ私ハ明日にも彼れの宅へ行き愈々離縁の事を言出す積だ」と憚る色もあく口外するハ老人とハ言へ一種風異りの人と言ふべし

第十六回

佛國巴里府ハ實に世界の大都にして其中心の繁華の地ハ極樂園とも稱すべく金を散す事水の如く人々燭を秉て夜遊ぶ、贅澤と云ふ贅澤ハ殆ど揃はざるとなけれど、中心より離れたる町々に至りてハ全く別世界の觀をなし、流行の風も吹來らず贅澤の有様も入來らず人々正直に稼ぎて正直に日を送る所あり、流行社會の人に向ひ斯る正直町の有様を聞くも誰一人知る者なし、巴里の府内とハ云ふ者の、流行社會の人に取りてハ亞非利加内地よりも猶ハ遠し、去れバ偶々絹の服を着けたる婦人、此邊に來る時ハ人々振向て見る程なり、弦も正直町の一にてベルト街と

云へる閑靜の巷に、今しも一人の侍婢を連れ、用ありげに歩み來る一人の貴婦人あり、誰ぞ、澤部夫人近子にして附添るゝお古なり「近」チエ、古や、井村嬢の工場ゝ最う此邊だらうと思ふが「古」此少し先の方でせう、馬車に召して入ッしやれゞ最う疾くよ着て居ますのよ「近」でもお前、今朝家を出る時、旦那ゞ窓うら見て居たもの、若し馬車の番號でも見覺えられ、後で其取者にでも問はれると私しゞ莊へ來た事ゞ分るうら「古」成るほど今日ゝ旦那ゞ毎になく大層ゝ不機嫌の樣よ見えましたチ「近」爾サ、夜前一人で晩餐よ行き、何所うの料理屋で阿父さんに逢ひ大層叱られたとよ、私しゝ能くゝ聞あんだけれゞ夫で機嫌ゞ惡いのだワチ「古」爾仰有れゞ此頃大旦那ゞ、何だう旦那をお憎みなさる樣ですチエ先日もお使ひに上ッた時、大層旦那の事を惡く仰有ッてお出でした、先ア何う云ふ譯でせう「近」何う云ふ譯だう私しゝ知たいと思はぬうら心にも留て見ぬゞ」と云ふうち既に一町ばうり歩みしゞ近子ゝ心配よ堪へぬ如く「私しゝ村井嬢ゞ今でも定めし私しを憎で居るだらうと思ふと何だう氣ゞ進まぬよ芳男さんゞ米國へ行くズッと前に逢た切り、其後音信もせぬ程だうナニ貴女、彼の樣な心の好い嬢樣ですもの、今まで貴女を恨でも居ますまひ夫に貴女、兄の芳男さんゞ死刑の裁判まで受た事を知せて上ずよゝ居られません、知せて上れゞ嬢樣ゝ貴女と違ひ自分の兄の身の上ですうら誰憚うらず骨を折る事ゞ出來ますもの「近」爾思ふうら故々尋ねて來たゞ私しも何うも言にくひよ八し振で逢て貴女の兄上ゞ是々ですとゝ「古」私しゞ一緒ですうらナニ共樣な心配にゝ及びません、夫よ村井嬢も芳男さんゞ居なくなつてう

定書
国峰画

らい頼りよ思ふ人もなし、此様な所へ引込で貧民の子よ職業を授けるあぢ唯最う慈善一方の事をなさッて居る程ですから心も餘程柔いだと思ひます「爾うも知れぬが、少しでも曲ッた事の嫌ひな氣質だから、私しを何う思ッて居るうと思へば氣よなつておらないワ」と且語り且歩み つ終に其町の中程まで來りしも、是うと思ふ工場も見當らず「ハテナ、此邊で尋ねて見ませう村井嬢と云へば近邊の者が神様の様よ思ッて居ると云ふ事ですから」とお古い但有る店先に立ち格子の内よて編物せる女に向ひ「此邊に村井嬢の工場があると聞ますが、何所でせう」女い編物を置きて立來り「貴女い何う注文の爲よ入しッたのですう」と問返す「左様です女「でい嬢様が定めしお喜びでせう嬢様い諸方うら注文を受けて直に其仕事を貧民の娘達に言附け、貧民の歡ぶのを自分の歡びの様にして入ッしやるうら、アノ様な嬢様が二三人もあれば此邊に貧民いなくなります、ドレ教へて上ませう、此角を右に曲り、突當りより二軒目の大きお家です」と丁寧よ教へ呉れたれば「お古い近子と共に其通りよ尋ね行くよ、突當より三軒目い古き私立學校とも云ふべき撫にて味も趣きもなき家なれば、浮世の汚れに染ずして慈善一方に世を送る清き乙女の仕事場うと思へば何となく奥ゆかしき心地せらる、頓て其入口に進み行き案内の鈴を推鳴すに内より應と返事して出來る者あり、是れ人殺の罪人丁切眞二の妹なるう

第十七回

案内に應じて出來りしい年頃十二三の女あり村井嬢よ使はるゝ者ならん、近子の立派なる姿を

見て少し怪む様子なりしが頓て「貴女がたい注文ですう」と問ふ、近「左様、注文だが村井嬢に逢れるだらうう女「ハイ暫く應接所でお待を願ひまも」と二人を應接の間よ入置きて退さしが、引違へて入來るい是なん丁切眞二の妹村井嬢勝子なり年い廿一二なるべきう、身よい絲の外被を纏ひ黄金の艶ある長き髪を髻短かく捲上しい最甲斐々々しく見ゆ、此時近子い窓の下なる最明るき所に立居たれバ村井勝子い一目見て打驚き「オヤ近子さん貴女い」と云ひ掛て、汚はしやと云ふ様子よて一歩退き「貴女い何よしに來たのです」と聲の底に最深き恨を帶て責問へり、近子い我心に弱味あれバ答へんとすれど答へ得ず空しく唇頭を動かすのみお古い夫と見て進み出「嬢様昔の事い仰有るな、今日い貴女の兄上芳男様の事で參りました」勝子いお古が方にい向も遣も「兄い貴女に欺されて米國まで逃て行ら今よ行方が分りません、貴女い何のに用でも何の顔で私しに逢にきました古アレ嬢様爾仰有ッてい了ません、お腹立い尤ですが近子様が他へ縁附たい芳男様を欺したと云ふ譯でいなく父上の嚴い言葉に詮方なく芳男さんに分れたのです、貴女に言譯がないと思へバこそアノ通り無言て震へて居ッしやるでいありませんう」近子い實に無言にて震へ居るなり、否泣入れるなり勝「今となつてい其様な事い聞度くもありません、芳男い貴女の父上に散々の目に逢た上、貴女よ迄、棄られました、私しが此通り艱難するも貴女と貴女の父上の爲です、貴女の父い慾に目のない商人の事ですら私しい責ません、思ひ出すさへ汚はしいら自分で忘れ度と思ふて居ます、貴女い私しとい學校朋輩でもあり其上姉妹の様にした中でありながら、一旦兄芳男と夫婦の約束までした上で他人の妻よなるとい何事です、假令父が何と云はふが死でも我が愛せぬ人の妻よならぬい女の操でいありませんう貴女い操を知ませんう、行方の知れぬ芳男の事を貴女うら聞たくいありませんサア御返りなさい、お歸りなさい、此面會い是切でも」と言切て退ぞうんとす古の烈女も斯や、お古い周章て引留つ「イエ共芳男さんが行方が知なくいありません、此しました」勝子い少し怪む体にて「手紙を寄越すなら現在妹の私しへ寄越し相な者ですのに古でも近子様にい全く寄越しました」勝「夫い何日の事です」近子い初て口を開き「去二月廿八日です」勝「夫うら兄い何うしました」近「何うしたう其後い音沙汰もありませんでしたが、昨日—」と言掛て口籠れり、嬢い早くも兄の身に何事うありしと察し「昨日何うしたのです、昨日兄が貴女の許へでも尋ねて來たのでもう」近「イエ、昨日芳男さんい裁判を受ました」裁判とい何事ぞ、初て聞く勝子が耳にい細き近子が聲なれど百雷の一時よ落來りし如く聞ゆ「裁判とい何の裁判を」近子い答へざると能はず、言憎けれど一時よ筧を明すに如うず「人を殺して大金を盜んだ罪で」勝「エ、エ、エ、兄芳男が」と二歩ばうり跳返り「夫い何うの間違です、芳男が人を殺して、其様な事を私しが信ずると思ひますう」近「でも私しい其裁判を見て來ました」勝「何の宣告を」近「死刑の宣告を」勝子若し心弱き女なされたのでせう」近「イエ宣告を受けました」勝「何の宣告を」近「死刑の宣告を」勝子若し心弱き女なりせバ此一言よ必ず氣絶する所あれど、勝子い艱難よ心まで固れり、一時い顏色の全く變るま

で駄きしも漸くに落着きて「貴女ゝ兄の爲よ言開いて下さッたら」近「私しよ言開きが出來ませう所天澤部も裁判の席に居ましたもの」勝「本に貴女ゝ心無しです芳男が辱められる所を所天と共に見に行たのですう」近「イエ所天ゝ檢察官の役目を以て其席に居たのです」勝「夫でゝ貴女ゝ、何うし裁判所へ行たのです」近「若しや罪人が芳男さんでゝあるまいうと思ひまして」勝「何故芳男だと思ひます、日頃うら芳男を盜坊でも仕相な男と思ッて居ますう」近「世間の噂や所天の話を聞き洛やと思ふ氣にありました、芳男さんゝ本名を隱し丁切眞二と云ふ綽名を名乘て居ましたらう」勝「ゝ再び驚きて「エ、何と仰有る先頃うら新聞紙よ書てあるアノ不思儀な罪人が私しの兄、村井芳男ですう、兄ならバ何を憚ッて本名を隱そのでせう、己ゝ先年普佛の戰爭に國の爲名譽ある打死をした村井少將の長男だと何故有体に名乘ますまい、父村井少將ゝ軍人の龜鑑だとて此程も有志者が義捐して其打死の地グラベローへ紀念碑を建たでゝありませんう其息子と名乘たなら誰が盜坊人殺しの汚はしい罪人と思ひませう」と我が情の激動するに連れ鋭く罵しり來りしが、フと思附く事ありてう忽ち顏の色を失ひ「我名を隱して裁判を受たのゝアゝ分りました、自分で其罪を犯した爲です」此時の勝子の樣子ゝ見るさへも痛ましゝ、唯一人頼と思ふ兄芳男が聞さへも忌はしき盜坊人殺の罪を犯せしうと顏の筋々悉く絶望の色を現せり、近子ゝ見るに見兼て「勝子さん爾失望なさるにゝ及びません、芳男さんゝ罪人でありません人違で無實の罪を受たのです、私しゝ裁判所で罪狀も聞ましたが、成るほど芳男さんが怪まれる樣よなつて

ゝ居ても證據ゝ一つもありません、芳男さんが本名を隱したのゝ一貴女の爲、私しの爲です、貴女まで世の人の口の端に掛るが幸いと思ひ」勝「ナニ其樣な容赦よ及びませう、眞實罪のない者なら私しゝ屋根の上うら兄の本名を叫びます、くありません、牢屋を尋ねて丁切眞二に面會も致ませう、首切臺の上までも兄と一緒に登ります」近「イヤ勝子さん爾思ふゝ最もですが今となりてゝ落着て芳男さんを救ふのが何よりも大事です、私しゝ確よ芳男さんに罪がないと思ひますうら、何うして救ひ度いと夫で今日貴女を尋ねて來たのです」一徹の勝子あれど斯く聞きて漸く心解け「爾まで貴女が兄の事を思て下されバ、貴女が兄を欺たでゝなく、全く父の言葉に仕方なく他へ緣附た事が分りました貴女の罪ゝ是切で忘れます、今まで敵の端の樣よ憎い女と思ひましたが斯して再び逢たうらゝ又も昔に立返り本統の姉妹の積で兄芳男の爲に骨を折ませう」と初て近子の手を握りしめたり

第十八回

勝子ゝ近子が手を握りし儘暫しゝ涙に呉れ居たるが漸よして顏を揚げ「近子さん、兄ゝ本統に無實でせうう」近子も泣面を推隱し「無實でなくて何としませう」勝「世界の人が皆盜坊になつても芳男に限り其樣な汚はしい事を仕まいと思ひますが、でも何うして疑ひを受たのでせう」近「矢張運が惡いと云ふ者でせう」勝「本統に運が惡いのです—兄も—私しも」とて今まで人に洩せし事なき我身の不幸を訴へんとす、健氣なれども流石ゝ女、堪へ兼ての愚痴とや云はん、頓て心を取

直し「今となつてい嘆くも愚痴です、云ひますまい、云ひますまい、此上い唯芳男を救ふが肝腎です、夫に就ても芳男うら貴女に寄越た手紙と云ふい何の様な事を書てありました」近子い衣嚢の最も深き所より一通を取出し「是です」と披き示す、勝子い手ゐ取りて讀下せ

近子よ、過し事い夢となりぬ、余い復渉身を恨まじ、渉身の心一にて余が今までの幾艱難、余い悉く忘れ盡さん、渉身緣附て以來、心に樂きや何如よ、樂く生涯を送り得る見込あらば、渉身眞實に所天に仕へ再び余が事を思ふ勿れ、余も渉身が事を思はじ、去れど渉身若し余と愛の言葉を結びたる其昔を戀しと思はゞ余い今も猶は喜で渉身を妻とせん、余が此國を立去りし頃い猶は離婚の法律あうらしうど今い其法律あり、渉身若し到底今の所天と生涯を共にし得ずとならば離婚の手續を盡して余が許よ來れ、頑固なる渉身の父も今い余を拒まぬならん、余い昔と違ひ富有の身となりたれバなり

近子よ余い今夜シユリーの橋にて渉身の口づうらの返事を待つ者なり

勝子い讀終りて眉を顰め「此手紙の終りよ富有の身となつたと書てあるい何の事でせう昨年の秋桑港うら私しへ寄越た手紙にい相變らず貧困で急に身の立ち相な見込もないと書てありましたが」とて獨り暫しがほど考へしが更に又其顏に恐れの色を浮め來り「エ、近子さん此手紙い犯罪のあつた日に書たのですよ」近「爾の様です」勝「最了ません、罪人い兄ですよ、富有の身になりたとい、米國人長兵衛とうの大金を當みして居たのでいありますまいう、此手紙を書た時、況に狂ひを附て居たとしう思はれません、近子い斯と聞きて身震ひせり、幾度う此手紙を讀たれど其所までい氣附ざりしよ今勝子の言葉を聞けバ唯一句の短き文字、恐しき意味あるに似たり、近子い答ふる言葉もなく勝子の顏を見詰るのみ「勝」近子さん何うすれバ好のでせう、兄が本名を明さぬのも夫が爲でいありますまいう、若し爾なれバ最う丁切眞二と云ふ僞名の儘で死るのが好う渉座います、父の紀念碑を建て吳れた世間の人々に濟ません、私しい何うして默ッて死ねと云ふて遣度いと思まも」流石い村井少將の息女なり、父の名を汚さじとて兄を無言に死しめんとす、心の中い如何にあるべき、此父にして此女、此妹にして彼兄あり、近子い暫しにして思返し「ナニ勝子さん其様な事いありませんよ、芳男さんの無罪を信ずるの私しばうりでいなく既に辯護人春木博士も確に信じて居る相です、夫に未一人芳男さんを知ぬけれど裁判の様子に感じ何ううして助け度と云ッて居る紳士がありまず、他人さへ此通です のよ、貴女が爾仰有ッてい仕方がありません、是うら上告もし哀訴もし其中に實の罪人を探しませう「勝」探したとて、何時捕はるう夫も分らず、哀訴して死刑だけ弛められても終身牢屋よ置れませう夫よりい一思ひに殺されるが何れほど好りも知れません「近」ナニ貴女實の罪人が分りさへすれバ終身懲役なぞと云ふ其な筈いありません必ず直ぉ放免されます、私しい今日直よ辯護人の許へ行き篤と相談する積です」他人まで斯く云ふなるよ現在の妹として兄を疑ひ濟むべきや勝子い心を取直し「貴女の言葉に私しも力を得ました、及ぶ丈い兄芳男を助けませうが、其辯護

人の外よ最一人の紳士とゐ誰ですう　近「侯爵輕路祐秀と云ふのです、詳しくゐ知ませんが充分信切な紳士にゐ違ひありません、祐秀の名を聞きて勝子ゐ良久しく考へしが心に浮び來らぬと見え「充分頼になる紳士でせうう　近「夫ゐ最う大丈夫と思ひます　勝「此様な事柄ですうら、實の罪人が愈々外に在ると分らぬうちゐ、成るべく兄の名を人に知せ度くありません、成う事なら私しも其方よお目よ掛り篤と見届た上で、頼むう頼まぬうを定め度と思ひまを　近「夫ゐ爾ですとも、貴女が此人に迄ゐ切し度ないと思へゞ私しと貴女と春木の三人で骨を折る丈の事ですけれどもナニ輕路と云ふのゐ充分頼になるだらうと私しゐ思ひます」二人が語ふ折しも軌れよりう輾り來る馬車の音、此門前よて停りしうゞ勝子ゐ早くも立上り「アゝ今日ゐ此慈善工場を賛成する貴婦人の一人、有田男爵夫人が篤志の義捐者を連て來ると昨夜端書を寄越ましたが此馬車ゐ多分男爵夫人でせう、悪い所へ」と云ふうちに早や突々と此室に入來る、年四十ばうりの貴婦人ゐ勝子に向ひ「サア村井さん約束の義捐者を連て來ました」と誇り顔よ說出す、近子ゐ傍より此夫人の顔を見るに個ゐ抑如何に裁判所にて我が隣に座し居たる彼の年嵩の貴夫人なり

第十九回

近子ゐ所天のある身なれゞ我身の上を隱さんと思へるに、今圖らずも裁判所にて同席せし婦人に逢しゐ當惑の限なり彼の婦人若し我顔を覺え居て言葉を掛れゞ何とせん隙もあらゞ逃出したし、男爵夫人ゐ斯とも氣附ず「村井さん、私しゐ其義捐者と同じ馬車に乘て來ました、金額ゐ纔

五百法ですが當人ゐ私しの甥ですうら何うう發起人の名簿へお加へを願ひます」と云ひて戸の外を差招けゞ、招きに應じて入來る一人の若き紳士、近子ゐ此顔を見て又も驚けり夫「是が義捐の當人です侯爵輕路祐秀とヤします」　勝子も此名前よゐ驚きたり今しも近子の話にて輕路が我兄を助んと約束せし由を聞たるが扨ゐ此紳士なりしう、見ず知ずの芳男を助んと云ふのみならず慈善工場にも寄附するとゐ心榮の柔しき人なるべしと其顔を見上るに年ゐ我兄と同じうら ん、眉秀眼清く頼母しげなる男子なり、祐秀も勝子の顔を見るに綠の眼太く開きて長き臉毛之を蔽ひ、美くしき容貌の中にも凛として胃し難き所あり、今まで交際社會にて見受たる幾多の美人に比ぶれゞ殆ど天界の乙女うと疑はる、彼れが金剛石を懸け錦繍を飾りたる服ゐ之の綾もなく飾もなき質素ある衣に比べてゐ俄よ俗臭さ想ひあり、楚々たる勝子の姿、灑洒たる勝子の容、一目見るだに仙氣の肌に透るを覺ゆ、暫しゐ物言ふをだに打忘るゝ程なりしが漸くにして「貴女が此工場を監督なさるのですう」と問ふ勝「ハイ誠に行届ません」と答ふ、此問答の間にも近子ゐ心安うらず、若や勝子が此二人に向ひ我が名前を告げゐせぬう、此紳士我顔を認ゐせぬうと苑も針の莚に坐す想にて、侍婢お古の背後よ其身を隱さんとするに、男爵夫人ゐ早くも近子の顔を見て「オヤ〳〵貴女ゐ一昨日裁判所で私しと並で居た方でゐありませんう」と問掛る近子ゐ止を得ず「ハイ」と答へぬ、夫人ゐ近子が當惑を窺せぞ」貴女も大厝アノ罪人を可哀相とお思ひなさッた樣でしたが」と云ひ掛けて更に祐秀の方を眺め「何だヲお前ゐ、昨日裁判所で此方を

抱起して上た癖に、今日ハ空々しい、知ぬ顔をしてサ、お辭宜でもしたら好らう」祐秀ハ何故に近子ガ玆に在るやと怪みながらも當惑の樣子を察しなれバ昨日約束したる如く故と知ぬ顔をなし居たるも今ハ知らぬ顔にも過し難く纔に首を垂れて默禮せり、獨り勝子ハ夫と見て近子を救はんと「奥さん宜しう御座いまセ汚穢文の錦繡ハ來る月曜日迄に調へて置きますから」　近子ハ眼を以て勝子の機轉を謝しあがら「でハ月曜日に又上りますから今日ハ是でお暇よ致しませうとて男爵夫人と祐秀に默禮し、お古と共に逃るガ如く此所を立去りたり、男爵夫人ハ怪しげよ「今の婦人ハ何方です」勝「アレハ此工場のお得意ですよ」「爾ですう、感心よ信切な方と見えて昨日も檢察官ガ罪人を責る時なぞハ俯向て泣て居ました」勝子ハ斯る話を聞くガ辛けれバ手早く傍らなる卓子より寄附金帳を取出し「此工場も次第に進歩致します」とて夫人の前よ開き示せり今まで我兄の爲に泣居たる顔を繕ひ何げなく斯る掛引をなすハ其心の確なると思遣る、夫人ハ込入たる勘定話なぞ餘り好まぬ質あれバ帳面よ辟易してう「でハ何うぞ輕路祐秀の名を發起名簿へお書入を願ひます、近日又私しガ引連て來ますうら」と云ひ捨て匆々に玆を立出、祐秀と共々に門前よ待せある馬車よ乘りたり、祐秀ハ馬車に乘りてよりも猶ほ勝子ガ委眼の前に懸るガ如く暫し恍惚として大空を眺るのみなりしガ夫人ハ話好きの持前よて少しも無言に堪ゆる能はず「何うだ、昨日裁判所で氣絶した婦人ガ今朝慈善工場へ來て居やうとハ思掛もなうッたいらう私しハ昨日の裁判で丁切眞二ガ殺されるうと思ひ

へバ此世ガ墓なくなつたうら此樣な時にハ慈善の事でもすれバ氣ガ晴やううと夫で今朝お前の寐込を叩き、引起して連て來たガ、計らずもアノ婦人に逢て見れバ五百法も惜くハあるまい、お前昨日アノ婦人の後を尾けて行たじやないう「祐」ナニ後あとを尾ますものう「夫」お隱しでないよ、後を尾けて道で何う話をしたうら夫で今日ハ故と外々しくして居たのだ、私しハ爾と思ッたらアノ婦人の身の上を知うと思ひ村井孃に聞たけれど孃ハ何故う話を外へ紛らせて仕舞たよ「祐」外へ紛せたでハなく詳しく知ないうらでせう、夫ハ爾とアノ村井孃とハ何うした女です「夫」オヤお前ハ早や村井孃を見染たのう「先」ナニ其樣な情談でハありません何うした女です「夫」彼れハ先年グラベローで打死した村井少將の娘だワ「先」頃紀念碑を建る時よ私しも無名で少しばうり奇附したガ一「祐」ハア村井少將の娘ですう、夫れガ年頃よなつて亭主も持ずアノ樣な事を仕て居るハ婚姻する丈の財產ガない爲めでせう「夫」何うだう知ぬガ噂でハ少將ガ生て居る時分、其身代を或る鐵器商に任せて置た所、其商人ガ惡い奴で、商賣で損をしたと云ッて其身代を返さず、夫に孃の兄ガ放蕩で少しばうり殘ッて居る物を遣ひ盡したと云ふ事だ「祐」ヘエ、夫ハ奇妙、村井孃よ兄ガありますう「夫」私しハ知ぬけれど其上句よ外國へ逃たとう聞たガ最う多分死でもしたでせう「祐」夫で孃ガ獨りで彼アして居るのですネ「夫」爾サ、少將ガ死た後で孃ハ父の戀意にした貴夫人達へ手紙を送り其贊成を得て今の慈善工場を建たのだ、實よ感心でハないうアノ近傍でハ孃を神樣の樣よ思ッて居る」と二

人ダ語ふうちに馬車ハ早や春木辯護人ガ住居なるベロルト街の邊まで達したれバ祐秀ハ然るべく口實を設けて唯一人馬車を下り男爵夫人に分れを告げて春木が家の方を差し行きたり

第二十回

侯爵輕路祐秀ハ家富み、家計豊よして何の用事もなく日々を遊び暮す身分なれバ、昨日ハ辯護人春木に向ひ罪人の詮索に身を委ねんと約束したれど、今日村井勝子の姿を見てよりハ其約束を後悔せり、罪人を捜す程ならバ其暇を以て日々勝子が許に行き、然るべき口實を設て及ぶだけの信實を盡し我れと勝子の間を親くするに如ず、罪人を探すハ他人の事、勝子と交りを深くせるハ我身の爲ぬり、身の爲よハ他人の事を捨ねバならずと早くも思ひ定めたれバ是より春木に面會して昨日の約束を取消さんと思へるなり、頓て春木の家に到れバ取次の者出來り「主人ハ唯今外ら歸り、貴方のお出を待て居ます」と云ふ、祐秀ハ直よ春木の居間に通るよ春木ハ手を擴げて出迎へ「サア先づ腰を卸し給へ」祐秀ハ邊の椅子を引寄せて腰掛けながら「君ハ最う彼れに逢てゐエ」彼れとハ丁切眞二の事なり「今朝牢家へ尋ねて行き、今茲へ歸ッて來た所サ、樣樣に說きつゝ口說つしてヤッと上告する事を承知させたが彼れ中々決心の固い男で一時ハ迚も無益だと思ッたが、實ハ非常手段を施して漸くよ承知させた」「非常手段とハ何の樣な手段を」「始め終りを一通話すから聞きたまへ」とて春木ハ是より丁切眞二よ面會したる顚末を語り出せり「斯サ、僕ハ先づ裁判長の許に行き罪人に面會を請ふた所、裁判長ハ飽までも彼を有罪と信じてハ居るけれど面會を許して呉れた、夫で僕ハ彼の獄舍へ入込だが、彼れも僕の顏を見て幾等か嬉しいと思ッたと見え、立て來て丁寧に僕の信切を謝し、備附の椅子を取て僕に先づ腰を掛けさせた、其掛引を見るよ、進退總て紳士の作法に叶ッて居る「でハ彼れ愈愈紳士社會に生れた者であらうう「奈「夫ハ最う問ふ迄もないサ、紳士の家よ生れ紳士の交際を學だ男だ、尤も零落でもして下等社會にも交ッたと見え隨分下等社會の事柄にも慣れて居る樣よハ見えるが、生れ附ての紳士風ハ何うしても失ないよ」「でハ君、充分彼れの履歷も問ふたいらう」「勿論サ及ぶ丈の秘術を盡して問廻したが彼れの方が僕より上手だら中々六ヶしかッた、二言三言云ふうちに早や僕の目的を察し、貴方今日若し私しよ上告をさせる積でお出なさッたのならバ誠に殘念ながらお斷りサさねバなりませんと明うに遮絕した、僕ダ色々利害を說くと彼れが云ふよハ上告する丈我苦しみを增すのみです私しハ見晴しの好い所に住慣て此樣な狹い一室の中へ置れるハ實に辛いのでも、上告して此上一月も弦に居るなら殺された方が遙よ安樂でもと云ふのサ、イヤ夫ハ了ません眞實我身が罪を犯した覺えがあれバ早く死たいと思ふのも無理ハありませんが自分でハ罪を犯さぬのに甘じて殺されると云ふ筈ハありませんと斯う僕ダ言返せど彼れ驚りして、ヘヽエ貴方ハ私しを無實の裁判よ服した者と思ひますりと問ふた、思ひますとも長兵衛を殺したのハ決して貴方でハありません貴方ハ全く無實です無罪です、爾思へバこそ私しハ今まで貴方の辯護を引受け此上にも貴方の命を、助けやうと勉るのです、眞實罪

を犯した人と思へゞ何で此様に骨を折ませうと云返せと爾ですゝ私しい又辯護人なぞ云ふ者ゝ職掌柄で止を得ず辯護するので深く心底ゝら被告の無罪を信じて其上で辯護する者でゝなゝらうと思ッて居ましたが貴方にゝ實に感心しましたと云ッた、エ輕路君、何うだ中々物事の分ッた男じやあいゝ、僕ゝ之を聞てア、此様お心の爽かな男を友達よ持たいと思ッたよ、貼成るほど感心お事を云ふヲ、夫ゝら何うして終よ承知させた、其所が非常手段サ、イヤ貴方上告をお嫌ひなさるが夫ゝ人の信切を無にすると云ふ者です、貴方が上告をせねゞ心配の餘り非常な事を仕出來ませんゝと婦人がありますゝ貴方ゝ自分が殺され、ゞ其婦人が名譽を亡し身を滅す様な事よなつても辭ひませんゝと云ふと、婦人の一語ゝ餘程彼れの心に應へたと見え、彼れゝ様子ゝら言葉の調子までも替へて、貴方ゝ其女を知て居ますゝと問ふたゝら僕ゝ、ハイ知て居ますゝけれども是ゝ秘密だゝら知らぬと答へねゞなりませんと云ッた、でゝ貴方其秘密を充分に守ッて下さるでせうヲと念を推すゝらハイ勿論です併し貴方が上告を承知せぬ日にゝ其婦人ゝ貴方を助け度いばゝりで自分の名譽を捨て身分を捨て何の様な事をするも知ません今貴方が上告する日に其女も安心するし殊にゝ茲よ一月ばゝりの猶豫が出來るゝら其間に誠の罪人を探します、實の罪人が捕はれゞ貴方ゝ無論放免でもと辯を盡して說立たが彼れゝ是でも未容易にゝ承知せず私しも何うおッても上告をせぬと云ふ譯でゝあいが上告すれゞ、到底本名が分る事にもなりませうし本名を知れるのゝ死よりも辛いゝら上告もせず本名も云はずに殺される決心でもと眞心を面に現して答へるゝらイヱ其心配ゝありません實の罪人が捕はれて裁判を受くる日よゝ貴方に對する今までの裁判手續が總て無功となり全く消て仕舞ひますゝら貴方ゝ實名を名乘るに及びません丁切眞二の儘で放免されますと、裁判の理を懇々說て聞せた、貼夫でも直にゝ承知せぬのサ、僕に向ッて其女ゝら直々に依頼を受たゝとゝ様々の事を聞き、僕が一々請合た末、夫でゝ上告だけ承知しやゝ、上告の書類が出來れゞ何時でも調印すると云ッた、實よ決心の確な男だよ、世間でゝ彼れが唯世の人に怪まれ度いばゝりで心にもない強情を張るなぞと云ふけれど彼れ決して其様お僞りの男でない、口で云ふ丈の事ゝ眞實心よ爾思ッて居る彼れと十分間も話をすれゞ彼れの僞りのない事が分る、夫ゝら僕ゝ事の序に貴方ゝ何故其様よ本名を隱します本名を現した所で其女が今までの事柄を他言するゝ氣遣ゝなし心配に及ばぬでゝありませんゝと云た所ゝ彼れ、イヽエ私しの本名が分れゞ未外よも迷惑する者がありますと云ッた貼ゝ未外にも、夫ゝ誰だゝら」春「誰だゝら分らぬが彼れの身寄ゝ何うでもあらう、尤も彼れも知ぜ〳〵口が辷ッたので、言た後でゝ直に我が言過を後悔した様子でもあつただゝら僕も其事ゝ推して問はず、話を更て犯罪よ直接の關係ある事柄を問ふて見た貼「夫で何ゝ利益を得たのゝ」春「詰る所、彼れが法庭で言立た丈の事サ、夫ゝら昨夜倶樂部で逢ッた驚根鷹三を知て居るゝと聞た所ゝ、全く知ぬでゝないが深くゝ知らぬと云ッた夫ゝら二月廿八日の夜、何の用事があつて長泝衛の許へ行たと問ふたゝら長兵衛ゝらアノ夜金子を受取る筈であつたと夫だけ云ッた切ゝだ、

次ぎ長兵衛の許へ行く前雨よ濡て何所に居たと問ふと實ハ巴里へ着くと直に或婦人よ手紙を送り其夜直よ或橋上で逢ふ約束をし雨よ濡て待て居たけれど婦人ハ來ず其中に長兵衛と約束の時間よおつたら立去ッたとの事だ　祐「其婦人と云ふのが必と澤部近子だせ　春「爾だらうとハ思ふけれど夫も何うだか、先づ此樣な事で分れた際にハ彼れと僕ハ殆ど百年の知己の樣に親しくなつた、是うら充分よ實の罪人を探さねバならぬが昨夜の約束通り君直よ詮索を初めて呉れたまへ」祐「秀ハ昨日に引替へ今ハ春木辯護人に引替へて輕路祐秀ハ心既よ丁切モヂと頭を掻くのみ

第二十一回

丁切眞二に面會せし次第を說終りて熱心よ勇み立つ春木辯護人に引替て輕路祐秀ハ心既よ丁切眞二を離れ村井勝子よ注げる故更に氣の進まぬ樣子にて「でハ何だ子君ハ猶實の罪人を探し出す積りだ子　春「勿論ザ次第に事實ガ分ッて來る今となり何うして止れる者カ　祐「別に事實ガ分ッても來ないじやないカ、六ヶしい事ハ依然として六ヶしいせ　春「ナアニ君、丁切眞二に逢てうら僕も益々彼の無罪を見て取たのみならず彼れと近子の間柄も益々分ッて來た、昨夜倶樂部で逢た鷲根鷹三も手掛の一つ又料理屋で毛村隱居と栗田孃の話た事も大に參考の材料だ、夫や是やを考へて見れバ丁切眞二ハ近子ガ未婚禮せぬ前、毛村の家へ出入して近子と愛し愛される中となり婚姻の約束までしたのを隱居ガ頑固な事を云ひ無理よ近子を澤部氏よ嫁らせたうら丁切眞二ハ失望して米國へ行たのだ、此通り次第に分るじやないカ　祐「分ッても夫ハ枝葉と云ふ者、肝腎の丁切眞二ガ何者カと云ふ事ハ更に分らぬ　春「夫も分るよ栗田孃ガ毛村隱居うら聞出して君まで知せると云ふ約束じやないカ、僕ハ又今朝君ガ多分栗田孃に聞て來たのだと思ッて居ク祐ナニ聞く者カ未栗田孃よ逢ぬもの、今朝ハ伯母男爵夫人ガ來て是うら慈善工場へ行んうと云ふうら夫も善らうと思ッて伯母と一緒にヴエルト街まで行たのサ　春「夫ハ又變な所へ、夫で何うした」輕路ハ圖らずも澤部近子に逢し事を思出し「爾々實よ不思儀な事ガある其工場で澤部夫人に逢たよ　春「別に不思儀ハ無い、澤部近子ハ邪慳な父にハ似ず慈悲深い其母に似て慈善心に富で居るうら其樣な所へ行たのだらう　祐「何しろ僕に逢て當惑の体だッたうら僕も其心を察し知ぬ顏をして居たガ其間に匆々に歸て仕舞た　春「でハ君、近子の顏を見て益々熱心を增し相な者だのよ反て氣の進まぬ樣になつたハ不思儀じやないカ昨日の君の熱心ハ一通でなうつたのに　祐「昨日ハ熱心であつたガ夜前大に考へたのサ、考へて見れバ僕自身に探偵をするほどの技倆ハなし、毛村隱居と云ひ近子の所天と云ひ感心せぬ人物ばうりで僕ハ殆々厭になつたうら、少し氣を變たいと思て居ると其所へ丁度今朝伯母ガ遣て來たうら今云ふ通り慈善の工場へ同道したのサ、工場を監督して居る令孃ハ實よ感心だよ　春「君ガ夫ほど褒るうらハ感心より何より美しい女だらう　祐「美くしさも非常だガ何しろ感心だ、一目見たばうりで仙界へ這入る樣な氣持ガするよ、だッて君、交際社會へ推出せバ身分と云ひ綺麗と云ひ一世を壓倒するだけの値打ガあるのに自ら其快樂を

思ひ切り慈善の業よ身を委ねて、今までに一度も醜聞などないと云ふのだもの此様な女が二人とあらうう、僕ゐ罪人だの探偵だのと其様な事を云ふ暇があれば慈善の方に肩を入れ其女を助けて遣る」春木ゐ思はず吹出し「君ゐ又悪様が激しいよ、今朝初めて逢たばかりで、未だ何うだら分る者ぢ、澤部近子だとて其父こそ悪人の様な奴だけれど自分ゐ母にも劣らぬ善心で、唯自分の愛せぬ所天を持たが生涯の過りだけれど是とても賞ゐ父の罪で自分の悪い事ゐない、充分に助て遣ッて好い筈だ、殊に一人の男が罪もないのよ死刑に處せられやうとして居るせ、丁切眞二を有罪と信ずるなら兎も角も君ゐ彼れが罪を犯さぬと云ふ事を確信しながら彼を助ける氣がないとゐ實に鬼心だよ、水に溺れる人があれば見ず知ずの他人でも飛込で救ひ上るが人情と云ふ者じやないう」と春木が充分に祐秀を勵す折うら取次の者紙切を持て入來り「此方が貴方に逢たいと云ッて居ます」春木ゐ紙切の面に記せる名前を見て、心ありげなる笑を浮むるに、祐秀ゐ茲ぞ分れの告所と見て取て「人が來たなら僕ゐ歸らう」と匆々よ立上れり 春「イヤ待たまへ君が居たとて少しも邪魔にゐならぬ人だ」と云ひ更に件の取次に向ひ「其婦人を之へ通せ」と命じたり、婦人とゐ何人よやと輕路が眉を顰むる折しも早や徐々と入來る、祐秀ゐ目を擧げて之を見るに顏ゐ極めて濃き覆面よ隱したれば見る由なけれど姿よて察すれば是亦一個の美人なるべし、美人ゐ春木の外に猶は他人の茲に居るを見て少し驚きたる如く、一歩退らんとなしたるが春木ゐ早くも立迎へて「イヤ、茲に居る輕路祐秀も貴女の爲を思ふ男ですから決心配に及びません」 美人ゐ猶安心せぬ樣子なり、春木ゐ更よ祐秀の方に向き「輕路君、之ゐ澤部近子夫人で、君が茲に居るも構はぬと仰有るから」と一言にて雙方を、去るに去られぬ事としたり、美人ゐ最早や我が顏を隱すも詮なしと思ひしら覆面を掻捨るよ果して澤部近子なり、近子ゐ春木が如何にして我れを澤部夫人と知りたるにやと窃よ怪む体なりしが春木ゐ夫を察して「私しゐ十五年前から貴女の父上毛村隱居の許へ出入致し貴方が猶だ嬢樣の頃から存て居ます、唯今も紙切の端に唯近子とばかりありましたから扱ゐ貴女が罪人の身の上を氣遣ッて彼れが上告したら、せぬかと聞よ居しッたと悟りましたと」事よ慣れたる辯護人の熟練を以て少しでも言出し易き樣其道を開拓くに近子ゐ餘りの事に打驚き、蹌踉く如くに椅子の上に落込みたり 春「ほ安心あさい罪人ゐ終に上告しました、是で先づ彼是一月ばかりの猶豫が出來ましたから、左樣サ一月の間にゐ隨分實の罪人を見出す事も出來やうかと思ひます」 一を聞きて十を察する此明智此明辯に近子ゐ漸く安心し且漸く喜ぶ如く「でゐ實の罪人を見出すお見込がありませうう」春木ゐ近子と祐秀の顏を五分〳〵に眺め分て「ハイ此なる輕路祐秀が共々に充分の力を盡すと云ひますから多分ゐ見出す事が出來樣と思ひます」此短かき一言ゐ殆ど輕路祐秀を鉄縛に縛りたり、祐秀眞に紳士の作法を知ゐ、斯く云はれて「イヤ私しゐ免蒙ります」と情あさ答へのなるべきぞ、祐秀の當惑一方ならず、己が頭を掻ながら「イヤ私しに出來る事なら何なりと致しますが、迚も私しの力にゐ及びません、今お請合ッて後に返ッて失望をおさせ申す種となつてゐ私しの無

調法ですから今のうちに―」　お斷りやしませうと云はぬ前に春木い隙さず取て押へ「イヤ輕路君、謙遜い止賜へ君い元氣もあり物事よ能く氣も附し愈々熟心に遣さへすれが決して出來ぬ事いない、僕も盡すから君も盡したまへ、茲まで來て氣が挫けると云ふ事いない、エ君、エ輕路君詰と一つ言て吳れたまへ」　近子も涙に濡みたる眼を上げ拜むが如く輕路の顏を眺めて「何うぞ貴方、私しが願ひます」　ア、祐秀の當惑い殆ど極度よ達したり、彼れ何と答へんとするや涙に潤む目を擧げての近子の願ひに輕路祐秀い當惑の極度に達せり、賴りあき一婦人が明し難き秘密を打明け我れを見込みて賴むなるに紳士の身として如何で情あく拒まるべき、去れがとて己れい之より村井勝子に力を合さんと思へる身なり此賴みを引受くる心なし、暫が程い默然として考ふるのみなりしが頓て其頭を上げ「貴女が夫ほどのお賴みですら否と云ふ事い出來ませんが何分私しの力の及ばぬ業で殊にい罪人の身の上さへ分らず、彼れが實名を推隱すのも多分我が愛する女の爲を思ふての事とい見ゆれど裁判官い爾い認めず、必ず前よ犯した罪があつて其爲め身分を包むだらうと斯認めて仕舞ひますら何うも仕方がありません、近子い思ひ切たる樣子にて「お賴みやすらよい何も角も打明ませう、彼れが愛する女と云ふのい私しです、私しい彼を愛し又彼れに愛されながら父の言葉に止を得ず他人の妻となりました、今でも彼れと私しの心い變りません、斯申せば非道い女だと思召すらも知ませんが私しい彼を愛したのが我身の過ちとい思ひません、無理よ私しを責附て愛せぬ人の妻にした父が過ちだと思ひますけれども彼れが本名を隱すのい私しの爲ばかりでい無く實い妹の名を汚さぬ爲です、若し私しばかりの爲とならば私しの方で默つてい居ませんが第一に私しが今の所天に向ひ昔の愛を打明けて彼の罪人い是れ〳〵の身分だと申します私しの爲に其名を隱して居るのだらら外よ仔細いないのだと言開きます、實い私しも餘ほど其通り打明やうと思ひましたが自分の一存よも行兼て兎よ角も彼れの妹に相談するが好らうと夫ゆる今朝ベルト街まで行たのです」　近子い熱心の餘り我れを忘れ殆ど云ふべからざる事をまでも言んとす、祐秀い問容めて「でい今朝ベルト街の慈善工場でお目に掛ッたのい其歸道でありましたら」と問掛けられて打驚き「ア、貴方い未だ存がないのですよ爾とい知ず私しい又疾よ貴方が彼存の事と思ひ「イエ私しい未何事も知ませんが、爾するとアノ村井勝子が近「ハイ罪人の妹です、斯なれが何も角も打明ませう」祐「でいアノ丁切眞二と云ふのが近「ハイ勝子の兄の村井芳男で先年グラベロウで打死した村井少將の長男でせ」　と初て彼れが身の上を打聞て傍らに在る春木までも大いに驚き「でい我々巴里大い先頃彼れが父の爲めよ紀念碑を建てたのだ彼れが實名を明さぬも尤もだ」　祐秀い今までの當惑に引更て忽ちに熱心を現し來り「爾まで身の上が分ッて見れが決して助からぬ事いありませんん、チエ春木君近「彌仰有ッて下されい勝子も何れほどか嬉びませう、實い先刻貴方の事も話したら兎に角もお目に掛り篤と相談致し度いと申しました、爾う云ふて居る所へ貴方が入しつた者ですら二人とも泣顏を隱しました祐「でい參せう參ッて勝子さんと充分に打合せ、チエ

春木君」　春木い斯る場合にも猶は氣輕の性質を失はず「爾サ、罪人が勝子の兄と分れべ助けず
よい居られない、明日君い自分一人で勝子よ逢よ行き度いだらふが初ての打合せだうら僕も行
ふ其後い何度でも獨で逢に行く樣よ孃の許を得て來たまへ」　此言葉と云ひ祐秀の樣子と云近
子い既に祐秀の心をも察したれべ「輕路さんが爾まで力を入て下されべ勝子も定めし頼もしく
思ひます私しい今日直に又引返して貴方がたが明日お出になる事を勝子に知せて置きませう」
是にて話しい漸くに定まりたれべ近子い暫がはぜ彼是の打合せをなしたる上よて別を告げて歸
り去れり其後よて春木い輕路よ向ひ「君い何うも餘りお事だよ罪人が勝子の兄と分れべ手の掌
を翻せ樣に勇立てサ、併し先づ君が爾熟心にあつたい何より結構だ隨分大膽な仕事だから未此
後よ何れはぜの困難があるうも知れぬが兎に角も奮發して遣て見やう」祐「勿論サ何れはぜの困難
でも最う厭はぬ」是より猶はも樣々の相談を遂げ輕路い今日の中よ姿を變へ彼の犯罪の本場な
るチケトン街の宿屋よ入込む事よ決着して分れを告げたり

第二十二回

輕路祐秀い丁切眞二が村井勝子の兄なるを知てより愈々彼れを救はん爲めチケトン街の宿屋に
入込み賓の罪人を探らんものと茲よ初て心を決し猶も春木と樣々の相談を凝せし末、分れを告
て立去りしが、扨如何よして彼の宿屋に入込むべき、田舍者よ打扮て宿を借るこそ近道なれト
春木より誨へられたれぜも如何にして田舍者よ打扮つべき、今まで假粧蹈舞よ出る外い一たび
も姿を變し事なき身が探偵の術を使ひ俄よ田舍者となり濟すい最六かしき仕事なり、兎も角も
家に歸り充分工夫を廻さねべ叶はずと其足にて直に我家に歸り來れべ「輕路さん何所へ入しッ
た散々私しを待せてサ」と恨み言つゝ我居室より出迎ふる女あり、是あん昨夜外國館よて分れ
たる栗田孃なれべ「オ、孃か何の用事で來たう知ぬが今日い少し仔細があつて直に又外出する
うら明日でも又來て貰はふ」と愛想あき言葉を聞き孃い痛く驚きて「アレ貴方い何を仰有る私
しが何も用事があつて尋ねて來た譯でいありませんよ、昨夜貴方が春木さんと一緒に私へお頼
み爲ッたじやありませんう夫で私しい來たのですよ」成るほぜ昨夜毛村隱居の話よて數年前よ
米國へ行きたる若者ありと聞き其名を內々聞出し呉れと頼み置きたり去れぜ今い既よ丁切眞二
の本名も分りたる後なれべ强て聞度しとも思はず「ア、爾か、其事なら最う分ッたよ」と冷淡に
遇へべ孃い中々怯ます「人に物を頼んで置て分ッたうら夫で好いと其樣な挨拶がありますう、
夫よしても先アお坐りなさい、外よも話があります」祐「用事があつて落着て居られぬうら
祐「何の話だ」孃「貴方こそ何ですチエ、毎よなくソワ〳〵して」祐「冗談でいな
サ」孃「貴方の用事なら大概い分ッて居ますよ又何所かへ女の顏を見に行くのでせう」祐「用事が
い急ぐうら、話があるから直に聞ふ」孃「貴方の爲になる事ですよ、アノチ、昨夜の隱居が大層貴方
を褒て居ました」祐「なんだ夫だけの事ならば聞度くない」孃「夫だけでいありません、娘を撿察官に遣
たけれぜ今でい後悔でならぬうら、離緣して貴方の樣な婿を取たいッて、繰返し〳〵貴方の事

を聞ました 祐「夫れ最う真平だアノ様な奴の渥などよなつて堪る者か」嬢「私しい子春木さんの言た通り貴方を路田秀次郎と云ふ人で此頃田舎から法律の修業に來て春木さんの書記を勤て居るのだと云ふて置きました、今度來たら何と云ひませう」祐「何とでも云ふが好い、二度とアノ様な奴に逢い度くないから」嬢「ですが貴方れ昨夜とアノ隠居から是非若者の名を聞て呉れとお頼なさツてサ、今れ外からお聞なさツたらも知ませんが私しも大骨折で聞出ましたよ」 折角聞出せしと云ふ者を聞ぬも氣の毒あるのみらず殊よ我知らぬ事柄まで聞出せしやも知れずと祐秀れ思ひ返し「ドレ何の様な事を聞出たら」「ソノ若者れ村井芳男と云ふ者で娘を妻よ呉れと云ふら充分に斷たけれど娘の方でも其者に戀て居る様子であつたら其儘置てれ何の様な事を仕出來すらも知れず一層彼奴めを此國に住む事の出來ぬ様にするが好らうと、先づ其若者の父に勸めありだけの身代を相場に投込せて仕舞た所へ、案よ違はず身代れ滅茶〳〵になり弱り目に祟り目、父れ其年の戰爭に死で仕舞ひ若者も當前の交際が出來ぬくあり後にれ自狂を起して下等社會よ交ツて様々の放蕩を盡して居たが其中よ今の澤部檢察官が娘を呉れと云て來たから早々に遣て仕舞つたとベラ〳〵多舌ツて仕舞ました」 扨れ丁切眞二を今の有様に落せしも近子が父の仕業なりしら、先程も春木辨護人が近子れ父に似ず母に似たりと言たるが、近子が父れ實に此上なき惡人なりと祐秀れ今更の如く打驚けり、栗田嬢れ其顔色を見て「夫御覽なさい貴方れ驚くでれありませんか、私しが是だけ聞だしたのれ感心でせう」祐「感心れ感心だが

今日れ少し急ぐから」祐急ぐ〳〵と何度仰有る、一度聞けば分つて居ますよ、ですが子貴方の用事を當て見ませうか」祐「イヤ當るよれ及ばぬ今日れ是切でお分れにしやう」嬢「明日來れば お宅でもか」祐「イヤ明日ら明後日ら宅にれ居ない當分此身を隠す積だ」と祐秀れ唯だ早く栗田嬢を追拂ひ度き一心よで口から出任の事を云ふよ嬢れ容易に立去んとせず猶は何事をか言出さんず様子なるにぞ、一層の事、我が思曰の一部を打明け田舎者に打扮つべき工夫を問はば世間の廣き女とて存外好き智慧を持つやも知れずと早くも思ひ直したれば言葉の調子を變へ來りて「實れ子、少し仔細が有つて己が是から田舎者に打扮て或宿屋へ泊り込む積りだが、何う云ふ着物を被れば好らふ」嬢れ充分呑込みて「其様な事なら私しよお問なさい、私しの知た古着屋で、注文次第帽子から靴まで貸て呉れる所が有ます、少し損料が高いけれど田舎者にでも大臣にでも今行て今直よ打扮せて呉れますよ」祐「夫れ妙だ早速其所へ案内して貰はふ」嬢「ですが貴方れ何故其様な事をするのです、貴方の事だから眞逆借金取に隠れる爲でもお有なさる舞い」祐「イヤ其譯れ又後で話さう」嬢「後で話す位なら今云ツてお聞せなさい何の様な智慧が出るらも知ません、第一其宿屋と云ふれ何所ですか」祐「夫だけれ聞せても好いチケトン街の商人館さ」嬢「オヤ彼の大戸長兵衛が殺された宿屋ですら、分ツた貴方れ探偵の眞似をする積ですす子」祐「何故、爾思ふ」嬢「何故だツて昨夜の話し振で分ツて居ますワ、春木さんれ丁切眞二を無實だと思ツて居るら實の罪人を探し度と云ふし貴方れ春木さんの友達だら引受て捜して遣うと云ふのでせう」と女の敏捷なる心にて星

を指す如く察したれバ今い包むも其詮なし「賢い察しの通りさ爾でせう、爾なら私しにも手傳せて下さいな貴方ガ田舎の書記ら何かになつてアノ宿へ泊り込めバ私しガ近邊の工場に使はれる女工の樣お風をして貴方の情婦と見せ掛て時々尋ねて行きますワ、男にい人ガ心を置くけれど女にい氣兼なく話ますうら反て私しの方ガ重寶な事もありませう、イエ何に決して人の疑ひを受る樣な事い仕ませんから」と物好なる孃の願ひ、斷るよも及ばずと思ひ祐秀い直よ承知し是より打連立て件の古着屋を指して行けり

第二十三回

輕路祐秀い栗田孃の案内よて或古着屋よ行き僅三十分と經ぬうちに頭の頂邊より足の先に至るまで擬ふ方なき田舎者に打扮つ猶は孃の差圖に由りて鼻の下なる八字の髭を最見すぼらしく掻亂すよ唯是だけにて益々田舎臭さ風化加へ、依て其上よ亦田舎者の持つべき太やうなる革包一個を仮り是に肉襦外被を初め總て流行よ後れたる者を撰びて入れ、是ならバ仮令ひ荷物の底まで檢めらるゝも大丈夫なりと直に其家を立出んとするに栗田孃い怪しみて「オヤ貴方い是ら直にチケトン街の宿屋へ行く積ですか」祐「爾とも」栗「其樣な事をしてい直よ化の皮ガ現れます、先づ是からモント、パルナスの停車場へ行き西部鐵道の汽車ガ着くのを待て居て、頓て汽車ガ着けバゾロ〳〵と田舎者ガ出て來るら其群に雜ツて馬車を雇ふのです宿屋へ着けバ其亭主い直よ馬車の馬丁に向ひ何處ら此お客を乘せて來たと問ひますから其時馬丁ガバルナスの停車場からと答へれバ貴方ガ默ツて居ても亭主いキンバレイ邊から出て來た田舎者だと思ひます」祐秀い此智慧よ感心し「成るほど旨い、爾すれバ化の皮の現れ樣がおい、好し〳〵キンバレイの田舎から出て來たと言て遣ふ栗「夫い好いガ宿帳を出された時名前を何と着けますら、夫も今から直ぬ」祐「爾さな、何と附けやう栗「春木さんガ附て呉れた通り路田秀次郎としていい何うです祐「爾々路田秀次郎が好らう路田秀次郎」と輕路い萬事栗田孃の差圖を呑込み直よ停車場まで行きたるよ宛も午後五時の汽車がキンバレイより着さたる所なれバ降來る幾多の田舎者に交りて再び停車場を出別の馬車を雇ひてチケトン街よ着さたるい凡そ三十分ほど後の事なり、宿屋の店先にて馬車を下れバ昨日裁判所にて見受けたる彼の番頭が出迎ふるにぞ空たる室いあるうと問へバ一ケ月六十法の室唯一つあるのみと答ふ、体裁迄よ儀を値切れど負らぜと云ふに由り然らバ夫よて好しと先づ十五日分の前金三十法を拂ひ番頭よ連られて上り行くに番頭い三階よ上りて此室なりと指示す、見れバ二十一號の札を掛けたり「唯今お荷物を運びますから」と番頭ガ立去らんとする折しも隣ある廿號の室より出來りし一人の男年い四十よ近うるべく汚れたるシャツの上に短胴一枚着けしのみ上被さへ纏はざるい左まで豐ならぬ人と見ゆ、此人四邊も搆はぬ大聲よて「番頭さん到底一人お客ガ來たチ、廿一號い人殺の室だうら誰も這入ぬので己い淋しくてならなんだガ借人ガあつたい有難い」成るほど廿一號い大戸長兵衛の殺されたる室なりきと輕路の路田いゾッと身震したり番頭い男の口を制せんとす

る如く頻よ目配すれど男い更に頓着せず「何を其様に顔と感めるのだ、己が隠したとて未此邊で噂が消えぬ者、遖よい客仁の耳にも入るはな」番頭い聞流して退きたれど路田い男の方よ振向て「此室に人殺があつたと云ひなさるか」男「何だとお前い未夫れを知らぬのゥチケトン街の人殺とて二月頃ゥら世界中の噂だが」番「ヘエ、誰が殺されました」男「米國の商人サ、夫を知ぬとはお前い全体何處ゥら來た、何だとキンパレンの田舎ゥら夫じや知ぬも尤もだ、後で緩々話して聞すが此四邊でい餘り噂が高くなり客がゲツソリ落たゥら此家の主人傳藏い誰ゥよ此家を賣り度いと云ッて居る、先ア其室へ這入て見なさい隅の方なぞにい猶だ乾いた血が附て居るゥも知ぬ」とて無遠慮よも先に立て室よ入り一方の隅に在る寢臺に指さし「ソレ此寢臺い殺された長兵衛と云ふ者が寢た寢臺だ、お前い是ゥら此上へ寢るのだぜ」若し眞實の探偵ならば窃よ此室よ入られしを歡ぶ筈なれど路田秀次郎い益々薄氣味惡し、是も勝子の爲と思ひて漸く我心を勵すのみ男「併しナニ幽靈が出るでいなし、殊にい私が此隣の室に居るゥら、恐しきや代ッて寢て遣ても好い」と云ふい見掛に寄らぬ信切の男なり「でいたのですか」男「隣の室に寢て居たのサ」此口振にて察すれば此男彼の犯罪に着き多少い知たる所あらん「ベエ隣の室に寢て居たなら隨分氣味が惡ゥッたでせう」男「ナニ夢現の樣に聞て居たゥら別よ恐ろしいとも思はなんだ、お前も今一日早く來れば其裁判が見られた者を」路田秀次郎い益々驚きたる風を見せ「エ、其下手人が捕はれて最ゥ裁判を受ましたか」男「爾サ、下手人だゥ何だゥ知ぬが裁判所でい下手人と見なして到頭死刑に處して仕舞た」路田い愕然とし此男弱々何事をゥ知れるに相違なしと見て取りつゝ「シテ見ると貴方い下手人でないと思ふのですヲ」と稍熱心に過たる問も男い別に怪まず「下手人だゥ下手人でないのゥ私よ關係のない事だゥら默ッて居るが裁判も當にいならぬサ」と言來り突然言葉の調子を變て「併しお前い、未だ汽車ゥら降て來たばゥりで飯も食ぬだらう、何うだ是ゥら私と一緒に夕飯を喫に行ゥぬか、隣同士よなつた近づきの爲め酒の一盃位い私よ呑せて置て好らう」と早や此田舎者に奢せんとす、惡氣ありての所爲にいあらで日頃ゟ斯る無遠慮無作法の附合をなせる爲めなるべし抑も此男い何者ぞ

第二十四回

夕飯を奢れと云ふ件の男の注文に路田秀次郎い故と訝かしき体をなし男の顔を眺むるに男い夫と察してゥ「分ッた、お前い己を疑ふのだな、田舎を出る時よ都の人い活馬の目を抜くゥら容易に心を許せなと云はれたのだらふ夫い全く其通りだ此巴里と云ふ所い掏兒や騙兒で滿て居るゥら初て逢て信切な口をきく人よ決して心を許されぬ、けれども私い何よ掏兒でも騙兒でもない安心の爲め名乘て聞かすが是でも倉田竹隱と云ふ畫工だ」一目見し所よてい土方人足の風なれども是でも畫工と云い意外なり「爾ですゥ壁繪でも畫のですゥ」倉「壁繪、爾サ壁繪なぞい極々下手な畫工が描くので、私い其樣な鈍い腕でいなければ此通り恐しげな姿をして居るゥら貴族紳士い雇せて呉れぬ、餘り仕事のない時い止を得ず壁繪も描かぬでいないが、私の元來の得手い肖像

だ、肖像を描せれバ自分でい先づ巴里第一等の畵工の積だ」　巴里第一等の肖像畵工が斯る見もぼらしき暮しをなす筈なく田舎者よ夕飯の無心を云ふ筈なしと路田い恩はすも打笑たり「サ私の名を名乗たからいお前の名も聞て置ふ、何と云ふ」路「私しい路田秀次郎と云ふのです」今ま で何をして居た」路「田舎の戸長役場で會計の手傳をして居ました」「それ是から巴里で奉公先を探さうと云ふのだな、好し〳〵己が必ず世話して遣る昨年の暮に或銀行家の肖像を書て遣たが今でも其銀行家に頼めバ必ずお前を使ッて呉る是から夕飯を濟して其後で私が銀行家の許へ連て行て遣ふ、會計の手傳をしたと云へバ少し位の試驗を受ても差支へいないだらう」　路田い夕飯を奢る位い幾度でも厭はねど帳面附し事も無き身が銀行家よ試驗さるゝと當惑極る次第なれバ二の足踏みで躊躇ふに「お前い何をグズ〳〵するのだ、分ッた己よ奢るのが厭なのだな、好い若い衆が其樣な怪痴な事云ふ者じやない、己だッて肖像畵の一つも引受た時よい双奢り返すだらうじやないか、此樣な錢無よ附合ふて金を借られると思ふだらうが金い借りぬ、唯最う此二三週間酒と云ふ者を呑まぬうら舌が剛ばッて骨の樣に堅くなつた、お前い未田舎から出たホヤ〳〵だうら伯母さんう誰かよ貰ッた錢別を持て居る筈だ、サ奢るう奢らぬう」飾り氣のなき彼れが擧動返ッて賞すべき所あれバ路田い「奢りませう」と含首くに「有難い〳〵」と躍り上り巴里第一等の肖像畵工い其室へ退さしが、暇もなく肉衫の上よ鼠色の汚れたるジヤケツを着けて出來り「サア行う」と先立ちて梯子段を下るにぞ路田も其後よ從ひて下行くよ、此店の出口に立ちて樣子ありげよ佇立める一人あり、見れバ昨日法廷にて見受たる此家の主人傳藏なり、彼れ今しも番頭より廿一號室に滯來の客ありし旨を聞き其顏を見覺え置かんとて出來りし者ならん路田い丁切眞二の死刑となりしも重に此傳藏の證言に據りたりと思へバ夫となく其顏を眺むるに細き眼深く凹み、薄き唇の堅く閉たるなど極て正直なる柏にい非ず、陰險の人なりとい是だけよて察せらる、倉田竹陰い「主人、今日い初めてお前の顏を見るな」と言捨て其儘走り出んとするに主人い馳寄ッて倉田を引留め「貴方い先ア毎日ブラ〳〵と遊でばかり居て、仕事を探す樣子もなく、先月以來溜ッて居る勘定い何うして下さるお積りです」と嚴しく催促すれど事ともせず「顏を見る度催促する、手前の樣な慾張ッた奴いない、己が此儘食逃をして仕舞へバ何うするか逃もせずに斯して泊ッて居るのを有難いと思ふが好い」　主人い冷笑ひて「貴方の樣な客い逃て呉れたが結句幸じや、今夜い遲く歸ッても店の戸い開ませんぜ、夫で惡けりやお歸りなさるな」竹陰い火ッと怒り「何だ馬鹿主人めコ己を〆出すなら〆出して見ろ己の舌一枚で手前の身體い何うでもなるぞ」此短き威文句に主人い忽ち顏色を變へ、返事する言葉も出ず、竹陰い「夫見ろ」と言捨て其儘路田を引連れつ後をも見ずに立出しが路田い此樣子を見て只事ならじと思ひたれバ步みながらも言葉を廻して「貴方い大層氣が短い樣ですヲ　己ら、ナニ一時ムカ〳〵と腹ゞ立ても直に忘れて仕舞ふのサ、併し彼の主人めい最と窘めて遣ても好のだ己を〆出すなぞと云ふけれを己に大變な事を知れて居るから其樣な事い仕得ないテ」路田い茲ぞと附入て「へ

エ、大變な事とハ何ですか、彼方の口振でハ主人が人ハ臆病者だもの人を殺すなどと其樣な立派な事が出來る者か、併し彼奴め、多分心の中で先日の人殺の下手人を知て居るだらふ、己が彼奴を痛い目に逢すと云ふのハ彼奴め裁判所で僞りを言立たのだ、二月二十八日の午過に大戸長兵衞を尋ねて來た客仁ハ是なる丁切眞二よ違ひありませんと裁判官の前で立派に誓ひを立たけれど夫が僞りサ、午過よ尋ねて來たのハ決して丁切眞二でない、私ハ其證據を持て居る、私が其證據を裁判所へ持出せバ彼れ必ず僞證の罪よ落されるのだ」路田ハ是だけ聞きて早や大願の半バ成就せし想ひをなし「シテ其證據とハ何ですか、エ何の樣な證據です」と田舍者よハありまじきほど熱心よ問掛けたり

第二十五回

「其證據ハ何です」と熱心よ問掛ける路田秀次郎に向ひ「倉」二十八日の晝過に長兵衞を尋ねて來た其客に己が階子段で逢たら徒ら半分に其姿を描いて置た、肖像畫にハ敵のない己の筆だらら寸分紛違ひないがアノ丁切眞二と九切違ッて居る、此繪姿を見せさへすれバ何れほど馬鹿な裁判官でも僞藏が僞りを言立た事ハ直ちに悟るだらふ」是ぞ屈強の手掛と思へバ路田ハ首を突出して「ヘエ、其肖像を持て居ますか「倉」持ていれ居るがお前の樣な繪の事を知らぬ者に見せたとて仕方がない、筆少よ描てハあるが若し黒人に見せたなら己の筆法に感心するて「路」イエ私しハ田舍者でも繪を見るのハ大好です見せて下さいな「倉」好とハ頼もしい、今夜にも見せて遣ふ」是にて話ハ途切れしが路田ハ猶ほも聞出し度き事數々なれバ「ですが貴方ハ其樣な證據まで持て居ながら裁判官へ何事も言立ずよ居たのですか「倉」言立て遣る者ゆ、己ハ裁判官だの巡査探偵だのと云ふ者ハ大嫌ひだらら—夫とも放々問はれバ人の命に掛る事だらら強て隱しハせぬけれど此方から申出るにも及ばぬ事サ、夫よ又現場を調た警察官が己の方にハ振向もせず番頭にさへ問へバ充分だと思ッた樣子で番頭の言葉ばらり書留めたから己ハ心の中で馬鹿な奴だと思ッて居たのサ「路」夫でハ貴方色々の事を知て居るでせう「倉」ナニ色々の事とて爾ハ知ぬが隣の室よ寢て居た丈に幾等か妙な事を知て居るのサ「路」妙な事とハ何ですゥ、エ、其妙な事とハ「倉」外でもないアノ夜己の寢たのが十時半であつたがトロ〳〵と微睡むうち變な物音を聞たらら現ながらハテなと思ひ耳を立ると隣の室で苦と云ふ聲が聞えた、今思ふと是が確よ長兵衞が寢込を刺れた聲でハもあつたのだらふ眠くハあるし其儘又枕よ就ふとするとソロ〳〵と其室の戸を明て外へ出て行く奴がある「路」成るほど夫れが本統の曲者ですゥ「倉」廊下を忍び足で階子段の方へ行たと思ッたが階子段を下ッたのゥ下らぬのゥ其儘足音が消て仕舞た、是から後ハ夢とも附かず現とも就かず唯ウトリ〳〵して居ると今度ハ下らら急足で上ッて來て長兵衞が室の戸を叩き終よ其中へ這入た奴がある、是がアノ丁切眞二サ彼奴裁判所で言立た通り、物にでも躓いたのか中でドタバタ音をさせて居た其所へ生憎番頭が三階を見廻りよ遣ッて來たのだ」路田ハ益々熱心になり「夫で何ですか番頭ハ大抵毎晩其時刻

に成ると三階を見廻ますう」此間ハ田舎者の口と
して ハ穿ち過たる問様なり倉田竹陰も怪みて
か「お前ハ恐しい堀て問ふなア」路田ハバツと心附き「イエサ餘り話が面白いうら」と繞に濁し
果せたり、此く語らひながら歩むうち兩人ハ但ある下等料理屋の前に出たれバ、倉田竹陰ハ其
店に指して「何うだ奢るなら此店にしやうじやないか」今までの輕路祐秀ならバ斯る男の連と
なり斯る料理店ヨ入込む事思ひも寄らねど今ハ一個の田舎者あり殊ヨ此邊に見知れる人ハ逢ふ
恐れもなければ倉田竹陰の背後に從ひ大膽ヨ入込て隅の方なる卓子に向ひ座したり、と云へ
經驗の積ざる事とて何となく背後より他人に見らるゝ如き心地するにぞ路田ハ念の爲にとて室
内を見廻すヨ店の出口の方に當り商人と覺しき四五人の客あり卓子に向ひて靜ヨ何事をかなせ
る樣あるハドミノ（賭事勝負の一種）の勝負に餘念あき者と知る、是ならバ先づ安心と「サア貴
方何なりと注文なさい」と云ふヨ倉田ハ合點て給仕を呼び冷肉ヨ添へビールとブランデーを持
來れと命じたり 路「オヤ貴方ハ兩方を一緒に呑ますか 倉「爾サ、ビールと云ふ奴ハ二三盃呑むと後
ハ水の樣な味がするのでブランデーを割て呑むのサ、お前の田舎でハ此樣事ハ未知る舞ひ 路「今
聞くが初めてゞす 倉「此樣な事をせぬから道理でお前ハ顔の色が生ッ白い、此奴を呑で見給へ一
月も續けると直に私の樣に鼻の頭が眞赤ヨなるうら 路「イヤ夫ヨハ及びません〳〵 倉「ナニ夫ヨ
及ばぬ、其樣な卑怯な奴があるか、イヤ爾だ〳〵お前ハ膽病だうら色が白い、一寸と見ると丸で
毎朝〳〵給仕に髮の毛を撫附させる若殿なぞハ大嫌ひさ 路田ハ心

の中ヨて扨ハ我が此姿猶ハ充分に田舎者とハ見えぬもの乎、浮々して見破れるより何でも早く
酔せるヨ如くハなしと卓子の上なるビールの瓶を手に取りて「サア先づ一杯おあがりなさい」と
倉田のコップヨ注んとするに倉田ハ早くも路田の指なる指環に目を留め路田の手先を確と握り
て「ヤア此指輪ハ、一通の品でないが―お前ハ貴族の息子と見えるな」とて怪しみて目を見張り

第二十六回

實にや千慮の一失とう云へる通り輕路祐秀ハ栗田孃の差圖を受け頭の端より足の先まで田舎者
路田秀次郎ヨなり濟したれど唯一つ小指の指輪を其儘ヨ殘し居たるなり、此指輪通常の品とハ
違ひ侯爵輕路家の家紋を彫みたる者ヨて貴族の外ハ斯る指輪を欲る事なし、去れバ畵工倉田竹
陰に其手を取られ「此指輪ハ」と問はれし時路田ハ悸と驚ろきたれど拔られるだけ拔て見んとて
「ヘエ此指環が何うしたのです 倉「何うしたでハない平民の品でハないが 路「ハア爾ですう私ハ又
爾とも知らず、田舍を出る時、伯母から貰ッたのを其儘欲めて居ましたが 倉「何だ田舍の伯母、お
前の伯母ハ侯爵夫人か」 路田ハ又一層驚けり此家紋を見て侯爵家ヨ限れる者と察するハ中々
の古實家なり「何ヨ、侯爵の何爵のと其樣な者じやありません百性の女房ですよ 倉「百性の女房か
も知らぬが此指環にある紋ハ昔侯爵家で鎧や其他の武器ヨ附けた記號の一つだ、己ハ繪工だけ
で其樣な事ハ調て居る素人が見れバ唯一の紋だけれど此紋が符諜の樣な者で夫々讀み方がある

其讀方ハ家系學者でなくてハ分らぬ事だがドレ己が讀で見やうゥ」とて其紋を見て紋の中ある記號を讀むよ少しの間違だもあらゞ昔しドホゼルと云へる人ハ此記號を讀むに巧みなるが偽め路易王の朝廷にかゝへられたる事もあり、此亂暴なる一齣工が斯る事を知居るとハ殆ど意外の事なれバ路田ハ只管泥れたるが故と聲を出して打笑ひ「貴方の云ふ事ハ少しも分りません 倉分らぬなら是で止さふ」とて是より倉田ハ何事をも云はずして唯酒を呑むのみなれバ何でも醉せるよ如くなしと一杯呑めバ一杯注ぎ頻と酒を勸めたるに、此時一方よりてドミノの勝負を爭へる商人達の聲つと路田の耳よ入り何とやら聞覺ゑある如く思はるゝよぞ路田ハ我知らず聞耳立れバ聞覺ゑのある道理や、昨夜、外國館よて逢ひたる彼の毛村隱居確よ其中に交はり居るなり路田ハ愈々當惑し今彼の隱居に認められ話しでも仕掛けらるゝ事ありてハ此上なく面倒なのみうハ何故斯る所よ來りしやと問はれてハ返答よ困る譯なり何とうして彼の隱居に認められぬ樣に仕たき者なりと獨り心を痛むる折しも商人の一人ハ毛村に向ひ「君ガ賴み附の代言人ハ春木博士じやないう」と問ふ「夫れが何した 商」其春木ガ又君の婿の澤部忠氏と敵味方になつて裁判を爭ふとハ不思議じやないか 毛「ナニ不思議じやない、近々又春木ガ原告となり澤部忠氏よ對して離婚の訴訟を起す筈だ、今度こそ春木ガ勝を得るテ」商人ハ驚きたる調子にて「何だと君ハ澤部に娘を遣て置て今又取返す積りで離緣の訴へを起すのか 毛「爾サ、今まで婿夫を見損なツて居たのだら取もどすに不思議ハある舞ひ夫ガ偽に離婚法律と云ふ者ガあるのだら」是にて

話しハ暫し途絶えしガ商人ハ又語を起し「夫より未一ツ不思議なのハ昨日裁判を受けた丁度眞二ハ君の知て居る男だと云ふ事だゼ 毛「誰ガ爾云ツた 商「ビウトレ街の雜貨商町田ガ裁判を傍聽して歸ツての話だ、何でも先年君の娘に戀慕し其後米國へ逃亡したアノ若者に違ひないとて 毛「ナニ其樣な筈ハないアノ若者ハ死で仕舞た 商「夫に町田ハ未だ色々の事を言たよ、大戶長兵衛を殺たのハ丁切眞二でなく全く外にあるツて又一人一夫でハ丁切眞二ハ無實の罪を受けたのか 商町田の說でハ爾だとよ、宿屋の主人傳藏の證言で罪に落されたけれど傳藏が實ハ誠の罪人を知て居て夫を保ふが爲めに僞りを申立たのだらふツて何でも傳藏が誠の罪人と二人で金を分た者と見えるとよ」意外なる所にて意外なる話しを聞く者と路田ハ知らず〳〵其方よ振向きたるよ今まで餘念もなき如く酒呑み居たる倉田竹陰ハ忽ち又路田の手を捕へ「コレ手前ハ隱したツても無益だぞ、其樣に他人の話しよ耳と立るハ必定其筋の探偵に違ひない」と突然に責掛けたり

第二十七回

倉田竹陰ハ能くも見拔たり「手前ハ其筋の探偵だな」と嚴く問掛る一言に路田秀次郎ハ悸としたれど猶ほ顏色を失はず「何ですと、私しが探偵ですッて 倉假忘ても行けないよ、先ほどら變に色々な事を問ふ奴だと思ツたが田舍者の癖と油斷して居たところ、合點の行かぬ侯爵の指環と云ひ今ハ又隣の卓子に居る人達の話に耳を澄して居るじやないか、丁切眞二の話だら夫で聞度く思ふだらふ 路「ナニ爾でハありません 倉「幾等言譯しても無益だ、今まで何でも侯爵の姿を

して上等社會の事を探ツて居たのだ、夫が長官からチケトン街の事件を探れと言附られ直ぐ又田舍者に姿と變へたゝら指環を拔のを忘れて居たのだ、手前の樣な者ハナ、探偵社會でも猶餘程素徒だ、其樣な事でハ此倉田竹陰を欺く事ハ思ひも寄らぬ、最う手前に用事ハない一緒ぢ居るのも汚はしい」と云捨て立上り後をも見ずに走去りたり、抑も巴里の市人ハ一般に探偵を憎む事實に激く其中よも倉田竹陰の如き風体の怪き爲め屢々巡査や探偵なぞよ咎められるより之を嫌ふの念更よ强かるべし、然るに今路田秀次郎が充分掛引よ慣れぬ爲とハ云へ彼れよ探偵と見られしハ重々の失策なり、チケトン街の事件よ就きてハ彼れ樣々の事を知れるが上、殊よ長兵術を尋ね來しと云ふ何者ぞの繪姿を隱し持り此紛姿さへ手よ入らぬうち彼れの疑ひを受けたるハ我目的を破るに齊しと路田ハ痛く失望せしが今ハ取返す工夫なし兎にも角にも一度彼の宿屋に歸り緩々と工夫せん、先刻も栗田嬢が女工よ化けて尋ね來ると云ひたれバ嬢の力を假り何とう又施すべき手便もあらんと漸く我心を慰めつ此店の勘定を濟ませて戶表の方へ立出れバ端なく顏と顏突合すハ今しも一足先此店を立出たる彼の毛村隱居あり、路田ハ面倒臭しと思ひ顏を背けて立去らんとするよ隱居ハ早くも聲を掛け「ヤア お前ハ昨夜外國館で一緒よなつた春木辯護人の書記でハないか何うして今日ハ此邊へ」路田ハ口より出任せに「春木から得意先へ屆ける書面があるので夫を持て來たのですが、道が違くて手間取ましたゝら此店で食事をして居たのです」毛「爾か、私も今まで此店よ居たけれど餘り姿が變ツて居るゝらお前とハ氣が附なんた、何故先ア田舍者の樣な身姿をする」路田ハ殆ど返事に困り又も口より出任せに「春木が立派な姿をするハ身分に不相應だと云ますゝら田舍に居た時の着物を其儘着て來たのです」毛「夫ハ感心だ其樣な風をする方が返ツて人に賴母しぐられる身姿よ搏はず勉强して居れバ其中よ又思はぬ幸ひが降て來る者じや、時にお前ハ田舍に許嫁の女でもあるのゝな」と突然よ問掛る、扨ハ栗田嬢が言し如く此隱居我を婿よでもするせんが別に欲いとも思ひません」毛「イヤ玆で先から取返すよ付き春木に代言を賴む積だ、其節にハお前よも度々逢ひ綾々話も出來るだらふ」路「ハイ今日ハ甚だ忙ぎますゝら是でお分れに致しませう」と愛想のなき言葉を殘し逃去る如く分れし儘、隱居が事ハ氣にも留めず、唯心に掛る一條ハ若しや彼の倉田竹陰、走り返りて宿屋の主人に我を探偵なりと告げハせぬう、今しも毛村隱居の連なる男が話居たる事と云ひ猶其外の事ぞも彼是考へ合す時ハ彼の亭主が實の罪人を知れると殆ど疑ふ所なし、亭主よまで探偵なりと疑はれてハ我目的達せぬのみうハ今宵の中よ追出さるゝやも知ず、と、考へながら步むうち何時しゝ宿屋の入口に就きたり、此時宿屋の內より早足に出來り路田と擦違ひ去る男あり、不意の事とて確よ其顏を見る暇なゝりしも何となく昨夜倶樂部にて怪しゝと白眼みたる彼の米國人驚根鷹三に髣髴たり、ハッと思ひて振向き見るに背姿ハ益々彼れよ相違なし、彼れ昨夜春木に飼ひ藏劍の結果を問んとせしのみならず今また此宿屋よ入來るハ仔細ある事ならん訊れよもせ

よ春木よ逢はゞ此事を知せ遣るべしと、斯く思定めつゝ宿屋の内へと入込むよ帳場に座せるゝ唯主人一人なれゞ路田ゝ之よ向ひて我室の鍵を請ふよ主人ゝ引出しより取りて差出す、是にて見れゞ竹陰より未我が事を聞ぬと見ゆ、去れや彼れの様子に何所となく落着かぬ所あり殊よゝ其眼の中よ立腹せし如き光を留むるゝ誰れうと痛く言爭ひし後と思はる、若しや彼の驚根鷹三と物言して分れしにゝあらぬか、孰れよしろ此後の注意一つにて追々分る所あらんと路田ゝ漸く我心を慰めながら、彼の長兵衛の殺されたる第廿一號の室よ入り長兵衛の眠りしと云へる其寐臺の上に寐たり、アゝ是も誰故

第二十八回

丁切眞二が死刑の裁判を受けしより既よ十五日を經て、時ゝ六月の初となりぬ、鳥ゝ綠なす若葉の間に囀り、人ゝボアス、ブロン及びカンプ、エリシーなど云へる極樂の園よ集ふ、正よ是れ年中の最も樂しき時候あり、天晴れて風暖よ、昨日まで街頭よ凍え居たる貧民も、今日よりゝ衣薄きも寒さの肌を侵せなきを喜び天高く地厚し、此樂しき世界に在りて獨り天地の惠を受ず絶望の谷底よ沈吟せるハラ、ロケーなる牢屋の内の四人なり、夜半に窓外なる首切臺を修繕する音を聞きてゝ是れ明朝我が乘る板に釘うつなりと思ひて夢魂切りよ安からず、今日の苦み昨日に增し、一刻一刻よ益々我が壽命の縮む外、變りたる事更になし、仰ひで天よ訴ふれども窓高ふして天見えず、人生又斯の如き慘憺たる境やある、憐れむべし丁切眞二も亦此内の一人なり、

去れど丁切眞二ゝ通例の罪人と事變れり、朝ゝ六時より七時よ起き終日端坐して默然たり、書を讀まず口を開ふず顏に嘆きの色を浮めず、去れゞとて思に沈み憂よ鬱ぐ樣子も見えず、彼れ全く身体の感覺を失ひ盡したるゝ、何ぞ我命の明日よも盡きんとする今日に當り斯までも落着きたるや、人笑へども彼れ笑はず人泣けども彼れ泣ゝず彼れ眞に石心鐵腸の人なるゝ、座して倦む時ゝ起ち、起ちて飽く時ゝ座し唯日に二度三度、乏しき水に手拭を絞り我ゞ身体を拭き終り心地好げに發と息するのみ、其他にゝ何事をもなす事なし、去れゞ牢の外より隙間なく彼れの擧動を伺ひて長官に報ぜるを役目とせる牢番の人々も初め一日二日ゝ彼れ故と瘦我慢を張り悲さを堪へ憂を隱せるならんと思ひしも四日五日と經、七日十日と立つに及びてゝ其沈着なるに驚ろぬいなし、殊よ彼れゞ夜の七時前に寢床よ上り朝の引明よ至るまで心地好くスヤ〳〵と眠むる樣、心に苦のある人とゝ思はれず、通例の死刑罪人ゝ夜よ幾度となく魘されて果ゝ自ら眠り得ず眞夜なりに起き來りて室内を走回るもあり、中よゝ又夜中ゝ我罪の恐ろしさよ眠り得き夜明に至りて漸くよ心疲れ初て眠りよ就くもあり、獨り丁切眞二のみゝ夫等の罪人よ同じからず、アゝ彼れ何故に斯までも落着きて、牢の中に在る事我家に在るよりも安樂に擺ゆるや牢番ゝ互よ噂し此人必ず全くの一人者よて心に掛る父母もなく妻子兄弟もなく、唯あるゝ借金のみにして外に出催促さるゝより茲よ居るを氣樂に思ひ居るならんと云へり、人の心人知ら

ず、丁切眞二豈に爾る氣樂なる身の上ならんや、彼れが心い失望ょ冷え凍りしなり、凍たる水よ
波生せずとかや彼れが心今い一切の波風を起さぬ迄ょ冷凍り、我身の到底助からぬを見て絕望
の極今い一種の斷念を起し來り泰然自若の有樣よい歸りつるなり、其情や絕望に泣狂ふ人より
も猶更ょ憐むべし、彼れ心の中ょ指折り數へ、我が上告をなしてより今日い十五日目に當る事ゆ
ゑ最早や上告相立ずとの知せ來らん今日よも死刑臺に引出さるゝ事あらんと、今朝い毎もより
早く起出で牢番が差入れ呉れたる一椀の冷水を手拭ょ受け周く身体を拭終り「アゝ此樣な時に
水使ふ大な盥があれが、何れはどう心持が好らふ」と呟さしが、是れぞ彼れが此牢ょ入りてより
初ての音樂なり、彼れが心ょ罪もなく殆ど透とはりたる玉の白さが如くなるい唯是のみにて察せらる、拭終りて座ょ返り、差入られたる飯を取りて朝餐を終れが是より又も例の如く端座したるに此時毎よなく室の外にて人の來る足音せり、毎日看視官の見廻り來る事いあれど开い多く晝過なり、今日ょ限りて今時分來りしい愈々我が上告の斥けられ死刑臺に引出さるる時來りしうと騷ぎもせず悠然として待居たるに、足音い益々我が室の戸口に近き外より鍵の穴に鍵を入れ、ギーと音して重き戸を引開たり、抑も來りしい何人ぞ

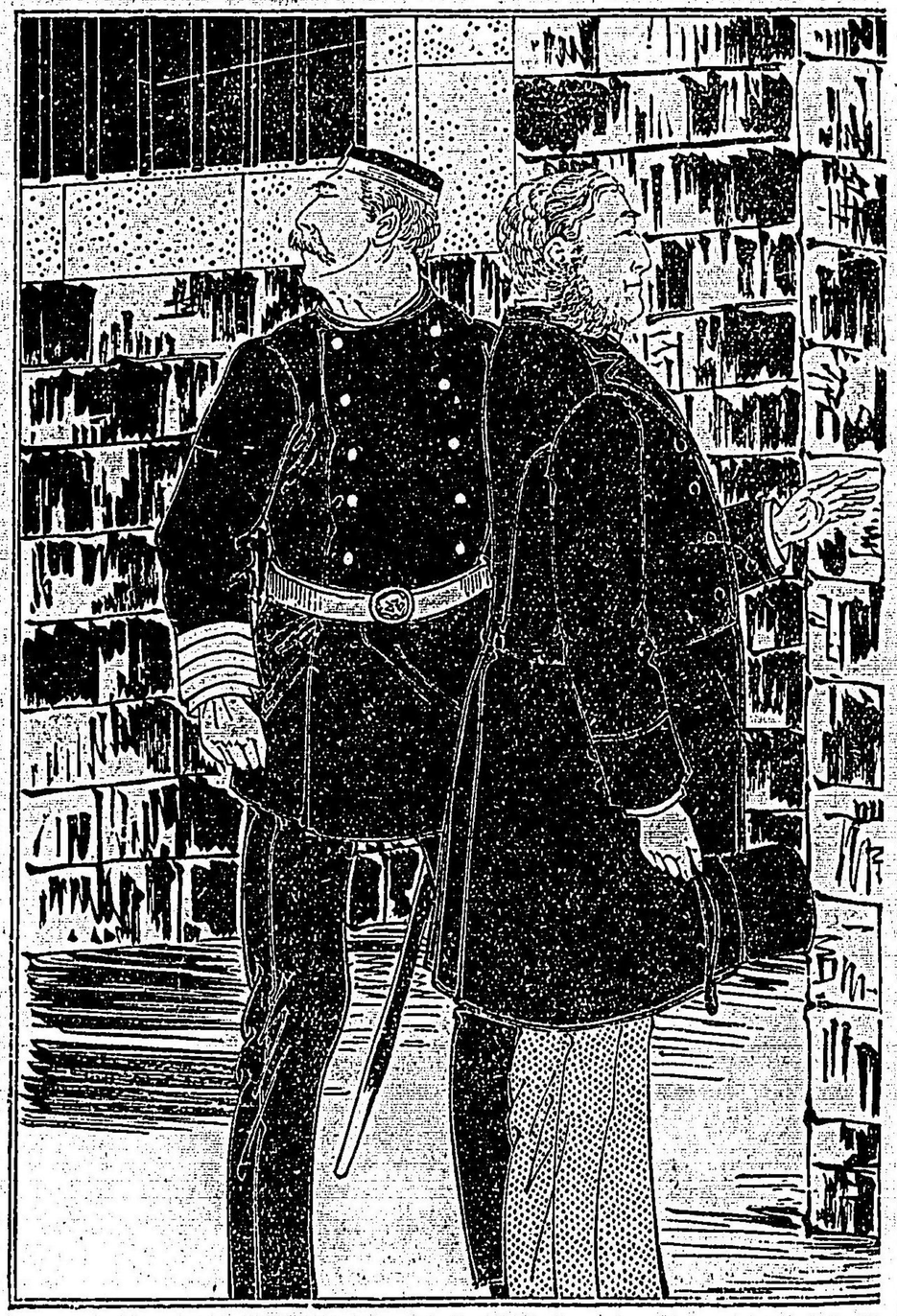
第二十九回

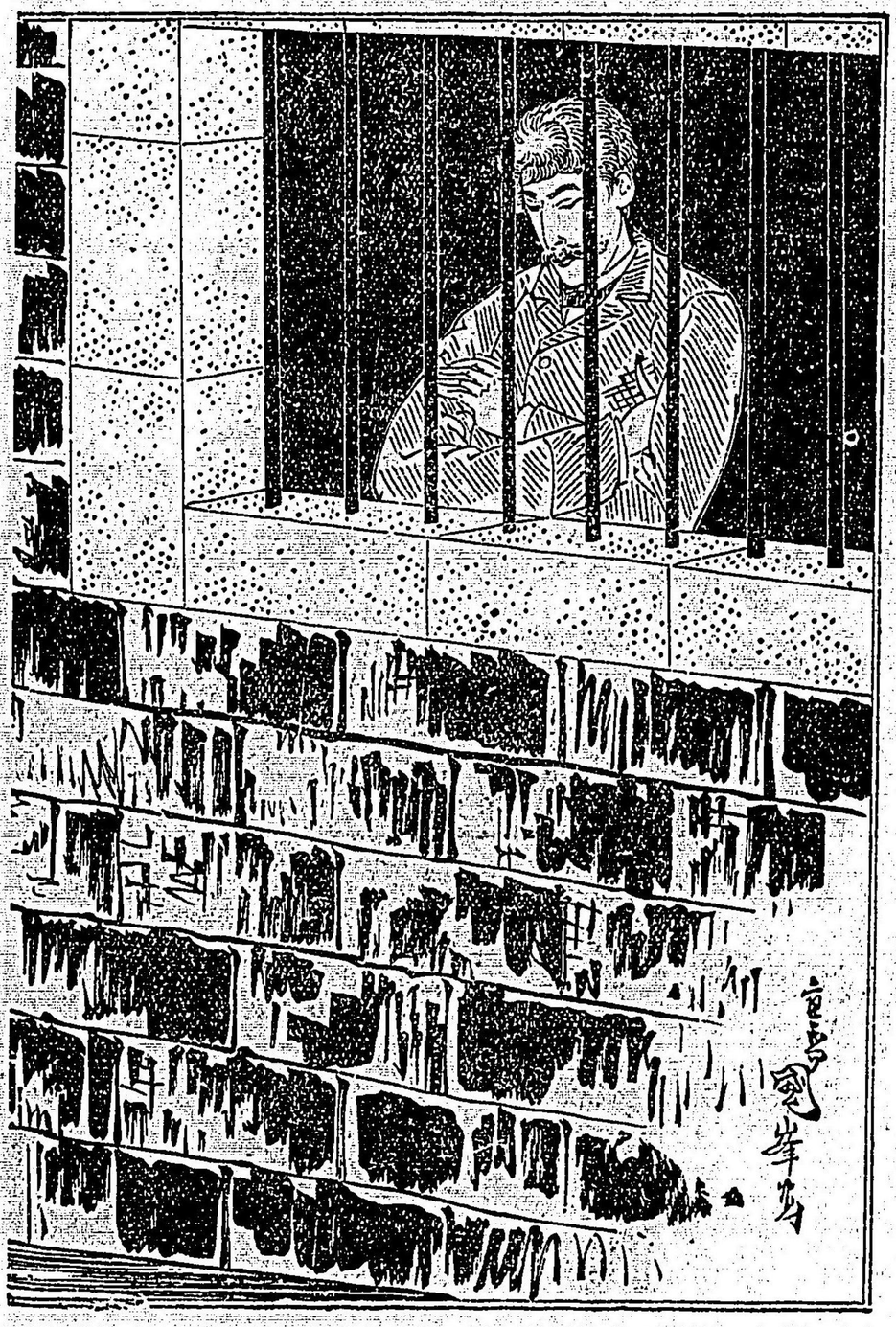
牢の外より戸を開きて入來る音ょ丁切眞二い早や我上告の立ずして我命の盡るべき時來りしを知れり、去れど彼れ敢て慌かず窮窟なる一室に天の色さへ眺めずして暮すより早く死刑ょ處せらるゝこそ安樂と思ふ程なれど寧ろ嬉しげょ立上れり、之れと齊しく入來るい果せるかな此牢の典獄なり、典獄の言葉を待たずして丁切眞二い靜ょ口を開き「愈々今日が死刑執行の日取ですう、用意い好いうら直ょ參りませう」問きて典獄い打笑みたり「イヤ爾でいありません貴方の辨護人が面會に來ましたので」と言ふ聲ょ連れ入來るい春木辯護人なり典「今日の面會い一時間限りです、牢番を迯ょ殘し私しい退きますとて典獄い立去しが、春木い猶は其話しを牢番に聞るゝこそ辛しと思ふ如く丁切眞二の手を取りて室の隅の方まで連れ去るに牢番も感心に其意を察してう己れい反對なる隅の方に行き衣囊より小說本を取出しつ無言よて讀初む、其有樣い「遠慮なくお話なさい面白くもない貴方がたの話を聞度くいありません」と云ふょ似たり、春木い前ょも牢屋に來り丁切眞二と殆ど友達の如き中となりたれど言葉さへ打解て「貴方の樣な神經の確な人よい隱し立よも及ばぬうら直に打明て仕舞ますが實い先日の上告い立ません昨日棄却されました」眞二い落着きて「無論爾だらうと思ッて居ました」舉「固より初から立つ積りでいなく彼是れ手間取らせて置て其中ょ誠の罪人を探すと云ふ目的でもう棄却されても驚きいしませんが卅日係ると思ッた者が二週間しう係らなんだい少し失望です併し此上未哀訴する時間がありますうら」眞二い少し顏と變め「此上の哀訴いお斷りヤしませう今まで十五日間此室に籠ッて居たのが隨分退屈でした此上又十五日引張れるい殺されるより辛いと思ひます」舉「辛くても仕方がおい哀訴よい貴方の記名が要ませんうら既ょ其手續きを附けて置きました是で又十五日手

間取る中にゝ必ず曲者を見出します 眞「無益です今まで十五日に何の結果がなゥッた者が此から十五日に何うして結果を得られませう 眷「イヤ爾でない、貴方が手傳て呉さへすれゞ存外早く結果を得ませう」と不審なる言條に眞二ゝ怪みて「エ、私しが何うして手傳ひまセ 眷「何うしてゞもない、貴方の身の上に就き私しが問ふ丈の事を殘らず返事をれゞ好いのです 眞「イヤ夫ゝ出來ません、先日も云ふた通り名前さへも隱し度い私しですもの 眷「所が名前ゝ最う知て居ます」と て耳よせ「村井芳男」と細語くゝ流石の眞二も打驚き我知ず聲を發して「でゝ近子が」 眷「イヤ近子が云たと云ふ譯でもなく、吾々ゝ既ゟ貴方の妹御勝子さんまでお目ゟ掛り大抵の事ゝ知て居ます、勝子さんも熱心に貴方を助け度と願ひ吾々のする事を贊成して居るのです、イエ最う私しに隱すのゝ無益な事、貴方と近子との關係ゝ云ふ迄もなく、貴方の父の財産を毛村隱居に任した爲め、隱居ゝ相場の狂で其財産を蕩盡したと云ひながら實ゝ自分の懷中を肥した事ゟり貴方が十五の年から英國へ行き倫敦で修業して此巴里へゝ廿二の時初て歸り父の家ゟ居るか近子の家に行くか其外ゟゝ餘り世間へ交らず其上旅行が好な爲め巴里に居る事ゝ少くて大抵外國へ出て居たゥら巴里にゝ返ッて貴方の顏を見知る者が少く友達ゝ多く倫敦ゟ在る事や、其後貴方が失望の餘り身を下等社會に投じ終に米國へ出發する事ゟなゥッた次第まで殘らず聞て仕舞ましたが唯だ其米國へ行てゥら何をしたゥ其後の事が少しも分らぬので實ゝ夫を聞度いのです」 眷「丁切眞二ゝ春木が早くも我身の上を知り我が妹まで探り出せし其骨折と其熱心の一方ならぬに驚き如く、唯春木の顏を見詰るのみなりしが「爾迄存じの上ゝ言ませう、私しゝ妹が母に讓れた財産の中、五千法だけ分て貰ひ夫を旅費ゟして米國へ行きましたが着と直に桑港の方へ行き樣々の事業を企てゝも一として成就する事ゝなく此上ゝ迚も勞役して身を興す外ゝないとコロラドの鑛山へ手を出した所ろ、意外にも幸運が向て來て人の知ぬ黃金の脈を掘當た爲め無代價同樣の借區が終に非常の所得を見る事となり一身代興したゥら其金を妹勝子と分る爲に巴里へ歸ッて來たのです、アノ殺された長兵衞と懇意ゟなゥたのも實ゝ其鑛山の爲です 眷「長兵衞ゝ鑛山で何をしました 眞「私しの組合人です初め鑛山を借る時に二人で五十弗づゝ出合て初ましたが後にゝ非常の金鑛となゥたに付き其鑛山を二百弗宛の株とし私しも長兵衞も其株を一樣に千株宛持て居ました即ち二人が百万法宛の身代におゥたので私しゝ最う茲が見切所と其株を皆長兵衞ゟ賣渡したのです 眷「でゝ長兵衞が二月廿八日にロスチャイルドゥら引出した二十万弗即ち百万法の大金ゝ 眞「アレが即ち私しへ拂ふ金でゝ、長兵衞ゝ二月ばゥり大陸漫遊をし度いと云ふし私しゝ巴里へ歸り度と思ふゥら取引ゝ巴里でする約束で二人とも米國を出たのです」 春木ゝ痛く驚きて「でゝアノ大金が其實貴方の物だと云ふ何ゥ證據がありますゥ 眞「證據がないゥら、言ふだけ人ゟ疑はれる元と思ひ今まで默ッて居たのです、固より米國を出る時ゝ確な契約證書を持て居ましたが夫も途中で失なッて仕舞ました」

契約證書を途中にて失ひしと聞き春木辯護人ハ充分ヨ丁切眞二の顏を眺むるヨ素より僞りあらぬ事其顏色ヨて察せらるゝよぞ「フム夫ハ實に惜い事をしました子、併し何うして失ひました」眞「難船の爲め失ひました」拳「難船とハ」眞「オヤ貴方ハ未新聞で見ませんゥ紐育から英國へ行く船がコユー、フチンドランドから三百海里離れた沖合で外の汽船と衝突して沈沒をしたと云ふ事を」拳「成るほど新聞ヨ出てハ居たゞ自分の身に關係の無事とおもひ浮かり讀で居ましたアノ船に貴方が乘て居たのですゥ」眞「爾ですアノ船に乘て居たゥら裁判所で私しを種々の船長や船員ヨ見せたけれど私しの顏を見知ッた者ゞなゥッたのです」拳「ですゞ貴方ハ何故英國行の船なぞに乘りました」眞「實ハ倫敦の友人に少しゞゥりの古い借金がありますので、夫を拂ッて其上で此巴里へ來やうと思ひ私しハ長兵衞より一週間先に英國行の船に乘たのでヨ英國で用事の濟み次第直ヨ當國へ渡りハブル港で長兵衞の着くのを待て居やうと斯約束をして置ましたゞ今云ふ通り海上で船ゞ沈んた爲め契約證書ハ荷物と共になくなりました、尤も乘客ハ殘らヨ其着當た船ヨ助けられ無事ヨ英國へ着きましたゞ、私しの身に殘ッたハ唯だ衣嚢の中に入れて居た旅費だけです是で英國へ着た所ゞ思ふ用事を達す事ハ出來ヨ殊ヨ夫ゞ爲め豫定よりハ手間取た者ですゥら長兵衞より後ヨなッてハ大變と倫敦へハ立寄らヨ英國のサウサンプトンゥら直ヨ又船に乘り當國へ着たのです」拳「夫ハ幾日の事でした」眞「二月廿七日で、丁度長兵衞と一緒の日でヨ、私しゞハブルへ着き上陸して、米國ゥらの船ハ何時着くゥと船宿で聞た所ゥ最ゥ程あく着く時刻ですと云ひますゥら私しハ其儘波止場へ行き待て居る所へ其船ゞ着たのです」拳「其處で長兵衞に逢たのです」眞「爾です長兵衞ゞ船ゥら降りると直ヨ逢ひました」拳「夫ゥら證書のなくなッた事を話ましたゥ」眞「イエ話ません、素より證書ゞあくても、渡すだけの金ハ私しへ渡すに極ッて居ませけれど、夫でも人の心ハ何う變ぜるも知れませんから愈々取引の濟む迄ハ默ッて居るが好ゥふと外の話をして一緒ヨ暫時休息したゞゥり直に又一緒に巴里まで夜汽車に乘込だのです、汽車の中で長兵衞が云ふにハ今日巴里へ着き宿屋へ行て十二時まで休み夫から直に銀行へ行くに由り彼の金ハ今夜の十二時迄に渡すとしやう其積りで十一時過に尋ねて來て呉れ待て居るゥらと云ひました」拳「夫でラザルの停車場で分れたのですか」眞「ハイ停車場へ着くと直に分れました」拳「何故」眞「何故だッて長兵衞ハチケトン街の宿屋へ泊ると云ふし私しハ其樣な下等の宿へ泊るのが否でしたゥらでも併し貴方ゞ何所かへ宿を定め相な者でハありませんゥ」眞「イヤ私しハ宿を定めぬ譯がありますゝ私しハ未此巴里に居を定めるとハ思はず昔の愛情が今以て心に焚え近子の事が戀しくて成ませぬゥら兎も角も近子ヨ逢ひ己の妻になるか成ぬゥを聞き、成ると云へゞ近子ヨ離緣を取らせ緩々と相談の上で住居を定めるし、否だと云へゞ全く思ひ切り妹勝子ヨ大金の半分を分て置て再び此巴里へ歸らぬ樣東洋へ向け直に出發する積りでした、夫だゥら宿ハ定めヨ何も角も近子に逢た上で極める事と、或料理屋へ寄り食事しながら手紙を書き、今夜シユリーの橋で逢て呉れと云ふて遣ました」拳「けれどゝも貴方ハ何うして近子に離緣を取せる積りでしたゥ」眞「今思へ

ハ面目ないが、夫が世に云ふ頑悩でも、前にハ身代のない爲よ近子の父も、無論苦情ハ云ふ舞いし近子の了見一ツで何うでもなると思ひました、私しハ鐵山で汗水よなツて稼ぐ間も唯近子の事のみ思ひ、此辛抱を仕遂げればハ國へ歸ツて近子を我物にする事が出來る者と夫を樂しみに稼いだのです」春木ハ聞來りて殆ど憐れみの念を催ほし「近子と貴方の愛情が本統の愛情と云ふ者です三千里離れても兩方の情が少しも變りませんから」と思はず洩す一言よ眞二ハ初て嬉しさの色を現はし「近子ハ未私しを愛して居ますゥ事ハイ可愛相に、他人の妻でありながら未貴方の事を忘れず貴方の爲よハ何れほど骨折て居るかも分りません」眞二ハ嬉さの餘り深き溜息を發し「夫で最う殺されても安心です、思ひ置く事もおく私しハ首切臺へ登ります」彼れが心を思ひ遣ればハ誰か涙を催さゝらん、春木ハ斷腸の思ひを隱して「イヤ首切臺へハ上らせよ濟せます、誠の曲者さへ分ればハ必ず貴方ハ助かります、其樣な心細い事を云ふ者でハありません、夫よ就て又問ひますが、大戸長兵衛ハ未巴里へ入込ぬ前から何うしてチケトン街の宿屋へ泊り廿一號の室を借ると云ふ事を知て居ました眞二ハ兼て幾度も巴里へ來た事のある彼れの知人が今度一緒の船に乘り巴里へ着くなら此宿屋が好らふと勸めたのです、夫でハブル港へ着くが否や直よ電信で其宿へ問合せた所ろ廿一號の室が明いて居ると答へたのです「フム宿屋の主人ハ裁判所で其樣な事を言立なんだが何か譯があつて隱して居たのだな、好し〳〵、夫から其宿を勸めた知人とハ誰ですか眞二ハ夫も桑港に居た者で支那





人と共に富籤を宿として身代を儲けた人です、名を鳩川番作と云ひまして 春「夫れ何所の人です 眞「自分でい愛蘭の生れと云ふて居ますけれど實い佛國人だらうと思ひます、事に由ると二月廿八日の午過に長兵衛を尋ねて來たと云ふのが此鳩川番作でいないらと思ひます」 春「木い何う思ひ當る事ありてう手帳を出して鳩川番作の名を書留め終り 春「其男の行ひい 眞「左樣サ支那人と一緒に富籤をせる程ですら金にある仕事なら何でも厭はぬ男です 春「好し〳〵、夫うら最一ツ聞く事がある丁切眞二と云ふ貴方の綽名い何處うら出ました」眞二い笑ひながら「是い私しが金脈を見出した時、其邊の起業家が痛く私を憎みアノ樣な奴い眞二に丁切ッて仕舞ふが好いと云たのが初りで後にい鐵山仲間で私しを丁切眞二と呼ぶ樣になりました裁判官に聞れた時其名を思ひ出したうら取敢へず答へました 春「夫で今云ふ鳩川番作い丁切眞二と云ふ其綽名を知て居ますう 眞「知て居ますとも長兵衛と一緒に船うら降り波止場で私しの顏を見た時オヽ丁切君うと云ッた位ですもの、ですが併し何故其樣な事をお問なさる 春「イヤサ、其男が此綽名を知て居れが其男も必ず新聞も讀み世間の噂も聞くだらうう必然貴方が牢よ入り裁判を受けた事を知て居ませう、知て居なが裁判所がアレほど丁切眞二の本名を知る者いヤ出よと云ふのに今まで申出もせず貴方の事を知らぬ振して居ますう必ず怪しい所があると思ひます」斯く說明うす折しもあれ牢の外より典獄の聲として「面會の時刻が切れました」

面會の時刻ゝ唯一時間にて切れたれバ春木ゝ止を得ゼ丁切眞二に分れを告げ牢屋を外に出たるが今聞し眞二の實話にて事大概ゝ分りたり、大戸長兵衛にチケトン街の下等旅宿を勸めしと云ふ鳩川番作とゝ、何者なるや、分らねゼ丁切眞二が裁判を受たる事を知ながら其筋へ名乘ても出ず、知ぬ顔に見過せるゝ第一の怪さ廉なり、支那人と共ゝ富籤を起すと云ふ廉恥のなき男なれバ誠の罪人ゝ必ず此鳩川ならん、鳩川兼て宿屋の主人と示し合せ長兵衛を其家に引込みて旨い仕事をせしよゝあらぬう、此上一筋ゝ探るべきゝ其鳩川番作なり、去るよても彼れ今ゝ欺くに在る、此巴里に入てより必ゼ其名前を變へ不義の富貴を樂めるに相違なし、思ひ合せバ先に倶樂部よて出會たる鷲根鷹三と云ふ米國人も長兵衛と同じ船に乘たりと云へり、彼れ若しや鳩川番作にゝあらぬう、番作と云へる職人の如き名を捨て商人ゝ似合はしき鷹三と云ふ名ゝ改めゝせざりし乎、殊に輕路祐秀の話に由れバ鷹三が彼の宿屋ゝ來り主人傳藏と言爭ひたる末、急ぎで其店を立去らんとする其背姿を見たりとの事、左すれバ鷹三も番作と同じく主人傳藏を知れる者なり、鷹三と番作ゝ其實一人ならざらんや、鷹三ゝ番作なり番作ゝ鷹三なり、幵を確めるゝ唯畵工倉田竹陰が寫せしと云ふ繪姿を借來りて鷹三と引較べ其上にて種々の試驗を施すに如くゝなし、唯だ殘念なるゝ倉田竹陰が輕路祐秀を其筋の探偵と疑ひて其後ゝ言葉さへ交へずとの事なれバ件の繪姿を手に入る事最難けれゼ何とか又工夫せんと、春木ゝ獨り考へ乍ら牢の門まで歩み出しよ茲にて典獄に逢れバ其傍よ進み寄り面會を許し呉たる禮を述て分れんとするよ典獄も兼て丁切眞二を憐む者と見え「何うも此罪人はゼ落着た者ゝ見た事がありません、私しゝ裁判長の命に依り絕ゼ人を附けて彼れの樣子を隙見させてありますが、通例惡事を働く者ゝ此牢へ來れバ最早や逃れぬ者と思ひ後悔の念よ迫られ或ゝ嘆息を發もるとう或ゝ獨語を云ふとう餘ほゼ樣子の變る者ですのよ彼ばうりゝ依然たる紳士です、若や人違で無實の罪よ落された者でゝないうと掛員一同怪んで居る程です」幸「イヤ人違ひと見込が附けバなるべく早く手を廻さねバ後助やうと樣々に苦心しますがー」典「爾ですう人違ひの祭になりませう萬一哀訴が棄却されると直よ其翌朝、夜の未明ぬうちよ死刑に行はれますう」ら助ける暇がありません、ですうら棄却された後で何の樣な證據が出ても無益です」春「爾です、就てゝ貴方にお願ひがありまもゞ、愈々死刑よ執行ふと云ふ命令が下ッた時にゝ直よ私しへお知せ下されませんう」典「イヤ夫ゝ出來ません毎も其命令の下るのゝ夜よ入て後の事で翌朝直に死刑ですうら、知せ度よも其暇がありますまい」春「フム暇がなけれバ致方ありませんが若知せるだけの間がありバお知せを願はれませうう」典「規則でゝ禁じられて居ますけれゼ貴方の事ですうらハイ暇さへあれバ知せませう併し當よゝ出來ません」春「イヤ貴方が受合て下さればゝ大抵ゝ大丈夫と思ひますと」斯く云ひて春木ゝ、是よて我が知ぬ間に棄却され、知らぬ間に死刑に處せらるゝ事ゝなうらんと先づ一廉ゝ安心して立去しゞ、彼の村井勝子の慈善工場ゝ此處より左まで遠うらぬ道程なれバ序の事に立寄らんと少しばうり回道して工場よ音連れ勝子に逢て今し

も兄芳男に面會し來りし事、面會の爲め大に手掛を得し事より己と輕路祐秀と力を合すに由り遠らざ芳男を救ひ得べき事、祐秀が田舍の書記よ身を窶し千辛萬苦を厭はざに働ける事迄洩さず打語るよ勝子ゝ厚く其恩を謝し猶此上とも宜しくと涙を浮めて賴しが、殊よ祐秀が身を窶せし一段を聞きてゝ痛く心を動ぅせし如く見えたり、春木ゝ此日の午過に我宅にて輕路を待受る約束をなし置ける故、後れてゝあらざとて好い加減よ切上つ、直よ馬車を雇ひて我家へと歸り着き先づ我室に歩み入るに竝よゝ我れを待受る客仁あり「オヽ春木君歸へたか大分待兼た所ろであつた」と云ゝ彼の近子の父なる毛村隱居よぞありける「ヤ、毛村さんでもか何の御用で」隱居ゝ當をも憚らざ「兼て話た通り娘を離縁する一條さ、先日から澤部忠に對し色々談判を開いた所、夫でゝ愈々離縁しやうと云ふ所まで推寄せた、是から君よ離縁の裁判を起して貰ねゞ」と不意の相談に春木ゝ眉を顰め「夫ゝ實よ寐耳に水です、先日來其樣なお話ゝ聞ましたけれど」と半分云せざ隱居ゝ誇り顔に「私ゝビヂス、マン（事務家）だらぅらグズ〳〵するが嫌ひで手取早く運んで仕舞た此上ゝ裁判さへ起して貰へゞ夫でがなけれゞ持出す事も出來ませんが、第一近子さんの承知が要る者か先よ澤部へ片附く事も近子ゝ苦情を唱へたけれざ私の手際で無理往生に推附て仕舞たのだ、近子が何と云ても夫ゝ排はぬ、直よ裁判を起して貰はふ」奈「イヤお待なさいよ、夫に又澤部氏が承知したとゝ私しよゝ分りませんが」と春木ゝ怪みながら問掛けたり

撿察官なる澤部忠までゞ既よ離婚の事を承知せしやと問ふに毛村隱居ゝ「少しも不思儀ゝない」と云ふ調子にて「夫ゝ君、金轡ゞ喰せたもの、澤部ゝ二つ返事で大賛成さ」奈「エ、金轡とゝ毛「イヤ君も餘ぱや生涯君よ五千法づヽの年金を遣るゞ何うだ若し離縁せぬ日よゝ五千法ゝ扨置て此後とも一文の金も貸さず假令ひ私が死る時でも遺産を分て遣らぬうら二つよ一つの返事をせよと迫ッたのだすると彼奴中々野心のある男で是から少々ゝ金を使ッても撿事長まで出世し度と思ふて居る所だらふ、夫だうら五千法の年金に目が眩れて終に承知する事になつた」春木ゝ聞來りて苦々しき顔をなし「何と仰有るアノ澤部忠氏が五千法の年金よ目が眩れて我が女房を離縁する、夫ほゞ魂性の賤しい男とゝ知なんだ毛「サア其お魂性の男だうら私も後々まで婿夫よして置き度くないのだ」とゝ時に取ての好き口實なり、隱居ゝ猶ほ言葉を繼ぎ「イヤ夫もサ、話し丈ゝ直に極ッたが金の點が定まらざ澤部ゝ年金より一時に十万法ゝ唯二十年の年金で安い事ゝ安いけれど一時よゝ出されぬと云ひ推問答の末終よ私の言葉よ從ひ、澤邊の死る迄年々五千法と云ふ所で承知した奈「イヤ女房を金の爲めに離縁するなど其樣な汚はしい話ゝ最う閉度くありません、夫にしても表向ゝ何を口實にして離縁しますか毛「其所よゝ又工夫があるテ離婚法律よゝ何でも所夫が他人の前で妻を打擲する時ゝ妻より離婚を申出る事が出來ると書て

ある相だ」拳「へゝエ、其條を利用して澤部が故と其妻を打擲するのですり」毛「ですかドコロでいな
い既に今朝根もない事から近子に喧嘩を吹掛け侍婢お古の見て居る前で近子の頭を打擲し出て
行けと云ふた相だ、近子ゝ其内幕を知ぬうら全く所夫の邪慳よなつた者と思ひ、今し方お古を
引連れ泣く〳〵私の家へ歸ッて來た夫だうら私が此通り相談よ來たのだ、エ春木君直に離婚の
訴へを起して貰はふ」拳「外の事なら直に引受ますが是だけゝ即答ゞ出來ません篤と考へて見た上
で重ねて返事を致しませう」毛「夫ゝ困る直に訴へを起して吳れねゞ」拳「直よと仰有るなら誰う外の
代言人よお頼みなさい、私しゝお斷りヤしません」毛「イヤお前の樣に固い事を云はれてゝ困る、
外に此樣な事を打明けて頼まれる代言人ゞないうらこそお前の許へ持て來たのでお前に斷られ
てゝ仕方ゞない、好し〳〵今直よゝ及ばぬうら後程にも返事を頼む」拳「イヤ後程と爾急な事にゝ
行ません、兎も角も私しの思案ゞ定ッた時にお返事せる事として置ませう、ですゞ全体近子さ
んを取返し貴方ゝ何とする積ですか」毛「村隱居ゝ顔に熱心の色を現はし「サア夫も亦君に聞
たい、私の目的ゝ何でも同じ自分の者を婿にしたいと思ふのだゞ、就てゝ君の書記を勤めて居
るアノ路田秀次郎ゞ何うだらうと思ッたけれどアレハ田舍の公證人う何うの息子だらう」代言
を志願する位だうら、シテ見ると私の婿よゝ身代ゞ不釣合だ、依て先づ路田ゝベケとして此頃
一人見附たゝ米國の商人で君と同じ俱樂部に入て居ると云ふ事だ、君に聞けゞ其人柄ゞ分るう
と思ふゞ拳「へゝエ、米國の商人で同じ俱樂部に居ると、名ゝ何と云ひますな」毛「鷲根鷹三と云ふ
のだ」春木ゝ此名を聞さて又愕然と驚きたり我ゝ鷲根鷹三を鳩川番作なる者と同人ならんと
見て此より彼よ目と附んと思へるに隱居ゝ又彼れを近子の所夫にせんとゝ、不思儀と云ふも餘
りあり「何うして貴方ゝ其鷲根を見込ましたな」毛「四百万からの身代だと云ふ事で私の婿よゝ丁度
好らうと思ふから」拳「併し其四百万も何うして作ッた身代だう」毛「夫ゝ確だ決して不正に得た者で
いなく天日製鹽で仕揚たと云ふ事だ、併し君ゝ、何うアノ男の身に就て惡い噂でも聞て居るの
拳「別よ聞た事も有ませんゞ第一近子さんとゝ年も違ふし」毛「ナニ違ふ者う、アノ樣よ見えても未
四十と少しだと云ふ事だうら近子にゝ似附はしい好い所夫じや、君ゞ少々異存を云ふても君も
深くアノ男を知て居る譯でないから是ゝ先づ私の一存で何うでもする、兎も角も今云ッた訴へ
の返事を早く聞して吳れ給へ、是から私ゝ鷲根の宿へ行くのだうら」と云ひ捨て春木の返事を
も待たず戸外の方へ立去りしが、直よ其後より引違へて入來る男「春木君僕ゝ最う殆ど厭にな
つて仕舞たよ」と云ひながら無遠慮よ四邊の椅子に腰掛けしゝ是なん路田秀次郎本名輕路祐秀
あり拳「厭よなつたとゝ何う云ふ譯で」祐「譯も何もあゝ兼て話た通り畫工倉田竹陰が讒訴でもした
のか宿の主人傳藏が滔々僕を疑ッて居る樣子でわつたが今朝到頭僕を追出したよ」拳「夫ゝ失敬だ
君ゝ一月分の室代を前金に拂ッてあるだらふ」祐「爾でないのサ、田舍者の積で十五日分拂ッて置
た所ろ昨日で其期限が切たうら今朝ゝ是非立て行て吳と云ふのだ今直に又向ふ十五日間の室代
を拂ふと云ッても中々承知せず最ふ既よ此家を他人よ貸渡したうら爾ゝ出來ぬと答へるのサ

夫れ困たヂエ、實れ最ふ竹陰の持て居る繪姿さへ手に入れゝば萬事皆都合好く行く所まで運んで居るうら今一應君よ骨を折て貰はねば「袖」何と云ても仕方がない殊よ竹陰れ益々僕を疑ッて今でれ廊下で逢ても口さへ交かぬ程だもの「栗田嬢れ何うした、近邊の工場の女工に化け君を尋ねて行く約束であつたじやないか「袖」夫れ最う疾くに僕から斷ッた、竹陰に疑はれた以上れ其樣な事をするだけ益々疑はれるかも知ぬと思ひ決して尋ねて來るなと云て置た、夫だうら一度も來ずサ」　左すれば彼の倉田竹陰を手に入れる工夫れ玆よ全く盡し者なり流石の春木も殆ど困却し腕拱さて考ふる所へ「春木さん大變ですく」と躍らぬばうりに此所へ入來るれ別人ならず栗田嬢なり、大變とれ何事なるや

第三十三回

栗田嬢が「大變」とれ何事なるや、春木も輕路も一樣に首を突出し「何だく」と推問へり「栗」何でもありません、先日輕路さんの話しよ聞たアノ倉田竹陰と云ふ畵工を私しが玆まで誘き出して來ましたよ、早く此間へ呼入れて委細の事をお聞なさいあ「春」何だ倉田竹陰を連て來たと「栗」爾です、竹陰が此窓の外に居ますよ、實れ今朝はや私しれ輕路さんよ逢ふ積でアノ宿屋へ行たのですよ、此通り女工の樣な姿ですうら店先の番頭も別よ氣を認めませぬ故其間に私しれ突々と三階まで登ッて行きました所ろ、第二十號室から恐しい男が出て來て路田秀次郎れ最う此家よれ居ないよと云ひますうら此奴が必定倉田竹陰だらふと思ひました、夫でれ何所へ行たでせう私しれ路田よ欺されたうら今日れ故々尋ねて來たのですがと云ひますと、何だ路田よ欺されたと其筈だ彼奴れ其筋の探偵だものとて散々に輕路さんの惡口を初めました、私しも一緒よなつて謗ッて居ますと奴さん私しと話の逢ふのを嬉び私しの身の上を聞さまそうら私しれ近邊の工場に居る女工で今得意先へ注文を取よ行く所だと云ひましたら夫れでれ己も散步がてら其邊まで一緒よ行ふと云ふのです、一緒よ行くと云はれてれ私しも少し當惑しましたが、是を幸ひ貴方の許まで連て來れゝ貴方が旨く彼れを取入れ先日輕路さんの話した繪姿を出させる事も出來やうらと思ひますが」　と手柄顏よ說諭る、春木れ今も今とて倉田竹陰を取入れる工夫に心を惱まし居たる折なれゞ「夫れ出來した早速是へ通すが好い」栗田嬢れ言葉に應じ、窓より首を出して「貴方く」と指招くに竹陰れ固より辯護人の家とれ知るに由なく、突々と入來りしが、春木れ路田秀次郎の親げに話せるを見て慇くと大方ならぬ、扨れ欺されしうと疑ふ如く栗田嬢の顏を佶と眺め「此女め、己を欺しやがッたな」　と殆ど摑み掛らん劍幕なり、春木れ笑ながら遮て「イヤ其女が君を欺した譯でない、實れお前よ折入ッて頼があるので私が其女に頼んだのだ」倉田れ餘りの意外に猶は合點の行うぬ如く殊に又怪げに路田秀次郎の顏を白眼むよぞ春木れ夫と察して「イヤ是れ私の親友で侯爵輕路祐秀と云ふ者だ」「道理で侯爵の指環を箝て居たと思ッたが、夫が又何う云ふ譯で探偵の眞似をして此倉田を欺しました」春「夫も矢張り私が惡い、私れ先日丁切眞二を辨護した春木と云ふ代言人でー倉「夫れ云はずとも分ッて居ます先日傍聽に行た時

から恐しい口の達者な人だと思ッて居ました 春「オ、爾う私を知て居れゞ猶更ら話し〻分り易い夫で私ハ飽く迄もアノ眞二と云ふ男と實の罪人で ハあるまいと思ひ其無罪を證據立て、遣たいうら此輕路君に頼み田舍者よ打扮て彼の宿屋へ入込で貰ッたのサ 倉「ジャア素徒探偵をしたのですネ 春「爾々輕路君ゞ素徒探偵よなッたのだ 倉「夫なら爾で初から私し丈にハ打明るゞ好じやありませんゥ何も私しを實の曲物と疑ッた譯じやあるまいし」と聊ゥ不滿の氣色なるハ是ハ心の正直なるゞ爲めと知る輕路ハ横合より進み出「イヤ君を欺したと云ふ譯でハないゞ固より初ての事と云ひ君ゞ正直な男だか何だか夫も分らぬうらと半分云ふを春木ハ手傳ひ「所が今ハ此上もない吾々の頼みになる人と見込だうら斯う打明て頼むのだ、何うな君、罪のない丁切眞二を死刑場から救ふ爲に君も一廉の力を假て呉れぬか 倉「イヤ探偵なゞ云ふ事ハ生れ附虫が好ぬうら先づ御免蒙りませう 春「ナニ爾でハない、眞二を罪に落し却ッて實の罪人を逃したのハ其筋の探偵の失策だうら詰り吾々ハ探偵の裏を書て遣るのだ探偵の過ちを示し彼等の鼻を明かして遣るのだ 倉「成るほゞ夫なら又一つ考へ者だ、フム探偵を困らせるのか面白い事ハ面白いが、何うして能いか夫も僕ハ分らぬうら」と早や今までの恨みを忘れ、全く打解けての言樣なれゞ、春木ハ弦ぞと附入て「ナニ夫も六ケしい事でハない、君が二月二十八日よ長兵衛を尋ねて來た客の姿を寫して居ると云ふ事だが其繪姿さへ見せて呉れ〳〵ゞ夫を證據にして、後ハ私が旨く運ぶのサ 倉「唯夫だけの事ですか、夫なら何も譯ハない、手帳の端へ寫した儘、今弦に持て居るうら見せませう」と云ひつゝ心よく其手帳を取出せり

第三十四回

倉田竹陰ハ手帳を開き「此れです」と指示す、春木ハ輕路祐秀と共に受取りて撿たむるよ唯是れ一筆の走り書にて僅に漠然たる外形を寫せるのみ固より證據として裁判所よ出すに足らず又之を見て何人なるやを知るよも足らず、春木ハ私よ失望し「お前が繪姿と云はれるのハ此な物か是でハ誰だゥ分らぬじやないゥ」 竹陰ハ不滿氣に「だうら素徒に見せるハ厭だと云ふのだ、此外形線の取方が旨いのに其旨い味が分らず密畫の外に肖像ハない樣に思ッて居る、エ貴方よハ此筆力が分りませんゥ、此活て居る筆少なに書上た所ハ如何よも輕妙だゞ、私の目的ハ此繪を原物と引較べ都合に由てハ裁判官に迄も見せる積だうら筆力なぜハ何うでも好い唯素徒の目に、成るほゞ此人だと分れゞ好のだ 倉「貴方ハ爾でもあらうゞ僕ハ人に頼まれて寫したのでなく唯だ自分の腕前を樂しむため よ描たのだうら筆力だけを見せてあるのだ、貴方ハ筆力なぞ何うでも好と云ふけれゞ筆に力がなくて畫像ゞ出來ますゥ、仮令ひ原物よ似たにもせよ筆力ゞなけれゞ死繪です、私しハ死繪などハ書きません、其代り御覽なさい是だけの外形線ゞ取れて居れゞ此上、筆の加へ樣一つで此繪ゞ活て來ますうら、サ御覽なさい此通です」と云ひつゝ鉛筆を取出し一寸〳〵と其所此所よ線を入れ荒增の陰陽を附け終るよ、不思儀や畫龍點眼の筆法とも云ふべきゥ今まで何とも分らざりし外

形線い實よ活て動く如き人物畵となり宛然として彼の鷲根鷹三を現はし來れり、春木い餘りの事に驚きて「是い妙、實に妙」と叫びし儘、暫しい祐秀の顏を見詰るのみなりしが「何うだ輕路君、彼奴だぜ、祐な成るほど彼奴だ」春木い更よ竹陰に打向ひ「此繪を私が買受やう」倉「嘘にも爾まで賞て呉れるい有難い、ナニ金などい要ぬうら貴方に上て置きませう」傍に在る栗田孃い獨り心の中にて「是だうら此畵工い此樣に貧乏するのだ」と呟くめり倉「是が確よ長兵衛を尋ねて來た男だうら是を裁判所へ持出せば主人傳藏い必ず僞りを言立た罪に落されるだらう、彼奴中々の惡人だうら痛い目に合されるが好いのだ」春「私の考へでい何でも此繪の原物が本統の曲者で主人も夫を知て居るけれど金を貰ッて默ッて居るのだ」倉「サア、金を貰ったのう夫とも自分獨で丸取にして居るのう、何しろ最う油斷い出來ません彼奴既よ高飛をする積りでアノ家まで賣て仕舞い愈々此週間に買主へ引渡すと云て居ます、何でも早くせねば間よ合ひません」春「夫い最う大丈夫、直に私い夫々の手續きを運ぶうら、併し何より大事の證據と云ふい長兵衛の持て居た百万法の大金だ、其大金を抑へぬ事にい愈々誰の仕業と云ふ事い出來ぬ、果してお前の云ふ通り傳藏が丸取よしたとならば彼れ其金を何處へ隱してあるのだらう倉田さんお前の鑑定でい何處と思ふ」倉田い智慧を絞りながら「左樣サ、彼が寐起するい、天井裏の室ですが其室よい別に物を隱せ樣な所もないうら小說にでもある樣よ、壁の隅へ塗込だり、左なくば必ず穴倉の中だらう」春「成るほど爾だ、穴倉か何所かだらう、と云ふて私が行て穴倉の中を探す譯にい行かず、お前の方よ何か工夫いあるまいか」倉「左樣サ彼奴既に充分僕を燻がッて居るのだうら此上僕が穴倉へでも入込む所を見附れば必ず其日限り追出すにい違ひあいが、ナニ搆ふ者か輕路さんが手傳てさへ呉れば隨分工夫がないでもない」と輕路の方を眺むるに輕路も今い一步を讓らず「手傳ふとも共々に探さうでいないか」倉「好し〳〵面白いじやア斯しやう君の荷物が未二十一號室に殘ッて居るだらう、君が明日の晝頃に其荷物を取りよ來たまへ、主人い毎日晝頃にい必ず何所へか出て往ッて十二時過一時頃でなくッていい歸らぬうら」春「夫い必ず相棒の所へ相談よ行くのだら」倉「左樣、多分其な事でもあらうと思ふが、先づ明日の十二時頃に輕路君が辻馬車を雇ひ之よ乘て遣て來れば僕が戶口に待て居るサ、夫で番頭が荷物を取に三階へ登るよい相違ないうら其間よ僕が穴倉へ降て行ふ、僕い度々酒を盜みに穴倉へ這入たうら錠前の具合まで知て居る、夫で穴倉へ這入た上、愈々大金を隱してあるか否やを突留て出て來るから」と早や落も無く其工夫を定めたれば、春木い之を勵して「お前い仲々感心だ、夫でい愈々輕路君が十二時を合圖よ尋ねて行くから萬事宜しく仕果せて、其結果を私まで知せて貰はふ、私い午後の三時まで茲に待て居るのだから、其結果に由り又其後の手筈を相談するサ」と是にて萬事思ふ樣に定まりたれば輕路も倉田も栗田孃も明日を約して立去りたり明日の十二時過、果して倉田竹陰の思ふ如く運ぶや如何に

第三十五回

「明日の十二時」とい是れ倉田竹陰が宿屋の穴倉を詮索せんと輕路祐秀よ約束したる時刻にして大波瀾の起り來るも亦其刻限ならん、去れど明日の十二時迄よい猶は幾許の時間あり幾許の話頭あり、茲よい先づ鷲根鷹三の事より記さん　輕路祐秀倉田竹陰等が春木辯護人の家よ於て切に相談を凝せしと同じ時頃の事なるが彼の鷲根鷹三い大旅館の一室に在り、倶樂部へ行くよい猶は時刻も早く、去れがとて別よ是と云ふ用事もなければ、知友の許でも尋ねんうと衣嚢より人名帳を取出し一枚〳〵開き行きつゝ、遂よ其目を留たるい毛村隱居の名前なり、爾だ是から隱居の許を尋ね、今一應先日の事を相談しやうう」と呟けり、彼れ如何にして毛村隱居と懇意よなりしぞ又其の先日の事とい何事なるや、彼れ米國を出る時、或人より幾通の紹介狀を貰ひし中に毛村隱居よ宛たる一通のありしより直ちよ尋ね行きたるに類い友呼ぶ譬に洩さ二人とも慾に目のなき同士よて互よ話の合ふ所より往きつ通ひつする中よ隱居い鷲根が數百万の身代ある事を知り鷲根も亦隱居の身代我に劣らぬを勘附て懇意い一層の深きを加へ終よい近子を澤部氏より離縁して妻に送らん迎へんと容易ならぬ相談まで運びしが、妻を迎ふる事となりてい宿屋住居も不都合なれば手輕く買受くべき家作いなきやと相談せし所ろ隱居い我が家作中よ然るべき者ありとて讓渡す事にまで話を極しも扨代價の一點に至り隱居い安しとて附上り鷲根い高しとて直切下げ、相談中々に纏まらず、然らば重ねての事にせんとて其日立分れたる儘今日まで隱居の顔を見ぬよ由り扨こそ鷲根い是より隱居を尋て行き再び直段の事を相談せんうと思へるなり、彼れが呟き終りし頃靜よ入口の戸を開きて入來る者こそあれ、鷲根い足音を聞くが否や恰も惡事を認められし如く周章て手帳を閉ぢ衣嚢に納め椅子の儘、よ振向けば、是も同じ年輩の商人と見受らる「ヤア此室だッた、君が此家よ泊ッて居ると聞き今朝から方々の室を見廻ッて居たが」と云ひながら鷲根の傍に進み來れり鷲根い少し不機嫌の顔にて「君い何時米國から遣て來た」商「僕か、僕い一昨日此家へ着たが直に此隣の室を借て居るよ、聞けば大戸長兵衛が殺されて其組合であつた丁切眞二が下手人よ極ッたと云ふ事じやないか」鷲根い何所までも餘所〳〵しく「爾サ新聞紙で見れば其樣な噂だが　商人「噂ぞころか君い長兵衛と一緒の船で來たでいないか　鷲「ナニ紐育で彼れに逢ひ一緒よ乘る約束をしたけれど都合があつて僕い一船後れたよ　商人「夫にしても君い何故默ッて居るのだ、裁判所でい丁切眞二の身の上が分らぬ爲め非常に詮議をしたと云ふが君い桑港でアノ男を知て居ながら何故其筋へ言て出なんだ　鷲「馬鹿な事を言たまへ、言て出たとて死だ長兵衛が返生るでいなし、僕い裁判所の證人よなる積りで此國へ來たのじやない、詰り保養の爲めだうら其樣な面倒臭い事にい成るべく遠ざかつて居るのサ、君も矢張遊びよ來たのだらう　商「勿論サ　鷲「夫なら自分の身よ關係のない裁判などに口を出し給ふな、佛國と云ふ國い探偵で滿て居るうら一寸と其筋で疑はれゝば絶えず探偵よ尾けられるぜ　商「爾かなア、夫い嘸蠅いなア　鷲「だうら僕などい裁判の傍聽にも行かなんだ、何でも掛合などよせられぬ用心が肝腎さ」と言葉巧に言繕へば商人い感心せし樣子よて「ジャア鳩川君、又晩にでも弛々逢ふ事よしや

う僕ゝ是から買物ゟ出るのだらら」と挨拶して立去らんとするゟ鷲根ゝ之を引留めて「待たゟへ、言ふて置く事がある、僕ゝ米國でこそ鳩川番作と名乗て居たが此國でゝ鷲根鷹三と云ふ幼名でなけれゞ分らぬらら此後ゝ鷲根鷹三と呼で呉れたまへ」商「成るほど君ゝ此國で生れたと云たッけ子、幼名ゞ鷲根鷹三ゥ、道理で今朝も給仕ゟ向ひ鳩川番作と云ふ人ゝ何號室に居るゥと尋ねたけれど給仕ゝ其樣な人ゝ知らぬと云ッたよ、好し〳〵此後ゝ鷲根と云はふ、鷲も鳩も矢張り鳥だゥら同じ事さ」と笑ひながら立去れり、鷲根ゝ口の内にて「ヱ、詰らぬ奴ゞ來た者だ」と獨語ちしゞ此時又も引違へて入來る男あり四邊をキロヨ〳〵と見廻しながら進み來り無遠慮ゟも鷲根ゞ傍なる椅子を取り慣々しく腰を卸せり、鷲根ゝ横目に之を白眼て「當分尋ねて來るなと言て有るのゟ、何しゟ來た」男ゝ別に臆する色もなく「夫は知て居るけれど話さねゞならぬ事が出來たので」鷲「フム、何か意外な事でも出來たのか」男「出來たとも、警察で痛く目を附け此十五日前から僕の家へ探偵を泊り込せて有るから僕ゝ最う厭になつて仕舞たよ、今朝ヤッとの事で其探偵を追出しはしたけれど最う此國で宿屋なぞゝる氣ゝない、幸ひ家だけゝ買人が有から明日此巴里を立ち外國へ旅行しやうと思つて」鷲「ナニ旅行、ジャア大分旅費が出來たと見えるな」男「少しばかりだが家を賣た代金が五千法あるのさ」鷲「夫だけじや何所までも行れぬ筈」男「でも仕方がない、途中で餓死でも茲に居て探偵に尾けられるより安樂だ」鷲根ゝ男の顏を佶と見詰て「ヘン、此鷲根を馬鹿ゟ仕給ふな、僕の白眼だ目ゝ確だよ」男ゝ更に合點の行かぬ樣子にて「何だと何を君が白眼のだ」とぼけてゝ了ないよ五千法しか持て居ぬッて、他人ゝ信にするかも知れぬが、此鷹三ゝ其手ゝ食はぬ」と已が名の鷹よりも鋭き眼を見開きたり、抑も此男ゝ誰なるや彼のチケントゝ街の宿屋の主人傳藏なりとゝ讀者既に推せしならん

第三十六回

宿屋の主人傳藏ゝ家を賣りたる五千法の外に金なしと云ひ鷲根鷹三ゝあると云ひ、爭ひ益々熾上らんとす、傳藏ゝ言葉ゟ一入の力を入れ、僕がないと云ふのゟ夫を虚とゝ合點が行うぬ夫ほどに言張るなら僕の家へ行て會計帳を撿めるゞ好い」鷲「ナニ會計帳へ附て置く樣な天下晴ての金子なら他人の僕が彼是云はぬ、是れ傳藏君、蛇の道ゝ蛇だゼ、三月前に僕の世話で送ッて遣たアノ米國人大戸長兵衛の大金を何所へ遣た」傳藏ゝギクと慄き「何だ、長兵衛の大金を、是ゝ可笑い僕が盜んだ譯でゝあし」鷲「面白い、君でなけれゞ誰が盜んだ」傳「誰が盜んだもないもんだ、自分が能く知て居る癖に」鷲「何だ僕が知て居ると、じやア僕が取たと云れるのゥ」傳「ナニ爾でゝない先日死刑ゟ處せられた丁切眞二が取たのさ、取たらら罪ゟ落たじやないゥ」鷲「君ゝ又馬鹿を云ふ若し丁切眞二が取たなら彼奴捕縛された時に其金と持て居る筈だらう警察官が其場で彼の身体を撿めた時、彼が衣襞の中に唯百六十法の小遣錢しうなゥッたのゝ隱れもない事拵だ、彼れだとて百万法ゥらの銀行札を其場で食て仕舞ふ事ゝ出來まい」傳「出來るゥ出來ぬゥ彼に問ふて見るゞ能い」と中々屈する景色も見えぬ鷲根ゝ更に開き直り「コレ傳藏君、强情を張り給ふな、僕の舌

一枚で君い命のない人だゼ僕を敵に取るい不爲だらう「と又何の事だ僕にい更よ分らぬが」驚「ヨシ〳〵分らぬなら云て聞さう、好ク工、長兵衛が廿八日の夜歸ッて來た時に提革包を肩に掛け之に銀行うら取受た百万法を入て居た、君い其時早や寐て居たうら知なんだと裁判所で言立たけれゞ夫が嘘サ、君の寐間い天井裏で、三階の突當にある長兵衛の室を一目に見通して居る、君い長兵衛が大金を持て歸たのを見濟して夜中よ徐々忍で行たのだ、アノ大金を君でなくて誰が盜む「誰だッて盜むのサ、僕より外に番頭も居れゞ客も居る夫を僕と限るのが可笑しいよ」驚「ナニ人、君だうら君と限るのサ」傳「是い可笑い、益々可笑い、默ッて聞て居れゞ君の樣な人い長兵衛を殺した罪まで終よい僕に被せるかも知れないよ」驚「被せるのい無論の事さ實際君が殺したのだもの、證據を見せろと云へゞ立派な證據を見せて遣る、夫もナニ君よい見ぬよ爾なれゞ君い僕の敵だうら僕い直に裁判官よ見せて遣る」と益々攻入る驚根の言葉に傳藏い顏色を變ながらも猶は逃れんとする如く「フム僕を裁判所へ訴へれゞ君も同じく罪に問れる」驚「是い面白い僕がナゼ罪に問れる、僕が長兵衛を君の家へ泊らせた爲にうヲ、冗談云ちやア了ないよ僕い君と數年來懇意だうら是まで米國の人を君の家へ向て遣た事い幾度もある、殊に長兵衛い此巴里へ初てゆゑ安い宿を世話して呉れと僕よ賴たんだうら僕い又君が長兵衛を殺すとい思ひも寄らず夫でいチケトン街の傳藏の家が好と敎へたのサ、夫からハブル港で分れる時、明日い晝過に銀行へ行くけれど是も不慣だうら同道して呉との賴であつた、だうら二十八日の晝過に歸ねて行き

銀行の入口まで連て行ッて、其歸に英國茶店で一緒に晩餐して分れたのサ其時明朝い僕の宿まで尋ねて來ると云たうら、來る事だらうと待て居るうち新聞紙を讀で見ると昨夜是々と書てあッた僕い裁判所なゞへ呼出さるゝが嫌ひだうら控へて居たのだ「餘り控へても居なんだせ、裁判の濟だ次の晩に直僕の所へ來て色々僕を威してサ」驚「ナニ威す者うヽ、事に寄ると其筋で疑ッて君よ見張を附るうも知ぬうら用心しろと云た丈さ」傳「其上猶は僕の家へ探偵を入込せたのも君だらう、今朝逐出した探偵も今迄い其筋の奴と思ッたゞ實い君の仕業に違ひない」驚「誰の仕業でも其な事い問ふよ及ばぬ、僕い此通りの次第だうら君ゞ裁判所で何の樣な事を言立ても僕を同類の罪に落す事い決して出來ぬ、成るほど今まで知ぬ顏で控へて居た廉い幾分うヽ叱られも仕やうけれゞ未丁切眞二ゞ生て居る中だうら僕い唯言立が少し後れたと云ふ丈の事で何の罪よもなりいせぬ、今僕ゞ裁判官に大切の證據を見せ眞の罪人い丁切眞二でなくて君だと云ふ事が分れゞ隨分變な者だらう、エ君、强情い好い加減に止したまへ」と宛も醫者ゞ激藥を用ふる如く一滴〳〵用心して恐しき言葉を用ひ徐々と威し掛るに傳藏も次第に恐を催し「しやア君詰る所何うすれゞ好のだ」傳「知れた事さ差引勘定をして仕舞ふのさ」驚「勘定とい何の事だ」驚「ヘン、素徒を言給ふな勘定の分らぬ君でもあるまい長兵衛から奪つて有る百万法の半分を口留として僕に寄越すのサ傳藏い恐るゝ中にも驚きの目を見開き「デハ君、僕を强談るのだな」驚「强談るの何のと人聞の惡い高い聲を出し給ふな、强談のじやない、是から先

先獄ツて居て造る其禮金を呉れと云ふのだ、ヤッパリ強談のも同じ事だ、並な事い何うでも好い、僕が一言口を開けば君い命の無い人だよ命を買取るか夫とも金の惜さよ裁判所へ引出され首切臺へ載られるか二つに一つと云ふ場合だ君を殺すが可愛相だから金で命を買戻さうと、信切な相談だ、夫を強談と云ふ恩知ずの言分だらう」と慘酷極まる論法に說伏られ今い逃れんにも其道なし、傳藏い稍や暫し默然として考ふるのみなりしが、彼れ又惡人だけよ思ひ切も好しと見ゑ忽ち其首を上げ「分ッた、明日の晝頃僕の家へ來て呉れ給へ其時差引勘定しやう晝頃なら客も皆出て仕舞い僕獨りで留守番も同じ事だ、尤も今朝追出した君の探偵が未荷物を殘してあるうら事よ由れば取に來るうも知れぬけれど、來たとて君だうら搆はぬだらう」鷲根い今まで傳藏を威す間い宛も自ら探偵を入込ませし如く見せ掛け居たるも今い其必要なく返ツて彼れが探偵〳〵と云ふ言葉氣よ掛れば「何だと僕の探偵、何の樣な奴だ」問ずとも君い知て居るじやないか、僕が高飛して大變だうら見張せる爲よ路田秀次郎と云ふ奴を寄越した癖に」路田い即ち輕路と云ふ鷲根如何でか悟り得ん先頃傳藏の家の出口よて逢し事い逢たれど彼急ぎたる折なれば輕路に己が顏を認められながら輕路の顏を認め得ざりしなり、去れば彼れ傳藏の言葉を聞き扨い我より外に傳藏よ目を附くる者ありしか、其誰なるい推し得ざれど孰れにしろ油斷し難しと早くも心を決せしかば「兎よ角、是で話い極た、明日の十二時頃必ず受取りに行くに依り其積りで待て居たまへ」と是にて傳藏を歸したり、輕路が倉田に逢はんと云ひしも同じく明日の十二時なり、明日の十二時い如何あらん

第三十七回

強談に強談て餌物山分の相談をなし傳藏を歸して宿を出たり、彼れ初に思案を定めし如く是より毛村隱居にて顏と顏合せたれば兩方齊く擊を發に半町も行きし頃、向ふより來掛るい恰も好し毛村隱居にて「好い所で逢た「好い所で「君を尋ねて行く所だし「僕も矢張り其通りだ、公園の方へ散步しながら話を仕やう」と連立て步みながら鷲根い最少し代價が負るだらう」と茲よ話の端を開くよ隱居い應ずる景色もなく「イヤ其前よ話がある、今日實い春木辯護人に逢ひ色々と聞て見たが春木い君の事を好く云はぬぜ」鷲根い少し驚きて「何だ春木り、夫い不思議だ僕い成るほど同じ俱樂部よい居るけれど春木よ惡く云はれる筈れない、第一春木が何の樣な事を云ふた「君い俱樂部で博奕を打つッて鷲博奕を打つ位い仔細ない何も博奕の爲め身代を損するでいなし既に此二週間に五万法せで勝たのだもの」隱居い茲ぞと取て押へ「夫ほど勝たら何も家の直を直切るに及ばぬ其五万法で買玉へ」と云ふ又如才なき云樣なり、此方も中々負ていい居せ「買も仕やうが夫より先に婚禮の一條を極ねバならぬ、僕一人で暮すなら宿屋住居が安樂だうら家い入らぬ、必竟君の娘と婚禮するに付て出た話だうら婚禮の一條を先極ねバ一多分春木が僕の事を惡く言たので君い厭みでもなッたのだらう「衛でいないが、博奕よ五万法勝ながら

五万法の家を直切る様でゝ餘り水臭いから出來るも出來ぬも家次第さ、サア買ふ買ぬか夫ら先極たまへ、でゝ家さへ買へゞ婚禮ゝ無論整ふと云ふのだね」　隱居ゞ何う返事せんとする折しも横町より驅來り二人を追拔さて公園地よ輾り込む一輛の馬車こそあれ、其塗栗色にして最目に立つゝ孰れ紳士の保護を受けて流行社會に交れる美人の車と察せらる、隱居ゝ之を見て返事も忘れ「アレ栗田孃ゞ〳〵」と云ひながら夢中よなりて其後を追掛んとす驚根ゝ怪んで引留つゝ「何だよ君、年よも恥ぢず、女の後追ふのゝ見ともないよ」　隱居ゝ容易に承知せず「イヤ年も何もあい、アレゝ僕が拵へて遣た馬車だ、今日僕が乘初をして遣る約束ゆゑ、今尋ねて行たらとのやくそく其約束に背き何所へか出て居ないのだ、夫だら僕ゝ君の所へ尋ねて行く所だッたが、僕を出抜き唯一人乘て來るとゝ許して置かれぬ」と益々怒り狂はんとす抑も栗田孃が何故大事の保護者と出抜き獨り新調の馬車に乘來りしやと問ふよ孃ゝ今朝我が手柄にて倉田竹陰を春木の家まで誘き込み充分ある働きをなしたれゞ歡びながら我家よ歸りし所、丁度馬車屋より馬車を送り來たる所なりしゞ嬉しさの餘り隱居との約束さへ打忘れ是れ見よがしよ乘來りし者ならん　驚だッて君、幾等追掛たとて無益だよ最うソレ公園地を半分廻ッて此方の方へ又返ッて來るぢやないか他分横手の出口を出て又何所かへ行く積だらふソレ〳〵見給へ向ふうら馬に乘て來た若い紳士と、ソレ身体を横の方へ突出して親しげに話して居るソレ車を留た、餘ほど親密な仲と見える」

如何にも驚根の云ふ如く栗田孃ゝ馬車より首を出し馬の上なる若紳士と談話せり隱居ゝ此有樣を見て驚根の手を引しまゝ足を早めてソク〳〵と驅行くにぞ驚根ゝ「待たまへ〳〵、行くなら僕の手を放し君獨りで行きたまへ」と云へども絶て耳よゝ入らず、凡そ半町ばかりも歩みて漸く馬車に近けゞ隱居ゝ紳士の顏を認め殆ど呆氣よ取れし如くアッと云ッて立留れり　驚

何うしたのだ、エ君何を其樣よ驚いた　毛「驚いたも何もない君アノ馬上の野郎を何と思ふアレゝ代言人の書記生だゼ書記の癖よ紳士の風をし女よ戯むれるとゝ失敬な奴だ、僕が其主人に言附け今夜の内よ放逐して遣る」　驚根ゝ紳士の顏を見て隱居よ向ひ「君ゝ夢でも見たのゝアレゝ我々と同じ倶樂部員だ主人の書記のと其樣な賤い身分の者でゝない、侯爵だよ輕路祐秀と云ふ立派な紳士だよ」毛「ナニ爾でない春木の書記だ路田秀次郎と云ふ名前まで僕ゝ確よ春木に聞た、其上先夜も彼奴がチケトン街から此方へ來た所の下等料理屋で汚い姿をして酒を呑んで居る所を僕は確よ見認めて置た」と猶噴喝て止まず、驚根ゝ路田秀次郎の名を聞きて忽ち思ひ附く所あり先刻彼の傳藏ゞ追出したる探偵を確になぜよなるべしとゝ思はれねど彼れゝ春木の親友にて春木ゝ丁切眞二を辯護したる當人なり若しも其心の中よて外に實の罪人あるを察し輕路と言合せて探偵せる者にゝあらぬうと、流石ゝ惡人の本性だけ早くも事細ゝに察したれゞ最早や油斷すべき時ならずと心に何事をゝ含きつゝ「毛村君、僕ゝ少し思ひ出した用事がある殘念だが又逢はふ」と言捨て立去れゞ隱居ゝ之に氣も留めず馬車を目掛けて一散よ駈行きしも此時馬車ゝ右、輕路ゝ左よ、立分れて馳去りたれゞ隱居

ん何處まで追行きしや知らず、扨彼の鷲根鷹三ん何事を含きて何の所に立去りしぞ

第三十八回

惡事に掛けてん一を聞きて十を知るの奸智ある鷲根鷹三の事なれバ輕路祐秀が路田秀次郎と云ふ僞名を用ふる事を聞き早くも彼れが春木と共よ實の罪人を捜しつゝある事を知れり、去るよても春木と輕路ん如何程まで探り得たるや、宿屋の主人傳藏を疑ひて我れと傳藏と懇意ある事までも探り得たりと爲らバ我れん中々油斷すべきよ非ず、孰れにしろ春木に逢ひ夫となく彼の心を引くに如かずと大膽にも分別を定めたれバ毛村隱居と分れたる其足にて直よ倶樂部を指して行けり、通例の人ならんよん我身の既よ危きを恐れ反て春木に逃隱るゝ所なれど彼れん既に惡事よ慣れて度胸まで固れるなり一走り倶樂部に就き大廣間に進み入れバ數名の紳士ストーヴの前に集り、手帳の如き品物を手から手に渡しつゝ熱心に話せり甲「實に生寫しだよ誰だゝ知ぬが何うも能く描いた者だ」乙「ナニ生寫しと云ふ程でゝない、肖てん居るけれど餘り粗末の描方だから」と銘々よ評する聲、耳よ入るよゞ鷲根ん何心なく其方を振向きしよ此一群の中心に立ん擬ふ方なき春水辯護人なり、是幸ひと思ひながら突々と近寄り行くに紳士の一人ん早くも鷲根の姿を見認め「ソレ原物が遣て來たゝら篤と引較べて見るが好い、肖たの肖ぬのと水掛論をするに及ばぬ」と云へバ又一人ん「噂すれバ影とやらだと打笑へり、扨ん我が寫眞でも評し居るにやと思ひ故と笑顏を浮べつゝ「諸君ん僕の噂か」甲「爾サ、今春木君が手何だか譯の分らぬ澤

を出して是れゝ誰に似て居ると問から、銘々よ評して居るのサ 舅ハ、ア僕ゝ寫眞や油繪を取た事ゝないゝら僕の知らぬ間よでも寫したのゝなと云へゞ毎も驚根よ負さるゝ、一人喇けりて「君なぞゝ常よ女の子から寫眞の無心を言れる方で隨分取た事がある筈だが舅イヤ實際ゝ諸君の談む程でもないテ、併しドレ僕に見せ給へ」とて憶する色なく手を延べたり、去れど其心の中にゝ既よ春木が發頭人と聞き尋常ならじと思ひしならん、春木も左わらぬ体にて「實ゝ今道で此手帳を拾ッたが警察へ届ける所だけれど若し宿所でも書てあるゝと其中を開いて見ると此通りの書があつたゝら諸君の笑種にと其儘茲へ持て來たのサ」驚根ゝ受取りて一目見るよ個ゝ抑も如何に鼻の高く突出たる所より眼の落込みたる具合と云ひ顋の下の短さ髯より口の上なる乏しき八の字、耳の邊よ縮れたる揉上に至る迄肖たと云ふ愚か宛然たる我が寫眞なり何人の筆かゝ知ねに肖像畫專門の人を雇ひ故々描かせし者ならざゞ斯く迄も好く寫し得まじ、驚く色を推隱て「成るほど似てゝ居るゝも知れぬが僕じやあるまいニ是ゝ冬服だらふ甲「夫とも人よ顏を見らるゝゞが厭さよ故と襟の深い服を着けたが何でも此少し仰向て兩手を衣袋よ入て居た所ゝ隨分險呑な人と見える僕ゝ此樣な人と夜なぞ一緒に行くゝ恐しいよ」驚根ゝ又も打笑ひ「でゝ益々僕でゝないぜ遣る時ゝ丸で熊鷹の樣な目だ」と云ひ其中よ又一人ゝ「サア〳〵諸君是だけ連中が揃へゞ何もグズ〳〵する事ゝない直に行て戰はふ」是號令の下るや否一同ゝ面白くもなき繪の評讃よ

時を捨るい馬鹿〳〵しと思ひし如く先を爭ひて歌牌室になだれ込み、後よ殘りしい各々胸よ一物ある春木と鷲根の二人のみなり抑も春木が何故倶樂部よ來り彼の繪姿を示し居たるやと云ふよ彼れい繪姿を充分なる證據よせんと思へる故夫となく此事件よ關係のなき人に示して誰が目にも鷲根廳三と見ゆるや否を試さん爲なり、鷲根い何時の間よ我繪姿を人よ寫されしや更よ覺へなけれど是にて春木が意外にも詳しき邊まで手の屆き居るを察したれば猶は其心中を見拔んと殊故よ打解けたる風を見せ「是だゝら巴里はゞ面白い所いないと云ふのですヨヽ、何うも時時不思儀な事があるので、既に先刻も毛村隱居と一緒に歩て居たら隱居い輕路祐秀君を見て何うしても貴方の書記で路田秀次郎だと云ふので其譯を聞くと確よ貴方が爾云ッて紹介したと云ひましたゞ」と云掛て返事を待つ如く春木の顔を眺むるにぞ春木も實い悸ッとしたれど「夫いナニ詰らぬ事で私しゞアノ隱居を欺したのです」と先の夜外國館よて初て輕路を隱居よ引合せし時の次第を有の儘よ告知す、春木も中々の老練家なり鷲ハヽア爾ですゝ、アノ隱居い夫を眞に受けて色々な事を言て居ました」春木い是よて話を切り立去んうと思ひたれど、斯く顔と顔合せし上よて彼れゞ愈々鳩川番作なるや否を確めぬも殘念と思ひ「ですゞ僞名を用ふるのい隨分ありがちの事で現に貴方も桑港に居る頃い鳩川番作と仰有た爾ですゞ」ヲヽ斯る秘密を誰ゝ知るべき、既よ是まで知れる上い最早や少しも油斷い出來ず、爾せんうと斯せんうと鷲根腹中非常よ驅ぎながらも上部のみ最落着けて「左樣サ初て米國へ行た頃、丁度佛國人の評判ゞ極惡くて佛國の者と云へゞ殆ど取引よも差支へる程でしたゝら、佛國人と思はれぬやう鳩川番作と云ふ出任せの名を附て居ました」と聞くうちよも春木い鋭き眼よ鷲根の心の安からぬを見て取たれゞ異ある事を問ひたりと自ら頻よ後悔せり、唯短き一言の問あれど鷲根い既よ春木ゞ我身の上を細々よ調べたる者と察したれば是より二言三言、意味もなき事を話せし末、用事を思ひ出せし体にて倶樂部を出て孰れへゝ立去りたり、取返されぬ失策なりとい後よ至て知り得べし

第三十九回

話又更る、茲に輕路祐秀ハ「明日の十二時を」約して倉田竹陰よ分れてより直よ我家へ歸りしが最愛の勝子の爲とハ云へ今まで十五日の間、身に叶はぬ服を着け見苦しき田舍者よ打扮しのみならず、いぶせき宿屋よ起臥して樣々と心を勞せしより我身にして我身よあらぬ如き心地せられ何となく不愉快なるより今日半日の暇を幸ひ日頃嗜める馬よ乘り快く公園地を散步せんとて鞍の上よ跨りて悠々とカンプ、エリシーと云へる所に出たるに茲にて又もや栗田孃よ逢ひたれゞ馬車と馬乘にて暫しゞ閒話したるも折柄毛村隱居の嫉ましげよ馳來るを見たれゞ、追附れて面倒ありと其儘馬の首を左よ向け孃に分れて公園地を立出しゞ、是より孰れよ行かんうと思案も未だ定まらぬよ早やくも心よ浮び來るハ勝子が事ゝり初て伯母なる男爵夫人よ連られて勝子の慈善工場を訪ひし時より今日まで十五日の間、丁切眞二の事を名として幾度も孃が許を訪

ひ訪ふ度よ成るべく面會の時間を長くし話の間に嬢の心を探るよ落花情あり流水豈よ意ならん、嬢も我意を察したる如くなれバ今の中よ早く婚禮の事を申込み夫婦の約束をなすよ如かぜ左もなき中よ萬が一、惡き噂でも立られなバ嬢も慈善工場を監督する身の世間体よ對しても我れと面會を謝絶せねバ叶はぬ事となり我も亦紳士の作法として嬢の許を訪ひ難き事とならん、大事を目前に控へたる眞際なれぜ今此事を果さずバ益々好き折を得難からんと心のみい決したれぜ婚禮い生涯に一度の大役なり粗忽よして事を破らバ取返しの道もなけれバ何とぜ然るべき人を頼み我爲よ計はせん、否々人を頼めバ表立ちて容易に運ばぬ事とならん兎せん角せんと思ひ案じつ、行くともなしに公園の外を一周してマドリッドと云へる往來稀なる町よ出たり、此時向ふより徐々と進み來る一輛の馬車あるよバ輕路い乘れる人の誰なるやを見向もせぜ、手綱を引きて避けんとするよ馬車の中より婦人の聲にて「何だ子お前い、何を其樣よ考へて居るのだ」と云はれて輕路い驚きて顏を揚れバ今しも心よ思ひたる我伯母の男爵夫人なれバ是こそ我が爲よ屈竟の媒介なれと早速よ思ひ定め「ア、伯母さんでゼか好い所でお目よ掛りました少し秘密の内相談がありますうら暫し馬車うら降て下さい」と云ひつゝ己れ先づ馬より下れバ「私とお前なら相乘しても他人の嫉む事いあるまい、馬の口を私しの馬丁に持せて此中へ乘るが好らう」でい爾う致しませうう」とて祐秀い伯母の傍に乘り移りぬ「何時になくお前が眞面目よなツて賴みとい氣味が惡いよ、眞逆お金の相談でもある舞ひが」「イヱ其樣な冗談とい事が違ひま

す、實い婚姻しやうと思ひますが」夫人い殆ど顏色の變るほぜよ打驚き「何だとヱ、婚姻するッて夫いお前是までも私しが度々勸める通りだうら婚姻い此上もない好事た私しも及ぶ丈い骨を折るが、でもお前例の栗田嬢とでいあるまい子、彼の女を最負よする位い大目にも見て置ふが迚も細君よい出來ないよ今も公園地の柵の外で五十餘りの恐しげな老人よ捕まッて馬車の上から頻と言爭つて居る女があるうら誰かと見れバ栗田嬢サ、何の事か知ぬが老人い多分日頃から最負を受る旦那だらう、己の作ッて遣た馬車に乘り勝手氣儘よ好た男と散歩する最う堪忍がならぬとか何とか云て大層な騷ぎであつたが私しい餘り人立がするうら知らぬ振で通り越して來た」「扨い栗田嬢彼の毛村隱居に捉まりて人込の中よて爭ひ居たるうと祐秀い可笑けれぜも心よ留めず「決して栗田嬢なぜの樣な賤い女でいありません」「でい誰だヱ夫を先へ聞て置かねバ」「先ハ貴方に連られてベルト街の慈善工場へ行たでせう」と半分云はせず夫人い合點し「アヽ彼の時に逢た美人か、アレい無益だよお前い未知まいけれぜ歷さとした所夫がある」「ヱヽ所夫がありますか」夫「あるとも子、先達ての裁判の時、撿察官をした澤部忠と云ふのがアノ美人の亭主だとよ」祐秀い漸く安心し「ナニ彼の女でいありません慈善工場の主人です村井勝子嬢です」今度い夫人が更に驚き「何だとヱ、村井勝子に、お前い先ア氣でも違ひいせぬう、先日逢たばうりで未だ充分よ氣心も知れぬうちよ」「イヤ叔母さん其樣な心配い一切無益です、アノ後私しい幾度も勝子に逢ひ互に氣心も分ッて居ます」夫「ナニ彼の後何を言立にして工場を尋ねたヱ」「夫い又色々と

用事を拵へましてサ、併し其用事ゝお話申すにも及びません、兎に角氣心ゞ分ッたゝら貴女に仲媒を頼むのです、成るほど貴女のお心でゝ身代ゞ釣合はぬとか何とゝ彼とゝ樣々の故障もあるでせうゞ私しゝ最う決心しましたアノ女を妻よするゝ、左もなくゝゞ生涯妻ゝ持ませぬと、今更何の樣な事を仰有ッても無益です 夫「夫ゝ又痛い執心、お前ゞ夫ほど見込だゝら何と云ても留る鮮ひ殊よ勝子ゝ綺倆と云ひ心榮と云ひ巴里よ二人となゝい女だゝらお前ゞ見込だのゝ當前だ私しも今更故障ゝ云はぬ、頼みとならゞ仲媒も勤めやうゞ、併し夫ゝ何時言込む積だヱ 祐「今日言込みませう、直に行て」と祐秀ゝ短兵急に答へたり

第四十回

「今日直よ」との短兵急なる輕路の言葉に男爵夫人も少し呆れたる樣子にて「だッてお前、今から行く中よゝ日が暮れるゞ 祐「ナニ此馬車で走らせれゞ馬ゝ良いゝら一時間と經ぬうちに着きませう猶だ四時だゝら大丈夫です 夫「でもお前の乘て來たアノ馬ゝ 祐「ハイ彼れゝ此馬車の馭者に任せて私しの宅まで乘返させます夫で此馬車ゝ私しゞ馭者を勤めて旨く走らせますゝら少も心配にゝ及びません」と一々言開きて終よ夫人を承知させ、我が馬を馭者に任せて自ら馭者臺よ身と置んとす、夫人ゝ餘り早速の事なれゞ、何とやら猶は呑込兼る如く「本統に夢を見る樣だ、念の爲めお前よ言て置が先達ても話した通りアノ村井孃よゝ行方の知れぬ兄があると云ふ事だゞ 祐「兄があらうと何があらうと其樣な事ゝ構ひません 夫「イヤサ、若し其兄が他日歸て來てお前よ迷惑を掛る樣な事でもあつてゝ 祐「イヱ伯母さん其邊の事ゝ最う悉皆考へてありますゝら直に馬を走せませう遲くなつてゝ困ります 夫「お前も本統よ性急だよ、私しゝ今までのゝ當人同士殘らず話を極てあッて唯儀式だけ賴まれたゝら別よ心配もなゝッたゞ今度のゝ夫と違ひ仲媒ゞ初て口を切るのだからお前ゞ旨く立廻ッて呉ねゞ困るよ 祐「旨くとて何う立廻ッて好いゝ分りませんゞ其時よなれゞ又臨機應變の智慧ゞ出ませう何でも貴女の宜い樣に願ひませ」と云ひつゝ早や手綱を取り馬に一鞭當れゞ馬ゝ矢の如く駈出し或ゝ右よ或ゝ左に町々を折曲りて一時間と經ぬうちにベルト街なる工場の前に着きたり、此時二人より先よ早や工場の入口よ立ち頻よ案内の鈴を推鳴せる一人の女あり夫人ゝ早くも其顔を見て祐秀に向ひ「ほゝ驚な、アノ女ゝ確ゝ先日此の工場で逢た澤部忠の細君の侍婢だよ、世話し相よ鈴を鳴すゝ何事だらう」祐「成るほど澤部夫人の侍婢でお古とゝ云ふ者です、分ッた先刻春水の話でゝアノ細君ゞ所天に打擲され、泣ながら毛村隱居の許へ歸たと云ましたゞ何でも隱居の許にも居難いゝら必ず勝子の許へ相談に來て居るのでせう、夫を侍婢が急な用事でもあつて後から尋ねて來たに相違ありません、先づ降て見れゞ分ります」と云ひつゝ男爵夫人を扶けて馬車より降り同じく入口よ進み行けり、お古ゝ益々心迫く如く遽しく鈴を推すにぞ夫人ゝ怪みて「何事です、何事です」と推問へるにお古ゝ滿足の返辭も得せず唯「大變です、何うしたら好御座いませう」と切々の言葉を吐くのみ、其中よ取次の少女來しにお古ゝ

之よ向ひ「澤部夫人を呼で下さい急用が出來ました、ア、心が迫く澤部夫人ハ何所よ居ます」と云ひながら驅外もばうりに戸を推開け其中よ躍入れり、祐秀も夫人と共に續て入り、暫しハ呆氣よ取られて樣側に立すくむに此時澤部近子ハ勝子と共に裏庭より歩み來りぬ、扨ハ祐秀の推量通り父の許に住兼て早や此家に來り居る者ならん、お古ハ見るより近子の傍に驅寄て「奥樣直よお歸り遊ばせ大旦那が公園地の垣の外で氣絶して倒れたとて今方、巡査が釣臺に載せてお家まで届けて來ました直よ醫者を呼び血を取て貰ッたけれど未正氣よハ歸りません、巡査の云ふにハ馬車に乘た女の後を追掛て居るうちに、年が年だから頭へ血が上り目が眩んで倒れたのだらうと申します醫者も事よ由ると是切で正氣よ復らぬかも知ぬと云ひますうら貴方を迎ひよ上りましたサア直にお歸り遊ばせ」　憐れむべし近子ハ驚くやら呆れるやら、顔色を青くせし儘兎角の言葉さへ吐ざるよ早くもお古よ引立られ輕路が方を見向もせず又碌々勝子よ分れも告げずして其儘に連出れたり、祐秀ハ男爵夫人と顔見合せ、言ず語らず合點したり、近子が父毛村隱居ハ娘ましさの餘り栗田嬢と爭ひて其揚句よ嬢が面倒臭しと逃去るを猶ハ遁らじとて追行きつゝ終に命を落せしなり、村井の一家よ一方ならぬ迷惑掛け其上我娘をさへ娘の如く待遇はぬ不義理非道の老人なれば斯る最後ハ自業自得と祐秀ハ左まで憐れとも思はず、斯くてある所へ村井勝子ハ今の椿事よ慾きたる其顔色を拭ひ消して出來り二人を座敷に通せしかバ男爵夫人ハ一通りの挨拶を濟せし後よて「時が時ゆゑ何とやら言出し難い樣ですが今日上ッたのハ祐秀に頼れまして、祐秀の生涯を定めに參りました」勝子ハ是だけ聞きて早や其心を悟りしうバット其顔を赧むるよ事よ慣たる男爵夫人ハ最早や無益の口上にて長く勝子に極り悪き想ひをさせるも詮なしと思ひし如く刻才なく取て入り「貴女ハ祐秀の貴女に戀焦れ此願ひが叶はねバ生涯妻ハ迎へぬと云て居ます」　最短き言葉なれど女ハ女の急所と知れり、生涯妻を持ぬとの一言す辭う」と是まで云て更よ一段の眞心を聲に籠め「祐秀ハ貴女の色好き返事を釣出すに充分ならん、勝子ハ煙よりも微なる聲にて「ハイ」と繩に洩せし儘、後ハ言ふやら言ぬやら又耻しげよ俯向くのみ、日頃利發の女なれど積る不幸に家さへ失ひ、生涯所天を持つ機のなからんと斷念めて只管慈善の道に委ねし身が端なくも侯爵の妻よとハ、夢ゥ、現ゥ、續く言葉の出ざるも道理ならん、男爵夫人ハ嬉げに、更よ祐秀が方よ振向き「サア御前の願ひハ叶ッたうら、何だ子男の曲よ下ばうり向て居てサ、先程私しに言ッた通り臨機應變よ何とうお言ひな」　祐秀も交際の席よ出てハ能く話し能く語りて他人の後よ落ぬ男なれど眞實心に愛情の滿る時ハ舌までも凝りたる如く漸く其顔を上げ來りて「嬢よ、云々〳〵」と云ひ掛たれど喉迫れ聲微りて聞も取れず、去れど無調法ある言樣ハえ嬢ハ其手を徐々と卓子の上よ置くに祐秀ハ之を取り熱き喞もて應へたり「夫」サア是で最う夫婦の指環を取交したも同じ事だ、後ハ二人で緩々と話をゞ好い、婚禮の日取萬端ハ私しが又相談を聞きませう、左樣なら」と云ひ捨つ二人を殘して男爵夫人ハ歸り去れり此時の祐秀ハ天下第一

の幸福の人ならん、去れど猶は「明日の十二時」最恐ろしき災難の横はれりとい神ならぬ身の知るや知らずや

第四十一回

扨も宿屋の主人傳藏い鷲根鷹三に強談られて詮方なくも獲物の半額を分與へんと明日の十二時を約束して悄々我家へ歸りしが、想ひ見れば鷹三假令ひ我が惡事を知るとい云へ口留の爲め半分を奪はんとい憎き所爲なり彼れ初より必ず長兵衛を殺させ後にて我より大金の半を絞り取んとの巧にて我家へ長兵衛を向たるのみうい長兵衛が大金を持てる由を故々吾れよ知せし者ぢり、彼れ初より斯る惡計あらば我亦惡計を以て彼れを落さん、好し〳〵、馬鹿正直に約束を守り明日の十二時まで待つ事かい今夜の中に彼の獲物を身よ着けて出奔せん、否や待て、彼れも中の爾る者なれば必ず我れよ番人を附け置けるに相違なし出奔せんとて其番人に見認められなば自ら禍ひを招くよ均し、如何にせば好からんうと樣々工夫を案せし末終に一計をい外ならず廊下の中程にある穴倉の戸を外し置き明日彼れが來るを待ち落入せて殺すの工夫なり、穴倉の戸い誰れも知る如く眞中に横木あり此横木を心棒としてクル〳〵と廻轉る者にて日頃い其一方に錠を卸せる故、自ら開く事いなけれど其錠を外す時い右を推せば右よ開き左を推さば左に開く、左右唯推すが儘にて人若し來りて其上に乘らば身体の重みにて戸を推す故、戸い自から引繰返り、人を落せば又舊の如く反り來りて塞るなり、殊よ此家の穴倉い深さ一丈二尺に及ぶ、之に落れば誰とても叻り得まじ其上に又入口も二個所よ在り一方い右に記せる廊下の中程にて荷物を釣卸す所なり、人の出入るべき所よ非ず、今一方い帳場の背後に在り之い品物出入の爲め人の出這入る口よして外より堅く戸を鎖し其錠い流行の文字合なれば一旦荷物口よ落入し人假令ひ幸にして命を損せずとも此口へ這上て內より戸を開くと思ひも寄らず、外より開かんとする者も其文字合せを知されば錠前動かず、既に一人の長兵衛を殺したる傳藏なれば行掛の駄賃よ今一人鷲根鷹三を殺すい物の數にも足ず、鷹三既よ死すれば彼れの頼みある番人い我が逃去る所を見るとも肝腎の訴へ行くべき主人なければ我よ於て恐るゝよ及ばず、爾なり〳〵と恐しくも思ひ定め直ちよ其夜の中よ自ら穴倉に忍び入り荷物釣入口の眞下に在る品物を取拂ひ成るべく其底を深くするなど用意萬端殘りなく濟せしい早や曉近き頃ありき、是よて最早や恐るゝ所なし明日い鷲根を此穴よ落し次第直に一方なる出這入口より降行きて兼て隱しある長兵衛の大金を取り直樣茲を出奔せんずと末の末まで手筈を定め即て寐床に就きたるい朝の六時過る頃なりしが一眠して目を覺せば既に九時半よて、泊れる客人い皆夫々の仕事に出行き後に殘るい唯だ番頭と書工倉田竹陰なり竹陰い散歩好の事あれば十時過にい必ず出去るべく番頭い用を言附け外に出さば鷲根の來る頃い唯我れ一人にて外に邪魔する者いなしと、第一に先づ番頭を呼び事を命じて取引先へ出し遣しよ良ありて竹陰も室を出、煙草燻らせながら表外の方へ出去りたり、竹陰の心よていい十二時前よ歸り來らば必ず主人傳藏の出去りたる留守

なるべく其間よ輕路祐秀が來る筈なれバ昨日定めし手筈の如く穴倉を撿めんと思へるならん、主人傳藏ハ斯くと知ねバ竹陰が出去りしを歡び是よりして只管鷲根を待ち居るうち早や十一時を過ぎ半を過ぎ今五分よて十二時と云ふ所まで達したれど鷲根の來る景色なし、彼れ慾に掛けてハ目のなき男にて百万法の半分を受取るべき約束よ遲刻する筈なきに、來らぬハ何故よやと傳藏の怪むも無理ならぬ彼れハ昨日倶樂部よて春木ガ我繪姿を持るのみ ら鳩川番作てふ舊名まで知れるを見て打驚き此上グズ〳〵せバ必ず春木の爲よ捕はるべし百万法の半分ハ惜けれど夫に目ガ眩れ命を捨るハ愚の至りと悪人の思切り好く、此事件の全くに片附く迄先づ高飛をするに如ずと、兼て米國より提來りし己れの大金を英京倫敦よて愛取るべき爲替よ組むなど彼是の用意よ忙しき爲め茲にハ來らぬなり、傳藏ハ固より斯る事まで知る由なけれバ今ハ既よ待兼て徐々と戸口に出、彼方此方を見廻すに此時向ふの方よりして我家を指て來たる一輛の馬車あるよぞ、若やと見れど鷹三ならず此馬車の客を誰とうする是なん讀者の既に推せし通り侯爵輕路祐秀なり、祐秀ハ約束の時刻を守り此所まで來りしに肝腎の倉田竹陰ハ孰れよ行きしぞ、影も見えず、彼れ昨日の約束を忘れたるか、否忘れしよハ非ず彼れハ主人傳藏の出去る迄と近邊を一廻して歸り來りしに宛も主人が戸口まで出し時にて且又祐秀の馬車が一方より輾り來るを見たれども我目算ハ食違ひ今主人よ認められてハ反て事を破るの恐れあれバ直に自ら横町に走入りて暫し身体を隱したり、主人ハ又馬車の中なる輕路祐秀を未だ探偵路田秀次郎とハ悟り得ず全く用もなき人ならんと再び帳場の後に退きしが獨り憐むべき輕路祐秀ハ手筈の違ひしとハ夢よも知らず馬車より降りて宿屋の入口に歩み入り、倉田竹陰ハ何所に行きしぞ我が來るを待兼て煙草の火でも附ん爲め己か室よ退きしなるらと訝りあぐら四邊をキョロ〳〵と見廻したり

第四十二回

輕路祐秀ハ力と頼む倉田竹陰の見えざるを怪みて頻りよ此方彼方を見廻せり、去れど此家の主人傳藏が鷲根鷹三を穴倉よ落さんとて殊更四邊の窓を塞ぎ家の中を最暗くなしある上、外の明き所より急よ入來りし事なれバ眼眩みて急よハ見えず、其中に主人傳藏ハ祐秀の顔を認め扨ハ昨日追出したる探偵が再び歸り來りしなるうと帳場より突々出來りて祐秀の前よ立ち「手前ハ昨日の朝追出したのよ猶此己を欺むく積で今度ハ姿を貴族に變へズー〳〵しくも遣て來たのだな、幾等立派な物を被たとて己の目を眩す事が出來る者かエ、手前ハ最う用事ハない、歸ッて仕舞へ、歸ッて仕舞へ」と輕路を推出さん樣子なり輕路ハ兼て竹陰の話しに十二時頃ハ主人の留守なりと聞きたるに斯く留守ならぬ所と見れバ我と竹陰の打合せハ全く破れし者ならんと早くも悟りたれど、夫にしても竹陰が猶ハ此邊よ居るにハ相違なし、何とうして其の出來るまでグズ〳〵手間取らせん者と思へバ、故と竹陰の耳に入れうしと「ナニ己も最う手前の樣な者よ用事ハないから今日ハ荷物を取りよ來たのだサア渡せ」と大聲に怒鳴れども竹陰ハ更よ來らず「ナニ荷物を取よ來たと、ツッサと持て行くガ好い 軸持て行くから三階より茲まで卸して貰

はうり「イヤ爾ゝ出來ぬ、今日ゝ番頭も外へ出て誰も家にゝ居ないうら己ゝ此店を番して居るのだ少しも兹を動られぬ祐「でゝ己が番して居るうら其間よ持て來て呉れ「馬鹿〳〵しい探偵に店の番をさせる奴がある者う、自分で三階まで登ッて行くが好いワ祐「アノ荷物ゝ重いうら己一人でゝ卸されぬ「夫ぢや人足でも呼で來い祐「此邊でゝ何處に人足が居る事う己ゝ一向不案内だうら手前が一寸呼で來て呉れ」と詰らぬ事を賺よ取り推問答に時を移せど倉田竹陰ゝ孰れに行きしぞ出來る樣子なし「人足を呼ぶ事が出來ねバ馬車の馬丁よ賴むが好いワ」と言掛けしが此時傳藏ゝ忽ち心頭に恐ろしき決心を浮め來れり此探偵路田こそ乘て我が疑ひし如く鷲根鷹三が我れに附け置く探偵ならん、鷹三ゝ中々の兇漢なれバ自ら來るを危しと見て取りて先づ樣子を探らせんと此者を寄越せしならん左すれバ此者が歸り行き大丈夫なりと知せる迄ゝ必ず鷹三ゝ來らざるべし、彼れの來らぬゝ我れに於て何よりの幸ひなり一層の事今此者を穴に落し我れ其後にて逃去らバ鷹三よ捕まる氣遣なし、彼れ此者ゝ遲きよ待乘ね、氣遣ひて自ら來る頃よゝ我ゝ早や遠く落延たる後ならん、好し〳〵此者を鷹三が身代りよ立て呉れんと早くも思案を定めたれば急よ思ひ出したる如く手を打て「アヽ危く忘れて居た手前の荷物ゝ今朝番頭が三階から卸して來て廊下の端へ置た樣だアノ暗い隅よ在るのが多分手前の荷物だらう、篤と見屆けて來るが好い、愈々爾と分ッたなら己も共々手を添へて馬車まで運んで遣うから」と打て更ッた挨拶も輕路ゝ別に怪まず、是も竹陰が來るまでの暇消なりと思へバ「好し〳〵撿めて見やう」と云ひつゝ廊下を隅の方へ歩み行くに宛かも穴倉の戸よ乘りしと思ふ頃、傳藏ゝ呼留めて「餘り暗ければ手燭を仮さうう」祐秀ゝ此信切を計畧と知ねバ蹈留りたる祐秀の重量よ推れて一方に傾き初め、クルリと轉回りて祐秀を穴倉の底に投込み戸ゝ又元の如く其口を塞ぎたり、アヽ祐秀ゝ地獄の人、落入りたるまゝ音もなし

第四十三回

輕路祐秀ゝ旨々と傳藏の計畧に罹りたり「蠟燭を借さうう」と呼留られしとき、祐秀ゝ何となく我が足許の動く如く思ひたれど、落し穴とゝ悟り得ず、悟らぬうちよ穴の蓋傾きて足ゝズルズルと辷りたれバ、悟りし頃ゝ既よ遲し、我身ゝ蓋と底との空中に在り、扨ゝ主人よ陷られしうと、思ふ間もなく最冷き最堅き穴の底に碎くるバうり我が身体を打附られたり、深さ一丈二尺の穴なり、祐秀素より運動に慣れたる男なれど何ぞ悶絶せざるを得ん、落ると齊しく氣を失ひ何事をも知ざりしが、漸くよして心附き、首を上げて見廻せども暗々として呎尺を辨せず、手を延べて四邊を探るよ手に接ふゝ土の床なり、其中よ何所となく最黴臭き匂ひのするにぞ、怪しみながら考えしが此時初て今までの事を思ひ出し我身が穴倉の底に落されし事を知れり、落されてより何時間經ちたるや自ら知る由なけれど身体に左までの怪我ありとも思はれねバ、永く氣絶し居たるよゝ非じ、我を此穴よ落せし後にて主人傳藏ゝ既よ逃去りたるうと思へバ心俄かに迫立ちて一刻も兹よゝ居られず、己れと言ひ樣、身を起さんとするに此時初めて腰の邊よ

痛みを覺え身体ハ立てども足ハ立ず、エ、我ながら言甲斐なし、大事を控ゆる身を以て斯ばうりの痛みよ屈すべけんやと頻に腰を揉みなどするうち漸く屈伸も稍や自由なるを得たれバ覺束なくも立上り蹌踉きながらも探り廻るに我が落たる所より一間足らず離れし所に壘々と積重ねたる者ありハ暗よりも知るべき酒樽なり此上に這登りて猶ほ探りながら撿むるに此穴倉最廣く三間も探り行きて漸く壁の如き所に着當れり、手先に充分の力を込め只管よ推試むれども堅きこと岩の如く一寸の動もあらし、兼て我れを落さんとて充分用意せし事なれバ素より出る事の叶ふべくもあらず、殆ど悔しさに堪へざれバ足を揚げて土の床を蹈破るバかりに地團太蹈めども物凄き靴の音ハ暗の中よ消去りて世界の靜なること恐しきバかりなり、エ、殘念だと絶望の聲を洩し酒樽の上よ尻餅つきて唇るを噛めるに此時、心の所爲なるう我耳に咄く如き聲ありて「愚なり輕路祐秀、汝を殺さんとて設けたる落穴なり、揉掻くとも逃出る道のある筈なし今よ汝ハ空氣の通はぬ此穴よて蒸死ん、饑たる鼠群をなして出來り汝の肉を食ひ盡さん」と聞ゆるよ似たり、打合せたる倉田竹陰ハ如何よせしや何故吾を救はんと勉めざるやと心に恨の念を起せバ又同じ樣なる細語き聲にて「竹陰とて如何で汝を救得ん竹陰ハ汝の親友に非ず唯一片の知合なり、危き場所よ蹈込みて汝を救ふ愚人よ非ず、綟言に時を移さず斷めて死で仕舞へ」と最無慈悲よ罵しるうと疑はる、人間凡て逃れ難き命の瀨戸よ臨めバ心樣々に亂れ行き樣々の聲聞ゆるとう、祐秀ハ再び身を起す氣力もなき迄よ失望せしが、失望の極る所よ奮發ありとう、頓て又思ひ返し

此儘死るも揉掻きて死るも死る味ハ一つならん悶掻ける丈ハ悶掻きて見んと、壁を探りながら穴の中をグルリと廻るに、廻り盡せしと思ふ遊よ樓子段の如く壁を切開きたる所あり、是なり、是なり、我が落たるハ荷物を釣卸す口よして此の所ハ人の出這入る口ならん此段を登り行かバ上よ必ず戸あるならんと、思ひ附くよ從ひ俄に氣力も增し來りし心持するよぞ、又探りて樓子段の絶頂まで上り行くよ茲よハ果して土戸の如く思はるゝ者あり先づ耳を當て外の樣子を聞くに、愈々主人の逃去りし後ならん、少しの音だよ聞ゆれバこそ、奮發ハ少しの間なり是よて又も失望せり「コレ誰か助けて呉れ、茲開けぬう」と我聲の潰るゝバかり我が手先の碎くるバかり且叫び且打けど何の甲斐なし、祐秀ハ張合も拔け、再び「エ、殘念だ」と尻餅附け身ハ楷段を轉がりて又も穴倉の底よ落込みたり、ア、哀れむべし〳〵

第四十四回

輕路祐秀が穴倉の底よて氣絶し居たるハ何分間なりしや、其間に曲者傳藏ハ輕路が旨く落たるを見濟して獨等の事ハ是より記す所を見て知り得べし

扨も曲者傳藏ハ輕路が片頬に笑を浮め「好し〳〵是で彼奴の乘て來た馬車を賭せバ其後で弛々と逃られるワへ」と吐きながら表戸に出で、輕路が待せある馬車を呼びて、衣裝より幾等かの銀貨を取出し之を其取者よ與へつゝ「旦那ハ手問ハ取れるとうら馬車だけ先へ返して呉れと云ふ事だ」と傳ふるよ取者ハ素より怪みもせず其儘に返り去りたり、是よて家の內よハ唯己れ一人なり、若しや我が仕

度中に入來る人ありてい面倒なりと徐々と入口の大戸を鎖し初めぬ、アヽ彼れ表の戸を〆置きて裏口より逃去る積ならん、倉田竹陰い孰れに行きしぞ今歸り來らざれバ、〆出されて此内に入る能はじ、憐れむべき輕路祐秀も穴倉の中なる鼠の餌食となりて果あん、アヽ想ふだよ恐しき始末と云ふべし、傳藏が今や戸を〆終らんとする時しも背後より輕く其肩を叩く者あり、叩かれて傳藏い驚きよ震ひ上り「誰だ」と云ひながら振向くよ「驚きにい及ばぬ僕が返ッて來たのだよ」と云ふい外ならず倉田竹陰なり「オヽお前う吃驚した　倉泊ッて居る客が歸ッて來たのに何も吃驚する事いあるまひ」と樣子ありげよ笑ひながら傳藏の顏を眺む、傳藏い胆よ傷あり薄氣味惡く「多分晩方まで歸るまひと思ッて居たのよ　倉所が此通り歸ッて來た、是うら晩まで外へい出ぬが、君い何故晝日中入口の戸を〆るのう　傳晝日中でも客い皆出て仕舞ふし、番頭も使ひよ遣り是うら私も外へ出る積だうら内が丸空になりい仕まい、一人お客が來たぢやあいう」傳藏いギクリとして「何だッて　倉僞云たまふお、三階の廿一號室に居た、路田秀次郎が居るだらう　傳「ナニ居る者う、お前の知る通う昨日の朝、追出して仕舞たもの　倉でも今馬車に乘て來たぢやないう　傳「アレい疾くに歸ッて仕舞た　倉歸る者う今君が自分の衣嚢う賃錢を拂て馬車を還して遣る所を此眼で現んで置たが」と云ひつヽ四邊を見廻すよ、輕路の影さへ有ざれバ何か事ありしに相違なしと「併し此戸口でい話も出來ぬ、少し聞度い事があるうらサア此方へ來て貰はふ」と云ひつヽ傳藏を帳場の方へ連れ行んとするに傳藏い惡人に似合はざる憶病の男と見え早や顏の色を變へ「ナニもお前よ聞れる樣な事いない　倉無いう有るう今分るよサア來たまへ」と傳藏を帳場の方へ突飛し、自分い傳藏が〆掛ける入口の戸よ手を掛けて惡く之を〆終りしい如何なる目算のある事にや「サア茲を〆て置けバ誰よ妨げられる心配もない緩々と話を仕やう」とて引摺る如く傳藏を引立て帳場の後よ推据ゑて己れも其傍はらよ座をしめしが、抑も此帳場の背後い乘ても記せし通り穴倉の出這入口にて堅く土戸を鎖しあり、倉田い此土戸よ背を廻して傳藏に向ひ是れより輕路祐秀の事を問ひ初めんとするに此時、穴倉の中よりして誰か戸叩く者ありと覺しく、定かに音い聞えねど我等中よトン〳〵の響を傳ふる如き心地せらる、扨いと心を潛むるよ今い疑がふ所なし全く穴倉の中に人あるなり、竹陰い日頃零落の男なれど彼れ中々馬鹿に非ず、早や既に輕路が穴倉の内に落されたるを悟りたれバ、個い實に容易ならざる塲合なり迂濶な事していい、救ひ得べき者も救はれぬ事とならんと寸しの暇に充分なる思案を定め故と聲迄も柔げて「フム主人、旨く遣たな、路田を穴倉よ落して仕舞ッて」と笑ながら鎌を掛たり

第四十五回

倉田竹陰い宿屋の主人傳藏が輕路祐秀を穴倉よ落せしを見破りて痛く心に怒りたれど今い怒るべき時よ非ず、兎よ角も傳藏を欺きて輕路を救ふが肝腎なれバ故と聲まで柔げつ「主人い旨くアノ野郎を穴倉に落したな」と鎌を掛るよ傳藏い悸ッと驚きたれど猶そらとぼけて「何だと穴

倉へ　倉「是サ主人、僕よ迄隠すとい君にも似合はぬ、僕も元來が探偵なぞ大嫌ひだらう今度彼奴が來たら痛い目よ逢せて遣ふと思ッて居たのだ」と誠しやうなる倉田の言葉よ主人も少し安心せしが初めて唇に惡人の笑を浮め來り、夫ほどお前もアノ探偵を憎むなら横合から口を出さず一切私よ任せて置けば私が旨く片附けて仕舞て遣る　倉「大賛成〳〵、だが併し待たまへ彼奴を穴倉の中へ入れて置くい隨分險呑だよ」傳「ナニ險呑な事がある者か、落た儘で今頃い最う死で仕舞ッた」　問ふよ落ず語るに落る、此言葉よて察すれば竹陰の推量露違はず今しも穴倉の中より戸を叩きし如くなるい輕路祐秀に相違なし　倉「イヤ險呑だ、若し活て居れば何うもるう、君も是切で穴倉へ這入らぬと云ふ譯よい行く舞ひ、若し其時に彼奴が戸の背よ隠れて居て突然君よ飛附たら何うするう彼奴め探偵を勤る位だらう隨分腕力もあり人を組敷くよい慣て居るよ、君を捕へて警察へでも連出す事になれば君い其筋の探偵を殺さうとした者と認められ飛だ災難を受ける事よなッて來るぜ」傳「ナニ大丈夫、最う死で居るよ」倉「ソレ爾思ふうら間違ひだ、君の耳にい聞えぬだらうが、僕が今此戸に遁れて居ると丁度中から叩く様よ此戸が僕の背中へ響いた、夫だから僕い彼奴が穴倉の中に居る事を察したのだもの」傳「此一言よ主人い急よ恐れを抱けり、彼れ穴倉よ大金を隠しあり是より直に取出して逃去らんと思ふ折なれば、路田が穴倉の中よて饑死るを待つ暇あし、眞に倉田の云ふ如く穴倉の中にて彼れに組敷るゝ様の事ありていい大變な目に逢ふ所よ、エ、本統に内から戸と叩いたのう　倉「叩かなくて、僕が何うして知る者う、叩いたらう初て悟ッたのだ」と云ひながら傳藏の顔を見るに彼れ宛も安き心なく、如何よせんかと戰ぎ恐るゝ様子なり　倉「若し君、彼れが君を捕へて警察へ引立る事よなつて見たまへ彼奴平生うら非常よ僕を憎んで居るから僕までも罪よ落されるよ極ッて居る　傳「爾だ何うしたら好だらうか　倉「外に仕方い無い、二人で穴倉へ這入て行き彼れを捕へて叩き殺して呉れ無か、お前あら力も非常よ強いから彼れよ組敗れる氣遣も無いだらう　傳「爾サ僕の力なら大丈夫だらうと思ふけれど一人と一人でい未安心が出來ぬ、君も一緒よ來て呉れたまへ、僕い未穴倉の案内を知ぬから君が手燭を照して先へ行けば僕が後うら從て行く　傳「イヤ先へ行くい危ないよ　倉「爾でない、假令君に飛附ても僕が直よ彼奴の後へ廻り背中うら組附くから、サア兎に角も手燭の用意だ、猶ほ念の爲よ繩も持て行う」とて竹陰い先よ立て用意をするに傳藏い日頃より竹陰が痛く探偵を憎めるを知れる故、少しも疑ふ様子なく結句幸ひと思ふに似たり、頓て竹陰い自ら太き麻繩を持ち、手燭を傳藏に推與へて「サア、君が是でも恐しいなら僕が先へ行て遣るが階子段だけい君が先よ立たまへ、此通り入口の大戸まで〆て暗いうら手燭が先でなければ蹈外すうも知れぬ」傳「でも戸の直背よ彼奴が居て、明るが否や飛掛れば何うしやう　倉「ナニ其様な心配いない、念の爲め戸を開けたまへ僕が身体を突出して見るうらと云ふに傳藏い初めて安心し衣嚢を探りて鍵を取出し徐々と穴倉の戸を開けり、竹陰い一歩入りて出來り「ソレ大丈夫入口にい居ない、彼れ必ず、底の荷物の影よ隠れて居るよ」とて漸く傳藏を勵

しつ手燭を持たせて先に立せ、穴倉の中に入り楷子段を下らんとす、傳藏も初ゐ痛く恐れたれど、四邊を見舞はして祐秀の姿の見えぬを見て左まで恐るゝ/\も足らずと思ひしが、徐々楷子段を下り初めぬ、ア、彼れ我が前ゟ敵あるを恐れて、背後ゟ敵あるを知らぬとゐ——

第四十六回

倉田竹陰ゐ主人傳藏の背後ゟ從ひ梯子段を下りながら早そろ/\と手ゟ持る繩を解延べ隙間あらば投掛けんと油斷なく身搆へたり、斯と知らざる傳藏ゐ頓て穴倉の底ゟ降着き氣味惡げに聲を低くし「サア是からゐお前ゞ先へ立て呉れ」とて倉田ゞ方を振向きたり、今こそと楷子の上ゟ繩を輪ゟして投掛るゟ狂ひ違はず傳藏ゞ身体ゐ旨く其輪の中ゟ入れゞ倉田ゐ隙さず飛で降り繩を引〆ると共に彼れを蹶仆し暫く間ゟグルグルと縛り上げて「サア路田君出て來たまへ、甘く行たよ出て來たまへ」と打叫ぶ、路田の輕路ゐ先ほど楷子段より轉ゞり落し儘、絶望に氣も遠くなり夢の如く現の如く起も得遣ず仆れ居たるゞ此聲を聞くと齊しく蹶起きて「オ、倉田君ゥ、有難い」と躍上ッて馳せ寄るゐ歡び左こそと察せらる、倉「曲者を縛ッたゥら君先づ其手燭を拾ひ上て呉れたまへ」手燭ゐ痛く投たと見へ毀れて仕舞て蠟燭ばゥりになつて居る」と云ひつゝ輕路ゐ其蠟燭と拾ひ上げ曲者の顏に差附けしか一目見て又慙き「ヤ、ヤ此奴め、僕を穴倉の中へ落し最う逃て仕舞たゞらうと思ッたが米逃ずゟ居たのか 倉僕が附て居るもの逃がす者か、君が先程此家に這入り穴倉へ落たと見たゥら直に僕ゐ遣て來て此奴を欺むき到頭此通取押へたのだ」

傳藏ゐ此問答を聞き扱ゐ一杯食されしゥと悔しさ歯を嚙鳴し「ウヌ貧乏書工奴己も探偵の片割だッたか」と罵れ共其甲斐なし、身ゐ容赦もなく縛れて一寸も動き得ず、倉田ゐ「欺れ己と此紳士が探偵か探偵でないゥゐ今に分る」と言捨て更ゟ輕路ゟ向ひ「君能く怪我もせずに濟だ子エ 祐 イヤ何だか廊下が暗いので探り〳〵歩くうち足の下が動く樣ゟ思ッたゥら扨ゐ穴倉へ落るのゥと氣が附て見て覺えた運動法の手練ゟ由り直ぐ自分から飛込む樣ゟ足を跳たゥら幸ひ大した怪我もあく少し顏の皮を擦剝た位で濟だが夫でも一時ゐ氣絶した樣だッた 倉「成る程顏ゟ血が流れて居る、併し夫ゐ後で拭ゞ好らう、直に先づ詮索を初やうでゐないか」とて倉田ゐ自ら手燭を取り、先づ周圍の壁を撿むるゐ若しや彼の大金を壁に塗込しゟゐあらぬゥとの用心ならん去れゞ壁ゟゐ疑はしき所もなけれゞ更ゟ倉中を見廻すに茲に入おるゐ種々の酒樽と薪の類なり「事ゟ依ると薪の間にあるゥも知れぬ」とて薪を一々取上て酒樽の上ゟ積移せゞ怪しと思ふ者も見えず次ゐ酒樽を動して其底まで撿むるに是亦何の手掛なし、倉田も輕路も殆ゞ失望して暫しい顏を見合すのみなりしが、此時一方の隅に當り猶撿め殘したる酒樽一個あるを見出したれゞ倉田ゐ之に目を注ぎ「君、彼れを撿めて夫でも猶はないとならゞ我々ゐ最う斷念せねゞならぬ 祐「爾だ最う探ものゐ彼ればゥりだ」と二人ゐ其樽の傍に近寄るゟ、曲者傳藏ゐ縛られながらも斯くと見て「其樽ゐ極强い燒酎だゥら手燭を以て撿めると火ゞ移る、浮雲い〳〵」と叫び立つ、ア、彼奴が是ほど心配するゐ愈々茲ゟ隱しある證據なりと二人ゐ反て力を得其樽に手を掛るに

如何よも焼酎を入たる記號あり、振動うせゞ中い九分通り詰りし如く酒の動く音も聞ゆ、此樽の下よい二本の丸本を横へて臺としたれゞ、臺の間の空地こそ必らず隠所ならんと二人い勇立て樽を取除くるに悲しや茲よも一物なし、百万法の大金なれゞ假令銀行紙幣よもせよ随分塲所を取る筈なるに是ほど探して見えざるい全く此穴倉の中にいなき爲あるゝ夫にしても傳藏が最心配氣よ二人の一舉一動を打目戍り殊に此樽に目を注ぐい怪むべし彼れ必ず工夫の上よも工夫を凝し此樽の内に容易よ人の氣附ぬ隠し所を拵へあるよ相違なしと倉田い更よ一入の不審を生じ再び焼酎の樽を取りて其蓋を脱さんとするよ蓋の端の方に直徑四寸ほどなる大穴あり、穴の口い栓もて堅く塞ぎたり、察するよ小出の度此穴より批杓様の者を入れ酌出すならん「路田君。此栓を抜て見やうう」爾サ念の爲めだ、抜きたまへ「倉好し〳〵」とて倉田が抜に掛れゞ傳藏い又も心配氣よ「夫を抜けゞ火ゲ這入る、火ゲ這入る」と叫ぶ「ナニ火ゲ這入れゞ手前を茲に殘して吾々い逃出す迄の事だ」と云ひなゞら終に難なく其栓を抜き去るよ個い开も如何よ、栓の裏に一條の條鉄あり焼酎の中に垂れたり、眞逆よ大金を酒の中よ浸しあるべしとい思はねど、猶は其條鉄を取りて引上るに中より出來るい堅く口を塞ぎたる馬口鉄の鑵なり、ア、是れ何の鑵詰ぞ、傳藏い茲よ至り最早や叶はずとや思ひけん「最う謝罪た許して呉れ、其大金を三人で三割に分て遣るうら」倉田い打驚き「何だと此鑵詰が大金だと」傳其中へ猶だ同じ鑵が四個入て居る、夫れが皆大金を詰めてあるのだ」流石悪人にい悪人だけの悪智慧あり紙幣を鑵詰よして

酒よ浸すとい巧にも考へたり、倉田い輕路と目配せしながら「主人、吾々二人に大金を分ると云ふのか」傳「私の命さへ助けて呉れゝゞ分て遣るとも此金い最う丁切眞二が盗だ者となり其筋でも詮索せぬうら今日よも眞二が殺されて仕舞へゞ誰も取よ來る者いない、一人前に三十万法、何と旨い仕事じやないか」彼れ最早や己が身の逃れ難きを知り利を以て二人を惑さんとす「三割とい随分旨い相談だ、併し先づ主人ゲ此金を手に入れた始末を聞き度い、君ゲ自分で長兵衛を殺したのう」傳「其様な事を聞くよい及ばぬ、此相談に同意なら早や此繩を解て呉れ」倉「イヤ夫をいゝねゞ同意も出來ぬ若し外に相棒でもあるう時よい三人で分た後で其相棒うら警察へ訴へられるうも知れぬ」傳「ナニ相棒ゲある者う初め長兵衛を此家へ向けて寄越した男ゲ今度の客い大金を持て居ると知せて呉れたうら取分心を附けて居ると忘れもせぬ二月廿八日の夜、食ひ酔て歸ッて來た其時い殺さうと云ふ太い了見もなうッたゲ十一時頃三階を見廻ると室の中で鼻息の聲ゲ聞えるうらアノ客人ゲ早や眠ッたうと思へゞ急よ慾心ゲ込上て、ソッと其戸を明て見ると客人い椅子よ凭れて居眠りし、前の卓子に大金の入た革包ゲ在るので今此革包を攫へて行けゞ生涯安樂よ暮されるうと思へゞ急に欲くなり突々と進み寄り革包を手よい取て見たゲ、若し客人ゲ眼を覺せゞ直に我罪い露見する故、一層殺せゲ近道だらう幸ひ四邊よ人もなしと兼て用心の爲めよ持つ大刀を取出して、俯向に凭れて居る其乳の下を目掛けウンと一突、突た所ろ、アッと云たが此世の名殘で其儘脆くも死で仕舞た、後でい悪い事をしたと少しい後悔もしたけれど、悔

だとて歸らぬ事、知ぬ顔して我が室へ歸ッて來ると都合の好い時い好い者で、其後へ直よ丁切眞二と云ふ奴が遣て來て私の代りよ捕まッたのだ、サア是だけ聞が相棒も何もない事い分るだらう、約束通り此繩を解て貰はふ」　長々の白狀を倉田い無言にて聞終り「好々夫だけ聞が用いない、サア路田君直に警察へ此始末を訴へやうへる、今三割の約束を極たじやないか」ナニ約束なぞ極る者か、幾等貧乏をしても盜坊の上前を刎る樣な男じやない、丁切眞二を助ける爲よ斯して證據を探して居るのだ、是だけ證據が分ッたらい今日の中に手前を警察へ引出して丁切眞二と入交らせ首切臺へ乘せて遣るワ」傳藏い悔しさに身を揉掻き「己れを訴たへれが手前も己れの相棒だと言ひ立て遣る、相棒でありながら分前が少いとて腹を立て此の通り訴たへ出たのだと己れの口先で裁判官を欺むけが手前も己と同じ罪だサア訴へるなら訴へろ」窮鼠反て猫を噛む、彼れ今い到底逃れ難しと見て倉田ア危しと云ふも中々なり

竹陰を威せるなり、竹陰い斯る事を恐るゝ者に非ず猶は祐秀と相談し大金の鑵詰い元の儘よおし置きて現場を警察官に見するが好らんと、又鑵詰を條鐵の儘、栓の裏に結び附け燒酎の中よ沈め、傳藏が身体い揉掻くにも揉掻けぬ樣、高手小手よ縛めて重き酒樽に結び附け、万に一つも手落のなき樣、何うら何まで氣を附けて二人い穴倉より出去りたれど人誰れう過ちなうん、二人い最も火の移り易き燒酎樽の上よ殘る蠟燭を消もせずに其儘立置きし事を忘れ居たり、ア

第四十七回

思ひしよりも事都合好く運びたり、傳藏を捕縛して既に大金の所在も分りし上い丁切眞二の無罪い云ふ迄もなし、輕路祐秀い一刻も早く此吉左右を我が許嫁なる村井勝子に知さんと思へが穴倉を出るが否や倉田竹陰よ打向ひて「君い直よ辯護人春木の家よ行き此次第を知せて呉れたまへ左すれが春木が然るべく警察へも訴へるうらならぬ」と云ふに倉田い早や心得て走り去れり「コレ〳〵倉田君、馬車よ乘て走らせ給へ馬車賃い茲よ在るうら」と祐秀が衣裳を探りて幾千の銀貨を取出せし頃い倉田が姿い既に見えず「恐しい足の早い男だ、馬車よりも能く走るだらう」と呟きながら輕路い自ら馬車を雇ひ大急ぎに急がせて彼の慈善工場に到り見るよ勝子い昨日より既に今日い便りのある日と知り待焦れたる樣子よて祐秀を迎へしが祐秀の顏よい先程穴倉よ落し時、擦剝きたる血の痕あり、嬢い之を見て「貴方先ア其傷い何うかされたのです」と問ふ、祐秀い是より穴倉の一條倉田竹陰の働きより既に確かなる證據を押へ留めし事までを詳しく語「最う是で心配する事いない、此後い春木が旨く運んで呉れるから」と慰むるよ嬢い一層安心の体にて「でい先ア近々兄も助かりませうが、私しい今朝から何れはどう心配でした、貴方も最う汚覽なさッたでせうが今朝の新聞紙に變な事が出て居ましたから私しい最う迚も助からぬと思ひました」と氣遣はしげなる言葉の端、何事なるや祐秀い合點行かねが「エ、今日の新聞に何の樣な事が　聆「ハイ名前を匿した投書があつて夫に兄の

事を細々論じ、丁切眞二い全く無罪だのに死刑を宣告したのい裁判の間違だ、第一長兵衛の大金を丁切眞二が持て居ぬのが不審の本だから彼れを罪する前よ何故宿屋の家捜しをせなんだかと此様に書てありました帖ハテな夫い誰が投書したのう、何でも代言人の書生う何うだらう、夫にしても別よ心配する事いあいじやないう勝「イヤありますよ此様な事を書くと其筋でい早く死刑にして仕舞はねバ追々世間で彼是れ云はれると思ひ直にも兄を殺しいせぬうと思ひますよ帖「ナニ其様な事がある者う最も春木の話しでい程なく哀訴が却下される時分だと云ッたけれど今日の内に警察へ届けて行うバ丁切眞二の罪に益々疑はしい所が出來るうら警察より裁判所へ通じ、死刑の執行を日延する、其内よい愈々曲者傳藏が罪よ服するうら最う何が何でも心配する事いない」勝子い胸を撫卸し「夫はど貴方がたが骨折て下さッたうらい最う心配い致しませんよ兄が牢うら出て來るのを待つばうりです、けれども斯なると又氣に掛る事がありますす、兄い助うッたとても此國に住む氣い致しますまい爾すると私しい又直よ兄よ分れねバなりません」と言差して涙ぐむい骨肉の情なるべし「何うして此様に不仕合せでせう、兄妹に生れながら少しの間も一緒よ暮す事が出來ぬとい」と嘆くを輕路い慰めて「ナニ其様な事いない、今となれバ其方の兄御い私の兄だ、助うる上い私も共々引留めて此巴里に住はせるか、夫とも最う巴里に居るのが何うしても面白くないと云へバ田舎に私の領地が有るうら共々よ引込まう、夫に又澤部近子も近々愈々離婚よなると云ふうら其上い兄御も更めて夫婦になる事も出來やうし勝

イエ、夫い出來ません、近子い愈々離婚よなれバ尼寺へ這入ると云て居ます、私しも夫が好らうと云びました澤部忠から離縁を取て直に又私しの兄の妻よなるとい世間へ對しても好くありません帖「併し尼寺へ這入るなど、其決心い感心だが毛村隱居が承知しまい勝「イヽエ貴方い未御存無いうも知れませんが毛村隱居い昨日の中に死で仕舞ひました帖「ナニ彼の隱居が死んだとな、でい唯日公園地の外で氣絶して、其儘内へ連れ込れたと云ふ事だつたがアレ切り勝「ハイ彼れ切り氣が附ずよ死で仕舞つたと昨夜知せがありました」と二人の最陰氣なる話に引替へ此時戸外い俄よ騒々しく「火事だ〳〵」と騒立つ聲聞ゆ、祐秀い窓より首を出し望み見て「オヤ、確かよチケトン街の方角で煙が上るが、好いか知らん」と其眉をひそめたり

第四十八回

扨又倉田竹陰い穴倉より立出てより輕路祐秀よ分れ其足よて一散よ春木辯護人の家を指して走りたり、竹陰の足い輕路祐秀の評せし通り實よ馬の脚より達者なれバ彼れ少しの間よ春木が家の前に着き玄關にて案内を乞ふに春木い今朝ほど裁判所に出たる儘、未だ歸り來らずとの事なり、斯と聞くや竹陰い又足を返し直よ裁判所の方へと馳行くに幸ひにも道にて春木が歸り來るに逢ひたれバ、四邊の人にい頓着せず直よ手を張り口を開き「實よ意外の結果を得た是から直に警察署へ訴へて貰はねバ」とて穴倉の一條を詳しく物語るよ春木も歡ぶと一方ならず「夫い實よ君の手柄だ、僕も先刻から其事が氣よ掛ッてならぬうら好い加減よ裁判所を切上て此通り

返ッて來る所サ、最う既よ三時過だから一刻も猶豫い出來ぬ直よ僕から其最寄の警察へ届けて出やう、サア直よ」とて是より竹陰の後に從ひ春木い中にて此後の運動の仕方を考へ、今鏘詰の中よ在りと云ふ長兵衛の大金い其實丁切眞二の金なるゲ、彼れ無事よ放免せらるゝ時い其金を如何よすべき、夫を旅費にして外國よ行くべきう、否幾等自分の金とい云へ斯まで人の口端に掛りし者を今更ら我物と言出すい世間体面白からず旅費い我と輕路祐秀にて調へ遣り彼の大金い慈善病院よでも寄附するこそ好らめなど思案未だ盡ざるうち早やチケトン街の角よ出たり、此時横合より人を叱して馳來るい確よ警察署の喞水よして二頭の馬急しく之を引けるよぞ「オイ何處うに火事ゲあると見える」と春木ゲ首を擧る間もなく早や四邊にて「火事だ〳〵」との聲聞え往來の人俄よ騒ぎ立り、竹陰い斯と見て早足よ二三間進み出しゲ、其火元を見て宛も呆氣よ取れし如く「ヤア大變だ、己の居る宿屋だ、曲者傳藏の家だ」と叫びし儘、立すくみて動も得せず、如何よも火事い彼の宿屋なり、群集ふ人々口々に評判し「何でも穴倉うら火ゲ出た樣だ」「ナニ彼の傳藏と云ふ奴い先頭の犯罪うら悪皆客が減り借金たらけよなつたうら自分で火を附て逃たのだ」「丙だ〳〵先日から家を賣物よ出してあつたが未だよ買人が附ぬうら彼奴必ず保險料を受取るが増しだと思ひ此通り火事を起したのだ」「イヤ爾でない先程から店の戸が閉てあつたうら何でも外出した留守の間に釜戸の燒殘りうら火が出たのだ」と噂取々よして鎭らず春木い呆れたる竹陰の手を引きて人込を潜り〳〵漸く宿屋の前まで出たるに此時内側の壁い既に燒落たりと見え、山を崩すうと疑はる、恐しき物音聞ゆ續いて前面の壁も將よ頽落んとする如く搖々と動き出せしゆゑ銘々に逃去らんとす春木倉田の兩人も其人波に推流され凡そ半町ばかりも下りて但有る軒下に身を寄せしが茲ならゞ先づ怪我いなしと互に發と息と吐き、其後い唯顏と顏見合すのみ、家の燒しい惜むに足らぜ、又曲者傳藏が穴倉の中に灰となりしも悲しむにい足ざれど丁切眞二を助くべき大事の證據を燒盡せしい如何よすべき大金を中に詰めたる馬口鉄の鏘も既に火の熱に解流れ中なる紙幣い灰となりて形をも留めぬならん、茲よ丁切眞二の無罪なる證據ありたりと叫び立るも誰う又信用せん、唯傳藏の身体のみい黒焦になりて殘るとするも人い疎匆よて燒死しと思はんのみ、二人の望みい今や傳藏の命と共よ盡きたり、竹陰い失望の中よも自ら思ひ返せど、此火事も全く我ゲ過ちなり、燃殘りの蠟燭を火の附き易き燒酎の樽の上よ置きたり、蠟燭燃盡して其火直に燒酎に移りしより其樽い破裂して四邊の薪類よ燃ひろがり終に此有樣よ到りしと鏡に照して見るゲ如し、殊に彼の鏘詰を取出しい滴々樽の上よ落ち猶は乾かずよありたる故、之ゲ火の傳はる元となりしに相違なし、斯く一一に考へ來れゞ倉田竹陰い自ら我心を愧むる由もなく、忽ちワッと聲を放ち「エ、情けない〳〵」と地圖太蹈みて泣出せり

第四十九回

證據漸く現れて愈々警察署よ訴へ出んと云ふ間際に至り唯少しの手落の爲め今までの骨折全く水の泡とならんとす倉田竹陰が悔しがりて男泣よ泣出すも無理ならず、春木ハ傍らより慰めて「コレサ悔くもあらふが仕方がない、矢張我々の運が悪いのだ、人込の中で泣立るハ見ともない倉田君最う斷念めたまへ、斷念たまへ」と其肩を撫揺るよ「是が斷念めよとて斷念められるう、エヽ殘念だ、殘念だ、僕ハ是から警察へ出て今までの次第を殘らず言立て來る」春「イヤ丁ないよ證據が悪く燃て仕舞たら何を云ふても警察でハ取上ぬ、事に由ると君が放火の罪よ落され飛だ目に合ふも知れぬ」倉「何の様な目よ逢ても好い夫で丁切眞二が助れバ僕ハ其身代よなつたと斷念める」春「君ハ何を云ふのだヲ、君が放火の罪に落されたとて夫で何うして眞二が助かる者か、君が爾まで熱心になつて晃れるハ何よりも有難いが、此事ハ最う吾々の不運だら何と云ても取返しの附け様がない、外よ猶だ少しハ工夫があるら、是より其方へ力を盡さう、君も其氣になりたまへ」と言葉を盡して說慊すよ漸く合點の行きし如く「成るほど爾だ燒た者ハ仕方がない、けれども僕ハ唯だ火の早い燒附の上へ蠟燭を立て置た自分の馬鹿さバ腹が立つ」春「夫ハナニ君一人の落度でない輕路も矢張り氣が附なんだ畢竟ヤツとの事で目的を達し其嬉しさに氣が迫たのだ、僕にしろ其様な場合になれバ矢張り細い所まで氣ハ附ぬよ」倉「君が爾云て晃れバ少しハ我罪が輕くなる氣持ハするが夫にしても外よ未工夫があるのヲヲ」唯一つの手掛と頼みた